
吸血鬼は淫らな舞台を見る

赤いからす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼は淫らな舞台を見る

【Nコード】

N6235F

【作者名】

赤いからす

【あらすじ】

舞台は51番目のアメリカの州になった近未来の日本。アドバイザーとなった吸血鬼の瑠諏ピンは特殊能力を使いサトウ警部補とともに難事件に挑む。しかし、事件を解決させていくにしたがって瑠諏は自分自身でさえ知らなかった驚愕の真実に辿り着く。

プロローグ

そんなに遠くない未来。

財政破綻した日本はアメリカの51番目の州となった。

人口が6000万人を切り、財政の建て直しが困難になっても一定の生活レベルを引き下げることが拒んだ日本人はアイディンティティ（存在証明）を捨てた。

そんな日本州に人間の姿をした吸血鬼が突如として現れた。

確認された数は40以上。

吸血鬼に弱点などなかった。

照りつける陽射しの下を平然と歩き、十字架を突き出すと首をかき上げて見詰める。

日本州全域に戒厳令が発令された。

吸血鬼と人間の戦いが本格的にはじまろうとした矢先、血液中に潜む得体の知れないウイルスの影響（州政府報道官発表）で人間の数が激減し、残り少ない血液をめぐる吸血鬼が仲間同士で争う事態に発展した。

ウイルスにより大きな犠牲をこうむることになった人類と吸血鬼の代表者が手を結んで法を厳守し、お互いを傷つけない取り決めを交わした。

吸血鬼は日本州で2つの恩恵おんけいを得られることになった。

州政府立会いのもと、血液銀行から毎月5バッグ（1バッグ400ml）の血液が支給され、住居もAK地区（旧秋葉原）限定ではあるが合法的に許可された。

尚、犯罪行為をした吸血鬼には人間と同等の厳正なる処罰が与えられる。

州というカテゴリーに落ち着いた日本だが……

いまだにアメリカの国旗には51個目の がつけられていない。

一部の極端で保守的な思想を持つ者から反発はあるものの、すで

に赤と白のストライプに心が染まっている元日本人から不満の声は上がらない。

吸血鬼も人間社会へ溶け込むのにそんなに時間はかからなかった。

なぜなら陰の結びつきも強固なものになりつつあったからだ。

* * *

堅牢な貨物用コンテナを間仕切壁のように並べ、迷路のようになっている敷地内は子供たちがかくれんぼや秘密基地として利用するには絶好の場所。

ただし、夜になると野良猫の贅沢な寝床として活用する以外に使い道はないと思われた。

男がその敷地内を訪れるとそれまで顔を出していた月が風で流されてきた雲によってすっぽり隠されてしまった。

川を挟んだ対岸にはオレンジ色の2基のクレーンがライトに照らされながら巨大な船体を急ピッチで組み立てているが、境界線でも

あるかのように男が踏み入れた敷地にはぱたりと賑やかさが失せていた。

一画に息を潜めて建っている古びた倉庫の前に高扱そうなスーツを着た男がドアをふさぐようにして立っていた。

「来ました」

スーツを着た男が無線機に語りかけ、スピーカーから無愛想な声で『入れる』とだけ指示されるとキーと耳障りな音をさせてドアを引く。

スーツを着た男は中に入らずドアを閉めた。

32坪の平屋建て。

むき出しの鉄骨が三角屋根を支え、床は緑色の防塵塗装でツルツル。

靴の底がキュツ、キュツと擦れる音が響くほど意外にも清掃が行き届いていた。

「こんなところに呼び出すなんて、もうちょっとマシなところはなかったのか？」

男は冗談まじりに倉庫の真ん中で待つ腰の曲がった老人に軽く毒を吐いた。

「まあ、そう言っつな。少し前まで政府の備蓄米を保管していた由緒正しい倉庫だぞ」

老人が愛しそうにタバコを吸うと伸びきった灰が重力に負けて床に落ちた。

「備蓄米？フフ……おれたちは食べ物でもなければ動物園の見世物でもない」

「わかっておる」

「いいや、わかってない。おれたちは人間を次ぎのレベルへ引き上げてやれるのに最近の扱いは目に余る」

「レベル？」

「得体の知れない伝染病が蔓延してバタバタ人間が死んでいく中、おれたちに噛まれた人間は感染せずに生き延びているじゃないか」

「血を吸う化け物になるオマケつきじゃろ」

老人の目が卑しく光った。

「人を襲わないという契約を交わしてから吸血鬼の犯罪は起こっていない」

男は迎賓館で行われた調印式の出来事を持ち出した。

「ところがその契約を破るものが現れた。血を吸うために人間を殺している族やかいがな」

「証拠はあるのか？」

男が歯を見せて笑った。

「いずれ証拠を突き出してやる」

「楽しみにしてる」

「まわりくどいことをしなくても一気に片をつけてもいいんじゃないぞ」

老人が目尻から放射状に伸びる皺と同じくらい目を細くして訊く。

「脅しか？」

「誠意を見せてくれれば少しくらい先延ばししてもいいのじゃが…

…」

「どんな誠意だ？」

「なんでも血を舐めるとその血を流した人物の過去の場面が見える
吸血鬼がいると聞いた」

「ああ」

男はとぼけるように生返事がかえした。

「犯罪が増えていちいち鑑識の結果を待ってたら埒が明かない。その能力を持つ吸血鬼を貸してくれんかの？」

頼みながらも老人の目の奥には傲慢さがもっている。

「吸血鬼に容疑がかかっている事件を担当することになったら仲間のためにその吸血鬼が嘘をつくかもしれないぞ」

男が探るような目付きで忠告をする。

「君を信頼しておる」

話し合いの先に光が見えたからだろうか、老人は短くなって煙が出なくなったタバコを手から滑り落とした。

「ありがたいね」

男は鼻で笑った。

「話しは少し変わるが、君たちの生みの親は誰なんだ？どこにおる？」

「いま、その質問はナンセンスだ。なにをたくらんでいる？」

男は血のように眼を赤くして乱杭歯をむき出し、老人に歩み寄った。

「そんな脅しはワシには通用せんぞ」

老人は一步も引かず、表情も冷静だ。

「急に生みの親を知りたくなった理由はなんだ？」

「質問に答えんか！」

老人が首筋の血管を浮き上がらせて怒鳴る。

「それはできない相談だ。というより不可能な相談だ」

「はぐらかすな」

「本当だ。おれもよく知らないんだ」

「嘘をつけ！」

「さっき君を信頼していると言ったばかりだろ。それにいざれ歴史が証明してくれることになる」

「まあ、いい」

老人は興奮した自分を恥じるように下を向く。

「そんなに知りたければ、おれたちの仲間になれよ」

男は乱杭歯から粘り気のある涎を垂らした。

「遠慮する」

老人がヤニだらけの黄ばんだ歯を見せて断ると、男は目の色と乱杭歯を元の鞘に戻した。

「ケツ、喰えない男だ」

「老いぼれの肉は硬くてまずいぞ」

お互い冗談半分の言い争いをしたあと、男は「またな」と言って倉庫から出て行った。

間もなくすると倉庫の隅から闇と同化していた一人の女が老人のところまで歩いてきた。

これから就職の面接に向かう大学生のような白いブラウスに紺色のスーツを着ている。

「大丈夫ですか？」

女は黒縁メガネを神経質に中指で上げて知的な視線を送る。

「問題ない」

「吸血鬼をあまり怒らせないでください」

「非公式での話し合はいつもこんな感じじゃ」

「しかし…」

「案ずるな。こつこつ危険を冒すのは白々しいあやつらの態度が改まるまでじゃよ」

倉庫には老人の卑屈な笑いが響いた。

第一章 最初の事件 1・サトウ警部補の憂うつ

血で染まった絨毯が事件の凄惨さを物語っていた。

マイケル・サトウ警部補は血を避けながら現場となったりリビングに足を踏み入れ、一瞥すると眉間に深い皺を寄せた。

錆くさい臭いが部屋に充満して居心地は最悪。

ビール瓶が割れて破片が散乱し、真新しいベージュの壁紙には大量の血がへばりついていた。

狂った絵描が自らの駄作に嫌気が差して赤い絵の具をぶちまいたように一種の芸術作品に仕上げている。

血を流していた被害者が救急車で運ばれたときまだ脈はあったらしい。

被害者は頭と背中に銃弾を受け、いずれも至近距離から発砲されたもの。

頭部は貫通射創で致命傷になるかもしれない。

日本がアメリカの51番目の州になって銃を使った犯罪は後を絶たない。

しかもここAK地区ではおもちゃ同然に銃を扱う愚か者が急増している。

先週は買ったばかりの限定フィギュアを地下鉄駅で置き引きにあった直後、盗まれた若者が容赦なく銃を撃ちまくって無関係な通行人を流れ弾で巻き添えにさせてしまう痛ましい事件が起こったばかり。

アメリカ本土にならうように銃規制を緩和したことが原因。

法律、通貨単位、なにからなにまでアメリカの言いなりだ。

国の膨大な借金をアメリカに背負ってもらい、一時的に得る安堵感のために大切な文化や治安を失った。

日本州が誕生してから独特な文化を持った若者が集うAK地区が最初にアメリカ的な思想を植え付けられた地区だともいえる。

電車から駅に降りれば価値観を押し付けられる。

PCの部品を米粒のようなネジから揃えられる街。

経済が冷え切った日本州で唯一活性化した賑わいをみせるAK地区にはびこるのは欲。

その欲を手に入れるため、事件は多種多様に広がり、増殖する。

そして、なにより“奴ら”が人間社会に溶け込んでから未解決事件が増えているのは考えすぎなのだろうか？

口に出してそれを言うと差別だと訴えられかねない。

サトウがAK地区に配属されてから“奴ら”が事件に関わった証拠を掴んだことはない。

“奴らは絶対、人間に手を出さない”が常識になりつつある。

すでに現場保存作業を終えてた鑑識課で巡査課長の安本がリビン

グにやってきてサトウに声をかけてきた。

「判別するのに2週間はかかる」

心なしか小さい声で報告をする。

「被害者のDNAと一致しない血痕を探すのにそんなに時間がかかるのか？」

サトウは年上の安本に穏やかに注文をつけた。

指紋偽装など容易い世の中になって一番信憑性のある証拠は血液。

「なるべく早く報告できるようにする」

安本は額の冷や汗を拭った。

「犯人がケガをした可能性だつてある。怪しい奴のDNAが見つかれば犯人逮捕への近道になる」

「わかった」

不満顔を残さず安本はサトウから離れていった。

事件は二時間前、閑静な住宅街で大学生が自宅で何者かに撃たれた。

複数の銃声と悲鳴が聞こえ、近所の人が警察へ通報した。

最初に到着したのは近隣の派出所に勤務する警官で、駆けつけたときには壁、テレビ画面、真っ白いソファーなどに血が飛び散っていた。

犯人らしき姿は目撃されていない。

手掛かりになるようなものといえば微量の白い粉。リビングのテーブルに残されていた手鏡に付着していた。

友達とドラッグをやっているその友達と喧嘩したか錯乱して銃を撃ったのかもしれない。

凶器に使ったと思われる銃は見つかっていない。

金品など盗まれたものがあるのかどうか確認がとれてないので、強盗や恨みによる犯行なのかもいまのところ不明だ。

鑑識から具体的な報告があがってこない以上、聞き込みなどの地道な捜査をするしかない。

「うわ〜ひどいですねえ」

お気楽な感想をもらして現場にやってきたのは巡査長の原田だった。

その反応を見てサトウは微笑みながら言った。

「慣れてきたな」

「そうですか」

原田は頭を搔いて照れた。

「初めて2人で担当したバラバラ殺人の現場でおまえ吐いたからな」
サトウがからかうように言う。

「あのときはちゃんと我慢して現場から離れて吐きましたよ」

「あたりまえだ」

原田が両手で口を押さえながら走っていく姿を思い出してサトウは嘔出しそうになった。

「でも、これだけ事件が続くと家に帰れる日がいつになるのかわかりませんね」

「そう愚痴るな。ところでなにかわかったか？」

原田はメモ帳を捲った。

「電話で確認したところ、被害者はこの杉内家の息子でY大学の教育学部に通う21歳の杉内浩輔に間違いありません。3人暮らしでご両親はクラシックのコンサートに出かけていまして、いまは搬送先の病院に向かっています」

「他に情報は？」

「斜め向かいの家に住んでおられる近藤さん宅の奥さんの話だと午後7時くらいに大音量の音楽が杉内家から流れてきて、近所から男の声で“うるさい！”と叫んだそうです」

「その叫んだ人物を特定しろ」

「はい」

原田はメモ帳をポケットにしまった。

「おれも聞き込みに回るか……」

サトウがリビングから出ようとする携帯の着信メロディーが鳴った。

流れてきたのはベートーヴェンの『運命』。

原田は笑いをこらえるため、サトウに背を向けた。

サトウは着信音でかかってくる相手を区別しているので『運命』が流れた時点で原田は誰なのかわかった。

「はい、サトウです」

『どんな感じだ？』

電話の相手は直属の上司である刑事部長の二宅で微妙に甲高い声はストレスを誘発させるときもある。

「悲惨なものです」

『そんなことはわかってる。聞きたいのは事件の解決にどれくらいの時間がかかりそうなのかと質問してるんだ』

三宅の言葉はいつも棘々しい。

「事件は……解決させますよ」

サトウは苛立ちを抑えて冷静に答えた。

『頼りない答えだな。わかった人員を増やそう。すぐにアドバイザ―をそっちに向かわせるから、もう少し現場で待ってる』

「アドバイザ―？」

『吸血鬼だ』

吸血鬼……どうして“奴ら”なんかと一緒に捜査を?!

「ちょっと待ってください。おれは化け物と捜査なんか……」

『背に腹はかえられないんだ』

三宅は言葉をかぶせてきてサトウの意見を受け付けない。

「一週間くれたら事件に目星をつけます」

『それだと困るんだよ。今回のような事件は早く解決してくれないと事件はたまる一方だ。おれも上から尻を叩かれてるんだよ。このままだとリストラの対象にされちまう』

「わかりました」

サトウは抑揚をつけずに返事をした。

顔がアジア系なのに名前がマイケルとつけられたことで子供の頃のサトウはいじめの対象として格好の標的にされた。

顔に泥を塗られ『黒人にしてやるよ!』と屈辱を受けたこともある。

あだ名は“太平洋”で日本とアメリカの間にある海、つまり中途半端な存在という意味でつけられた。

地道に勉強してやっと警部補にまでなれたこの地位を易々と手放すわけにはいかない。

2年後に警察の民営化がほぼ決まっている。

真っ先にクビを切られるのは事務職で高給取りのキャリア組らしい。

現場の警察官の数を減らせば住民からの批判は高まる。

おれの知ったことか！

サトウはキレる寸前で携帯を切った。

「畜生！」

見てはいけないものを見てしまった原田はサトウから視線を逸らす。

「おい、原田！」

サトウは八つ当たりに近い衝動で大声を出した。

「は、はい」

原田が緊張した面持ちで背筋を伸ばす。

「聞き込みはいったん中止だ」

「はっ？」

「これから現場荒らしがやってくる」

「現場荒らし……ですか」

「アドバイザーとして奴ら、いや、吸血鬼が捜査協力してくれるんだとよ」

「吸血鬼……」

もっと詳しい経緯を知りたかった原田だが、いまのサトウを刺激するのは好ましくないと判断して質問するのをやめた。

それにしても事件が起こることを予測していたみたいに根回しが

早いな。

サトウは納得できない感情をどこで爆発させたらいいのか迷っていた。

第一章 最初の事件 2・瑠諏ビンの能力

その吸血鬼がやって来たのは三宅の電話から約32分後。

肌張り付くようなピチツとした革のパンツを穿き、季節はずれのロングコートを羽織り、上から爪先までの配色を黒で統一している。

ただ、肌を露出している顔から首にかけての肌は透けるように白かった。

「ご依頼を受け、アドバイザーとしてお手伝いさせていただきます
瑠諏^{るす}ビンといます」

顔を下げ、意外なほどの低姿勢で吸血鬼は接してきた。

細身の体、目、鼻、口、眉までも鋭利な刃物のように細く切り揃えられている。

目の下に黒いシミがあり、寝不足でできたクマなのか毒々しいメークをわざと施したのか判別ができない。

テールコートとシルクハットがあれば古風な吸血鬼の出来上がりだ。

「あ、ああ、おれは警部補のマイケル・サトウだ」

「は、原田です」

ギクシャクした雰囲気の中、2人の刑事は警察手帳を見せて挨拶を交わした。

諏諏からはなんの反応もない。

サトウがフルネームで自己紹介すると必ず『ハーフというやつですか?』と、冗談半分で尋ねてくる人が多い。

佐藤は日本で一番多い名字だが、カタカナでサトウは珍しい。

父親は亮平、母親は靖代でごく普通の名前の純粋な元日本人。

悪ふざけでつけたとしか思えない名前は昔のカリスマ的な歌手から父親が取ったらしい。

「遺体は?」

2人の刑事に興味がないというより無視するように瑠諏は引き締まった顔つきで質問してきた。

「まだ、死んでないんだよ」

サトウはやや馬鹿にするような口調で答えたが、瑠諏の無表情は変わらない。

「現場を荒らしていいですか？」

瑠諏がゆっくりとサトウへ視線を向けた。

「許可をもらっているなら……」

サトウが言い終わらないうちに瑠諏は血の染み込んだ絨毯へ歩み寄ると身を屈めた。

「なにするんですかね？」

原田がサトウの耳元にささやく。

「さあー」

サトウはおれに訊かれても困るといふ顔をして首をかしげた。

「心配には及びません。速攻で事件を解決してあげますよ」

自信たっぷりの宣言にサトウと原田は顔を見合わせる。

瑠諏が四つん這いになって絨毯を愛撫するよつにペロツと舐めると、サトウと原田は顔をしかめてその異様な光景を黙って見詰めた。

瑠諏の体がブルブルツと震え、眼球に赤い光を宿した。

目の前が真っ赤だった。

血を舐めると一瞬だけそうなる。

瑠諏は華美な劇場の最前列に座らされ、舞台が始まるのを待つ。

アンティークの赤いビロードの椅子が緩い曲線を描くようにびっしり並んでいるが、観客は瑠諏しかいない。

重厚で華麗な装飾を施したシャンデリが劇場内を照らし、天井には青空に向かって笑顔で飛んでいく天使のフレスコ画。

壁面を3層に区切った棧敷席が取り囲む。

やがて垂れ下がっていた真つ赤な幕に魚のウロコのような半円状のたるみがいたるところに出来てせり上がっていく。

現れたのは板張りの舞台。

一軒家をスパツと縦に切った断面図のごとく観客にわかりやすく見せるための舞台セット。

青年がソファーに寝そべってテレビを見ている。

画面には派手なパフォーマンスをしているロックバンドが映り、大音量を流してリビングをコンサート会場とシンクロさせていた。

テレビに飽きたのか背筋を伸ばして大きな欠伸をすると、テーブルの上のプラスチックケースから鏡、ストロー、剃刀の刃を出して並べ、白い粉を鏡に載せると剃刀で丁寧に線状に揃える。

よく見ると先端を斜めに切ったストローで白い粉を鼻で吸っている。

青年は気持ち良さそうに深呼吸を繰り返す。

瑠諏は夢でもない現実でもない世界で繰り広げられる舞台を観賞
していて「おやつ？」と思った。

それがなんなのか現実の世界へ戻ってから調べないとわからない。

最後に残った一本の線を鼻から吸引しようとしたとき、リビング
のドアが開いた。

青年とドアを開けた人物は目を合わせたままお互い息を呑んだ。

ドアを開けたのは中年の男。

間もなくすると青年とその男は言い争いになり、痺れを切らして
ソファーから立ち上がった青年はリビングから出ていこうとする。

すると男は32口径のリボルバーをスーツの内側から取り出し、
躊躇なく青年の背中へ銃弾を浴びせた。

その後、男は胸ポケットからハンカチを出して青年の血を染み込
ませると、壁に向かってハンカチを叩きつけ、芸術的な画を完成さ

せた。

さらにビール瓶を割って争った跡を残す。

明らかな偽装工作。

犯人を狂人に仕立てようとしている。

最後に中年の男は青年の頭を撃ち、ソファアの端に置いてあった四角いクッションで顔を隠した。

真っ赤な幕が上から下りてきて、舞台は閉幕。

瑠諏も同時に瞼を閉じた。

再び体を振るわせると赤かった目が黒い虹彩へと戻った。

瑠諏は無言でお酒が並べられたキャビネットの上の写真立てを睨む。

写真は南の海らしき綺麗な砂浜で撮ったと思われる、三人が写り込んでいる。

「この男です」

瑠諏が指さしたのは右の男性。

左は女性で真ん中は被害者の青年。

「父親じゃないのか？」

サトウが声を張り上げて訊く。

「そつでしようね」

瑠諏が冷淡な笑みを浮かべて答えた。

「どうして父親だと決め付けることが……」

「いま、父親はどこに？」

原田が意見を言い終わらないうちに瑠諏が尋ねる。

「息子が搬送された病院ですけど」

「すぐ行きましょう」

原田の答えを聞くと瑠諏は歩きはじめた。

「待て！」サトウが慌てて呼び止め、厳つい顔で尋ねた。「証拠はどこにある？」

「私の脳から送信された映像の中にあります」

瑠諏はこめかみを指でトントンと突いた。

「そんなものは証拠にならん」

「私は血痕を舐めるとその血がどのような状況で流れたのか客観的な映像として見る事ができる特殊能力を持っています。映像の中心は常に洒落た舞台を鑑賞するような感覚です」

「そんなこといまず信じてと言われても理解できるわけがない」

サトウの理になつた発言に原田もうなづいた。

「わかりました」

瑠諏は散らばっていたビール瓶の破片を拾つと、「失礼」と言つて原田の手の甲を尖つたガラス片で切つた。

「なにするんだ!」

原田が手を引つ込めて傷を確かめようとするより前に腕を掴み、指で血をすくつて舐めた。

「ひっ……」

原田は短い悲鳴を上げた。

「おい!」

サトウがたまりかねて胸を突こうとすると、瑠諏は手のひらを伸ばして拒否をする。

「ちょっと待ってくださいね」

瑠諏がさつきと同じく体を震わせ、目を赤くして突っ立ったままマネキン人形のようになつた。

間もなくすると目を開けた。

「原田さんでしたね」

「ああ」

原田は手の甲を庇いながら返事をした。

「あなた、真面目ですね。熱心に聞き込みしている様子が見えましたよ」

「あたりまえだ！」

原田が怯えながらも怒りをつのらせる。

「しかし……」

瑠諏は意味ありげに言葉を切った。

「しかし、なんだ？」

訊きかえしたのはサトウで、瑠諏は軽く咳払をしてから問いかけに答えた。

「斜め向かいに住んでおられる近藤さん宅の奥さんから午後7時くらいに近所の誰かが杉内家に向かって“うるさい！”と大声で叫んだと原田さんがサトウさんへ報告したと思いますが、原田さんはすでにその人物の絞り込みに成功しています」

瑠諏が聞いているはずのない二人の会話を暴露したことで、サトウは気味の悪さを感じ、原田の顔は青ざめた。

「どういうことだ？」

サトウは非難する視線を原田に向けた。

「すみません」

原田が頭を下げててもサトウの表情は緩まない。

「許してあげてください。原田さんは報告書に書くのが億劫になっただけですよ。現場では熱心に仕事をしています。ただ、事務的な仕事が苦手なだけです。それに大声で叫んだ人は犯人じゃありませんし」

原田のかわりに瑠諏が許しを請う。

サトウはしばらく腕組みして考え、ため息まじりに言った。

「署に帰ってからじっくり説明してもらおうぞ」

「はい」

原田は心から反省している返事をリビングに響かせた。

「それでは被害者の両親に会いに行きましょうか」

「待て！おまえが幻覚状態で見た映像は証拠の裏づけにならないぞ」

リビングから出ていこうとした瑠諏をサトウが呼び止める。

「なりますよ」

「あのなあ……」と、サトウは呆れ顔。

「ご心配なく。証拠はなくても犯人は逮捕できます」

象牙のように白い顔で微笑まれたとき、妙に説得力を感じたサトウは原田へ車を回すように命じた。

そのとき原田の携帯が鳴った。

「……はい」

原田はひと言だけ返事をする。携帯を閉じた。

「たったいま息を引き取ったそうです」

「そうか」

サトウは静かに返事をかえしたが、心の中では“この疫病神め！”と溜諏を罵っていた。

第一章 最初の事件 3・速攻

病院の裏口に回転灯の明滅をやめた救急車が停まっていた。

診療時間はとくに過ぎていたのでER（救急室）を除き、病院は静まりかえっていた。

被害者の両親は寄り添い、肩を落として長椅子に座っている。

廊下を挟んだ処置室には白いシートを全身にからかけられた息子の遺体がストレッチャーに載せられていた。

すでに霊安室に運ばれていると思っていたサトウは両親がまだ息子の死を受け入れられず、病院側が配慮して処置室に置いたままなのだろうと推測した。

気を遣って2人だけにしているのか看護師たちの姿はない。

父親の名前は杉内武、48歳。

大学を卒業してから一度も転職することなく商社に勤め続け、人

事部長に昇進したばかり。

四角い縁取りメガネと経歴から厳格な父親といった感じを受ける。

母親は杉内早苗。

武よりも6歳若くポツチャリ体系。経済面で不自由なく夫に頼っている印象だ。

「この度は息子さんが大変なことに……お悔やみを申し上げます」

サトウが警察手帳を見せ、できるかぎり気の毒そうな顔をした。

遺族に声をかけるのは苦手だ。

2人は立ち上がり、丁寧に頭を下げて再び顔を上げたとき、父親の武の視線はサトウの後ろへ注がれた。

全身黒ずくめの男に釘付けた。

「彼は吸血鬼なのか？」

武の尋ね方には不信感が滲んでいる。

“私は吸血鬼です！”という瑠諏のわかりやすい格好はさっそく捜査に悪影響を及ぼした。

「ええ、彼はアドバイザーの瑠諏といいます」

答えにくそうにサトウは苦笑いした。

「吸血鬼が捜査協力を……すごい時代になったものだ」

「必然的な時代の流れです」

瑠諏の余計なひと言は早苗から泣き顔を消し、武の表情を硬くさせた。

「はじめて吸血鬼を見たものでちょっとビックリしますな」

武は慎重に言葉を選んで平静を保った。

「お2人はずっとコンサート会場におられたんですか？」

瑠諏が不躰な質問をいきなり浴びせた。

「えっ？ええ……」

「当然でしょう」

早苗は若干迷っているのか歯切れの悪い返答をしようとしたところで武が割って入りきっぱり否定した。

さあ、どうする吸血鬼。

瑠諏がこれからどう出るのかサトウはしばらく見守ることにした。

全責任は三宅にあるのだからかまやしない。

「わかりました。でも、息子さんがドラッグを吸っていたことはご存知でしたか？」

瑠諏は真顔で尋ねた。

とてもじゃないが配慮が感じられない質問の仕方だった。

「浩輔がそんなことするわけないわ！ねえ、あなた？」

早苗はすぐに異をとнаえ、武に同意を求める。

「そ、そのとおりだ。浩輔にかぎってそんなことはしない」

ほんの少し間をあけて武が答えた。早苗が憤慨しているのに対して冷静だ。

「奥さん、本当に知らなかったんですか？残念ながら現場には白い粉とそれを吸うための道具一式がリビングに残されていました。売人や一緒に吸っていた仲間とのトラブルも考えられるので正直に話してください」

瑠諏は早苗に視線を投げた。切れ長の目は怯えた獲物を捉えるかのように鋭い。

「本当に、知りません」

早苗の目には涙。死んだ息子の名誉を守ろうという必死さが伝わる。

「いまここで話すことなのか！」

武が猛然と反発する。

「事件を早く解決するためですよ」

瑠諏も引き下がらない。

「なんて無礼な奴だ」

「息子さんを殺した犯人は殺害後にソファーにあったクッションを

顔にかぶせて撃っています。これは憎しみからかけ離れた行為です。よって犯人はごく身近な近親者ということも考えられます」

「夫とはずっと一緒でした」

早苗が絞り出すように声を出した。

「息子さんが殺された時間の前後に近所で旦那さんを見かけた人がいたり、コンサート会場の監視カメラや係員に旦那さんが会場から出ていく様子を目撃した証言を得れば偽証罪に問われますよ。いいんですか？」

瑠諏の容赦のない質問に耐え切れなくなったのは武のほうだった。

「わかった。おれはチケットを忘れたことに気づいてコンサートがはじまる前に一度家に帰った。でも、それが息子を殺したことはない」

「チケットを忘れた？ということには家に帰られたことを認めるんですね？」

瑠諏の目が細くなる。

「ああ、そうだ」

武は開き直るように返事した。

「どうしてそんな重要なことをいまままで隠していたんですか？」

「疑われると思ったからだ」

「息子さんが殺されたのに、自分の身が心配なんですね」

瑠諏の言葉が効いたのか武は下を向いて黙った。

「あなたがチケットを忘れて家へ取りに戻ったのは本当かもしれない。しかし、息子さんが白い粉を鼻から吸っているのを見てあなたは怒り、逆ギレした息子さんと口論になった。それがエスカレーターとして思わず銃で撃ってしまったんでしょね」

理解できるかは別にして特殊能力のことを説明もせず、証拠もないのに瑠諏は遠慮なく武を犯人だと断定した。

「な、なにを根拠に……」

武の声に明らかな動揺が走った。

「根拠というわけではありませんが、自首してもらおう情報がそろそろくるころです」

サトウは病院に向かう車中での会話を思い出していた。

運転手は原田、助手席にサトウ。瑠諏は後部座席で窓から後ろに流れていく景色をつまらなそうに見詰めていた。

そして、顔を横に向けたまま口を開いた。

「ひとつだけ頼みたいことがあるんですが」

態度は悪いが口調はかしこまっていた。

「なんだ？」

サトウはサイドミラーを覗き込みながら用件を訊いた。

「現場に残っていた白い粉の成分分析を最優先でお願いできませんか？」

「かまわないが、どうしてだ？」

「犯人を自白させるための材料になるからです」

サトウは携帯で鑑識に連絡して白い粉の成分分析を急かせた。

「満足か？」

恩に着せる狙いで問いかけると瑠諏は「ええ」と気の抜けた声で返事して難味ありがたみなど感じていない様子だった。

まあ、この事件の結末がどうなるかによっては黙っちゃいないがな。

これからどうするのかお手並み拝見とばかりにサトウは後ろ手に手を組んだ。

「来ましたね」

瑠諏が廊下の先から聞こえてくる足音に耳を傾けた。

小太りの男がせいぜい息を切らしながらやって来た。茶封筒のような紙質のクリアファイルを手渡したあとも肩で息をしている。

「じくろじく」

サトウが労いの言葉をかけると小太りの男は他にも仕事が残っているのか体を揺らして去っていく。

クリアファイルからクリップに挟まれた報告書を取り出してサトウが目を通した。

少しびっくりするような顔をしてそのまま瑠諏に引き渡す。

瑠諏は報告書を眺めたあと、クリアファイルを原田に渡して無表情で語りはじめた。

「息子さんが吸っていた白い粉の成分が……わかりました」

もったいぶった言い方をして瑠諏は間をつくった。

「天然のハツカのメントールが99・9パーセントで残りの微量な成分は香料。つまり清涼菓子です。息子さんは粉状のお菓子を吸っていただけなんです」

「な、なんだって！でも、どうして鼻からそんなものを吸うんだ？」

武は切羽詰って訊く。

「鼻から吸引することをスニッフといいます。少量でシャキとする気分を味わえる効果もあります。息子さんの場合は映画に出てくる悪役の真似をしていたのかもしれませんがね」

「そ、そ……そんな」

武は絶句して膝から崩れ落ちると早苗が慌てて支えた。

「早苗、すまない」

武の謝り方は自分に対する情けなさより、妻を労わる感情がこもっていた。

「このままだと息子さんも浮かばれない」

瑠諏の言葉に反発するように武は背広の内側から銃を出して早苗のこめかみに銃口を突きつけた。

「あ、あなた？」

早苗は現状を把握できず、目を白黒させている。

しまった！凶器に使った銃を持っていたのか！

サトウは腰に巻いているホルスターから銃を抜き、原田もあとに続いて銃を構えた。

「近づくな」

武は早苗を引きずって後ずさりする。

「奥さんを離すんだ！」

サトウが銃を向けながら声を張り上げる。

「頼む。一緒に逝かせてくれ」

武の手は震え、銃がタカタタ揺れている。

「心中はたんなる殺人ですよ」

瑠諏の表情は冷ややかだった。

「う、うるさい！」

武がトリガーに力を加えようとしたとき、瑠諏が信じがたい俊敏な動きで武の背後に回った。

そして、耳元へ静かに脅迫した。

「首筋に針で刺したような傷痕を残すだけで吸血鬼の烙印を押すことができます。やめてほしかったら銃を捨ててください」

「やれるもんならやってみろ。人間を吸血鬼化したらおまえたちに対する世間の風当たりは強くなるぞ！」

「たぶん吸血鬼は大手を振って外を歩くことができなくなるかもしれませんね」

瑠諏は悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「2人ともやめるんだ！」

サトウは険しい顔で忠告したが、どちらに標準を合わせるべきか決めかね、瑠諏と武に交互に銃口を向けた。

「どうします？私たちの仲間になりたくなければ銃を捨てて自首する道もありますよ」

狙われているにもかかわらず瑠諏はサトウを漫然と無視して武に問いかける。

「脅すのか？」

武は眉を寄せた。

「あなたがトリガーを引くのが先か、私があなたの首から血を吸うのが先か勝負しましょうか？」

瑠諏が酷薄な笑みをたたえて尋ねる。

それまで顔を横に向けて現実逃避していた早苗のこめかみから銃を離れた武は自分の頭に銃口を移動させた。

……バン。

銃口から火花が散った。

しかし、誰も呻き声を発してしない。

呆気にとられているのはトリガーを引いた武本人で銃口を天井に向かって突き上げている。

「ヒヤッとしましたね」

瑠諏が武の腕を掴んで上に向けていた。

声のトーンとは裏腹に武の腕を雑巾みたいに絞って銃を手から離した。

落ちた銃を蹴り、リノリウムの床に滑らせながらサトウのところへ届ける。

「自首すれば罪は軽くなったのに」

瑠諏が悔やむようにぼやく。

サトウから指示される前に原田が応援を呼んだ。

制服警官に両脇を固められ、武が連れていかれる。

一度だけ振り返って妻の早苗と視線を合わせた。

“すまない”と謝っている声がサトウには聞こえた。

早苗が後を追っていく。

「それでは、私もここで失礼します」

瑠諏が頭を下げて別れを告げる。

「ちょっと待て！背後に回って脅すより、さっさと取り押さえるか銃を奪えばよかつたんじゃないのか？」

「自首するチャンスをおあげたんですよ」

「吸血息が人間に同情するとは驚きだ」

サトウは皮肉るように言った。

「同情？違いますよ。自首してもらわないと事件を速攻で解決できませんから最後まで我慢したんです。いまのところ杉内武さんは病院内で騒ぎを起こした発砲罪と器物破壊罪で警察に連行されただけです」

「あの様子だと息子のことも正直に話してくれるだろう」

サトウは警察の威信をかけて強気な姿勢を示した。

「それはサトウさんの腕しだいですね」

言い方は冷たい印象を受けるが、瑠諏の目は笑っていた。

第二章 過去の事件 1・苦い記憶

サトウが勤めるAK地区警察署は1階に生活安全課や会計課などの総合案内が設けられ、刑事課は2階に構える。

知能犯係、盗犯係、組織犯罪対策係、鑑識係、記録係がそれぞれ全面アクリルパネルのパーティションで区分されていた。

時間は午前9時47分。

スポーツ新聞を読んだり、ネットゲームで暇をもてあましていたり、携帯で長話しに花を咲かせたりと昼休みじゃないのに署内にはダレきった雰囲気の流れている。

事件が多発する夜まで英気を養っている……ともいえるが。

民営化の準備が着々と進む中、リストラの噂がささやかれている上司は注意をしない。

唯一、刑事部長の三宅だけが部下に目を光らせ、仕事中心の生活を好んでいるようだが、最近は席を外すことが多くなった。

意外と喫茶店にでも入ってコーヒーを飲んでくつろいでいるのかもしれない。

サトウは届けられたばかりの大きめの封筒からファイルを引っぱり出した。

「捜査資料なら郵便じゃなく電子メールで送ってもらえばいいんじゃないですか」

原田が隣の席から資料をチラ見して生意気にもアドバイスしてくる。

「おれは有機ELの画面を眺めるよりも紙媒体の資料を読むほうが頭にスイスイ入ってくるんだよ。おまえは自分の仕事をしてろ」

原田は亀のように首を縮め、パソコンの画面に顔を向き直した。

サトウは資料に視線を落とした。

元同僚がコピーして送ってくれたものだが、また資料に目を通してあの忌まわしい事件を思い出すことになるとは……。

事件は7年前、サトウがここのAK地区に赴任する前にいた人口3万人ほどの小さな町で起った。

町内で居酒屋を営む宮川国男、47歳が河川敷でゴルフクラブを握って青空に高々と白球を打ち上げていた。

ラストと思って放った感心の一打は放物線を描くとコッソーンと硬い物に当たる音がしてゴルフボールが跳ね返えるのが見えた。

大人がすっぽり隠れるくらいアシ（イネ科の多年草）が伸びて長年整備されていない場所に人工的なものがあるなんて意外だった。

中古品のゴルフボールがバケツに半分残っていていちいち持って帰るのも面倒だと思い、ボールが当たった物陰にバケツを隠そうと宮川国男は近づいた。

灰色で表面がザラザラしたブロックが積み上げられた小屋がアシに埋もれていた。

小屋といってもトタン屋根が吹き飛ばされ、5メートル先で裏返しになっている。ブロックの半分以上が崩れ落ちた廃屋状態の小屋。

アシを掻き分け、ブロックを跨いで中へ隠そうとしたとき、鼻を再

起不能にさせるくらいの強烈な悪臭が襲った。

奥に黒いモノが蠢いていた。

その方向に石を投げると八工が四方八方に逃げていく。

影で八工がたかっていたモノがよく見えない。

風が吹き、雲が流れ、陽がさした。

八工が隠していたモノの正体を見たとき、宮川国男は顔を背けた。

小屋に若い女性の死体が発見されてすぐに駆けつけたサトウは異常な犯人の心理に目を疑った。

首筋の頸動脈、手首の動脈、そして腕の上腕動脈が鋭利な刃物で深く切り込まれ、おびただしい量の血が辺りを赤く染めていた。

出血多量による失血死。

被害者の名前は原恵美子、26歳。町内の建設会社の事務をしていた。

父親に会う機会があったのだが、身の上話を聞かされた。

幼い頃に母親を病気で亡くし、父と娘の2人で支えあつて生きてきたのだそうだ。

遺族に泣きつかれて犯人を捕まえてほしいと頼まれた。

思わず「必ず捕まえます」と安請け合いしてしまった。

サトウは正義感にあふれていた若い頃を思い出した。

時代は変わった。

吸血鬼と人間が契りを交わし同じ世界で暮らすなんていったい誰が想像しただろうか。

時代の流れに翻弄されて自分のすべきことを見失いつつある。

ひよつとしたらこの過去の事件を解決することによって自分が失っていたものを取り戻せるのではないかと思いつながらサトウは封筒に残った最後の資料を手取る。

元同僚から送られてきた現在の犯行現場の写真。

果たして奴はOKしてくれるだろうか？

サトウは机の上に写真を置くと不安げに見詰めた。

第二章 過去の事件 2・写真

あらかじめ三宅から教えてもらっていた連絡先に電話をすると瑠諏は会う約束をしてくれた。

ただし、落ち合う場所で多少の食い違いが生じた。

サトウはAK地区の静かな喫茶店を指定したのだが、瑠諏はやましいことがないのなら警察署で会っても問題ないでしょうと正論を言われた。

返す言葉がなかった。

仕事の邪魔をしたくないという配慮なのか瑠諏は昼休みにやって来た。

刑事課に残っていた全員の目が噂のアドバイザーに奇異な視線を注いだ。

血を舐めて事件を解決した話は原田から発信され、署内を駆け回っている。

「どうも」

えらく不機嫌というわけでもなければ愛想が良いともいえない無表情を瑠諏は出前のソバを食べていたサトウにぶつけてきた。

「まあ、座ってくれ」

原田が席を外していたので隣に座らせた。

原田の性格からすると会話に割り込んでくることも考えられるので、近くにあるレストランの割引券を渡して意図的に追い出した。

パーティーションの上と横から盗み見ようとするいやらしい目をサトウは睨みをきかして退けた。

わざとらしい咳払いをして視線がやっと散らばる。

「太陽が出ている時間帯に呼び出して悪かったな」

サトウが冗談めかすように言った。

「一体いつの時代の吸血鬼映画を見た知識で言ってるんですか」

瑠諏はサトウのジョークを軽く受け流した。

「まずはこの写真を見てくれ」

サトウは7年前に若い女性が無残にも殺された現在の犯行現場の写真を渡した。

瑠諏には簡単ではあるが電話で事件の内容は大筋で説明してある。

「コンクリートの床に黒いシミが残ってますね」

血の痕は被害者の悲痛な叫びなのか、7年経過しても黒いシミと成ってコンクリートにしがみついていた。

「そこに残ってる血の跡を舐めて事件の映像を見ることは可能なのか？かなり年月が経っているんだが……」

サトウがはやる気持ちを抑えて訊く。

「鮮明な映像としてどれだけ蘇るかはやってみないとわかりません。この写真を見るかぎり、厄介な作業になることは間違いないと思います」

瑠諏は深刻な顔をして答えた。

「全く見えないということがないのならそれで十分だ。少しでも証

拠になるようなことが掴めればそれでいい」

サトウの表情がやや明るくなる。

「警察に血液などの証拠は保管してないんですか？」

瑠諏が疑問を投げかけた。

「警察民営化の初期段階として証拠品の保管は民間企業に委託している。従来の煩雑な手続きによる証拠品紛失を防止するための対策で、いち警察官が閲覧するとなると何ヶ月も先になる」

「証拠品を盗む汚職警官を減らすには合理的ではありませんね」

「警察は仕事の量を減らしたいだけなんだよ。社会全体に広がっている倦怠感に汚染されている」

「アメリカ人になってたるんでしまったんですね。行きましようか？」

瑠諏がさらっと皮肉を言って立ち上がる。

「ああ」

サトウは心の中で瑠諏に感謝していた。

第二章 過去の事件 3・2人だけの捜査

「上司に許可はもらって来たんですか？」

瑠諏は助手席から不安げな視線を向けた。

「大丈夫だ。メモを残してきた」

「それだけですか？」

「心配いらない」

事件現場へ向かう間、瑠諏からの質問はそれだけ。

仕事以外の話題がなく、気まずい雰囲気の中で車中に流れていた。

サトウも運転に集中する素振りをしてこっちに話しかけないでくれというオーラを出す。

寂しい峠を抜けると田園風景が延々と続き、長いトンネルを通過して奇異な懸崖けんがいの海岸線をしばらく走り、山と海に挟まれた小さな町に行き着いた。

「ここが四那土町だ」

大きな都市以外はいまだに旧日本国時代の町名が残っている地域が多く、サトウは若い頃住んでいた町を懐かしむことができた。

町の名前が英語表記に変わっていたら同じ気持ちでいられたかは疑問だ。

隣町との境界線でもある川幅が17メートルの河川敷が見えるとサトウは車のスピードを緩める。

「確かこの辺だな」

実った穂の重さに耐え切れなくなり、先端をもたげるアシに覆われた土手のところで車を停めた。

「あそこだ」

車を降りたサトウは土手と川の間を指さす。

僅かに灰色のブロックで囲った小屋らしきものが目視できた。

2人は草を掻き分けて小屋を目指す。

茂みの中を突き進んでいくとアシが倒され、空き地になっている場所へ出た。

事件発生当時よりさらにブロック塀が崩れ落ちている小屋を目にしたサトウは、若い制服警官の時代にタイムスリップしたような感覚に囚われた。

凄惨な殺人現場だという先入観がそうさせるのか屋根がない小屋に陽が射し込んでいても暖かさがまったく感じられない。

瑠諏はさっそく黒いシミの前に片膝をつけ、穴が開くくらい凝視すると不衛生なコンクリートの床に舌をつけ根まで出してたっぷり舐めた。

サトウはしかめそうになる自分の顔の筋肉を引き締めて瑠諏を見守った。

特等席に座っている瑠諏の前で折り目がついた真っ赤な幕がせり

上がった。

いつもならなんの障害もなく舞台を観れるのだが、今回は霧がかかったように映像の粒子が荒かった。

瑠諏は目を凝らして舞台を見詰めた。

背が高くて栗色の長い髪をした若い女性がキョロキョロ周りを気にしている。

土手の一本道を小走りで進んでいる後方からカゴ付きの茶色い自転車に乗った男がジグザグ走行しながら追ってきた。

男は赤いBというロゴが入った帽子をかぶっていた

恐怖心と焦りがあったのかその若い女性は躓いた。

男は女性がよろめいた瞬間を見逃さず、ペダルを踏む足に力をこめた。

立ち上がって駆け出すと男は自転車を女性にわざと接触させて土手から転がり落とした。

「きゃー来ないでー」

女性が拒絶する金切り声とザーという雑音が融合して瑠諏の鼓膜を痛めつけ耳鳴りを轟かせる。

瑠諏は耳の穴に指を突っ込んで遅ればせながら処置をした。

視界、音響……ともに不鮮明。

男は自転車を乗り捨ていやらしい息遣いを吐きながら後を追う。

女性はブロック塀の小屋を盾にして男が右へいけば左へ、男が左へいけば右へ回った。

そんな子供染みた追いかっこはそう長くは続かなかった。

エナメル素材のパンプスのヒールが思いがけず土の中へ深くめり込んで脱げてしまった。

ちょっとした動揺が動きを静止させ、男に襟首を掴まれる結果になった。

遠くから小学生の低学年らしき子供数人が楽しそうに喋りしながら

ら歩いてくる。

女性が助けを呼ぼうと「た……」と言った瞬間に半壊した小屋の中へ引きずり込まれ、男が鉛筆の芯を細くするみたいに刃物を使って女性の命を削っていった。

流れてくる血が自分の靴を濡らすと男は低い笑い声をもらした。

そして、男が振り返ろうとしたとき、乱暴に幕が閉じた。

意識が戻った瑠諏が一瞬だけ伏し目がちになり、疲れたような表情をしたのを見てサトウは少し驚いた。

人間味を感じた。まさかと思いつながら瑠諏の意見を待った。

「犯人は男。濃紺に赤いBという文字を刺繍した帽子をかぶり、カゴ付きでパイプが茶色くU字形の銅管で小さな径の車輪のAK地区でもよく見かける自転車に乗っていました」

「他には？」

「規制線が張られている早い時期の血を舐めていれば犯人がもつとはつきり見えたんでしょうけど」

「顔は見えなかったのか？」

「残念ながら映像が不鮮明でよく見えませんでした」

サトウはあからさまに落胆した顔を見せることはできない。

「こんな田舎までやって来て汚いコンクリートの床を舐めてくれたのだから。」

「自転車と帽子か……自転車に乗っているのなら7年前まで犯人はこの近辺に住んでいた奴だな」

「そうですね」

「自転車は世の中で一番出回っているアルファ社の302シリーズの旧タイプだろう。赤いBのロゴが入った帽子を売っている店をまず探してみるか」

「はい」

「付き合ってくれるのか？」

「私をここへ置き去りにするんですか？」

瑠諏は人懐っこい笑みを浮かべ、さっきまでの疲れた表情を完全に消していた。

「7年前に赤いBに濃紺の帽子を売った店を探すのは難儀ですけどね」

瑠諏が眉毛尻を下げて破顔した。

「おまえ、人間のやるスポーツには関心ないようだな」

サトウが顔をほころばせながら言う。

「どづいつことですか？」

瑠諏は小首を傾げた。

「赤いBに紺色の帽子といえばボストン・レッドソックス、野球チームだ。この町に専門のスポーツ用品店は2件しかない」

サトウの優越感に満ちた言葉は捜査が絞れたことによる喜びから出たものだった。

第二章 過去の事件 4・野球帽

1軒目のスポーツ用品店は日本州のプロ野球チームを吸収合併した新メジャーリーグ・チームの野球帽を売っていなかった。

店構えは立派で二人乗りのカヌーが店頭にディスプレイしており、野球、サッカー、ゴルフなどメジャースポーツ以外の登山やキャンプ用品も豊富に揃えてあった。

「どうして野球帽を置いてないんですか？」

サトウは店主に質問した。

「日本の野球チームを吸収したアメリカのメジャーリーグの野球帽をどうして売らなきゃいけないんだ！」

レンズが厚い度のきつそうな黒縁のメガネをかけた店主は喧嘩腰でサトウを睨んだ。

店主がアメリカのシカゴカブスに吸収された元阪神タイガースの黒と黄色の縦縞のハッピを着て商売をしていることからサトウと瑠諏は1軒目のスポーツ用品店から早々と退散した。

「あれくらいの意気込みがないとこんな小さな町で店は経営できな

いだろつな」

サトウがヤレヤレといった感じで店主から浴びた熱を冷ますように口から長いため息を吐き出した。

2軒目の店は『ミヤビスポーツ』という看板がなかったら普通の住宅と見まがうほどの貧相な店だった。

出入口はアルミ枠の引き戸。ガラス窓には有名スポーツ選手の日焼けしたポスターが貼られていた。

4坪ほどの店内には野球道具中心に商品が並び、ジャージ類やスパイクは箱詰めのまま積み上げられている。

「いらつしゃい」

70過ぎくらいの腰の曲がったお婆さんが無愛想に出迎え、サトウと諷刺をギロツと睨み、金属バットを立てかけてある奥に移動した。

スーツ姿とロングコートを羽織ったスポーツとは縁遠い格好の2人組がやってきて強盗の可能性が頭を過ぎったのか警戒している。

「警察の者です」

「何の用だい？」

サトウは縦開きの警察手帳を提示してすぐに警戒心を解こうとしたが、お婆さんからの疑念の視線に変化はなかった。

「この店でボストン・レッドソックスの帽子を売ってるかな？」

「ボ、ボス……なんだい？」

お婆さんは片方の耳をアンテナみたいに傾けて訊き直す。

「プロ野球チームの帽子を売ってるかな？」

今度は範囲を広げて質問した。

「わたしやわからないからその辺の箱を開けて勝手に調べておくれよ」

お婆さんが顎で示したところへ先に向かったのは瑠諏だった。

次から次へと箱を開けていき、ボストン・レッドソックスの帽子が折りたたんで入っている箱を見つげ出す。

「お婆さん、7年前にこの帽子を売ったときのことって覚えてるかな？」

サトウは瑠諏から帽子を受け取ってお婆さんにだめもとで見せた。お年寄りに酷な質問なのは重々わかっている。

「7年前だって？知るわけないよ」

お婆さんが不愉快そうに答え、呆気なく捜査が行き詰まった。

「ひとつだけ打開策があります」

瑠諏がサトウに耳打ちしてきた。

「なんだ？」

「お婆さんの血を舐めることができれば問題ないです」

「おまえ、そんなこと言って、どうやって……」

瑠諏は答えることなく、それまでの無表情が嘘のように柔和な笑顔でお婆さんに歩み寄った。

「私は衛生局の者です。心して聞いてくださいね。7年前にここのお店で帽子を買った人が珍しい病気かもしれません。大丈夫だと思いますが、念のためにお婆ちゃんの血を採血したいんだけどいいかな？」

瑠諏は笑顔を崩さずに返事を待った。

お婆さんの目には驚きと不安が混ざり、どうしたらいいのか迷っている。

「心配しなくていいよ、お婆ちゃん。注射器は使わないから。針を指にチクツと刺して綿棒で吸い取るだけだから」

「別に注射器が怖いわけじゃないんだよ、ハハハハ……」

お婆さんは曲がっていた腰を伸ばして笑った。

瑠諏はコートのポケットから小さなケースを取り出した。

似つかわしくないピンク色のプラスチック製で小学生の女の子が持っているようなペンケース。

針と綿棒が数本ずつ入っている。

針の先端をお婆さんの人差し指の腹に軽く刺し、滲み出た血を綿棒で拭き取ってペンケースへと戻す。

一連の作業には無駄がなかった。

「結果は電話でお伝えします」

「できるだけ早く連絡おくれよ」

お婆さんは瑠諏をすっかり信用したらしく、自分の孫に話しかけるみたいに穏やかな顔になっていた。

店を出るとサトウが開口一番尋ねた。

「そのペンケースはいつも持ち歩いているのか？」

「いいえ、サトウさんから連絡をもらって必要になると判断しました」

瑠諏はいつもの涼しげな顔で答えた。

「しかし……」

サトウの顔は曇る。

「あのお婆さんに嘘をついて血を採取したことは罪になりますかね

「？」

サトウの口から出てくる言葉を予想して瑠諏が先手を打って質問をしてきた。

「あのお婆さんに理解してもらえないかわからないが、おれがあとから電話で説明しておくから問題ない。問題なのはピンク色のペンケースのほうだ」

「かわいすぎましたか？」

「ああ」

「ピンク色しか売ってなかったんです」

瑠諏は下を向き、鼻を手で触りながら照れた。

「衛生局の身分証を見せろと言われたらどうするつもりだったんだ？」

「見境なくお婆さんを咬んでいたかもしれない」

「まったく……」

サトウは呆れながらも心の中では笑っていた。

瑠諏が目の色が変化するところを民間人にもあまり見られたくないとのことで、車を少し走らせて民家が点々とあるだけの寂しい場所まで移動した。

「この辺でいいか？」

「はい」

瑠諏はペンケースから取り出した赤く染まった綿棒をキャンディでも舐めるみたいにペロリと舌で撫でた。

幕が開いたが、舞台には店番をするお婆さんが一人だけ登場したまま時間が停止したように動きがない。

お婆さんはたまにしかやって来ないお客を待つことが仕事のようだ。

瑠諏は7年前のボストン・レッドソックスの帽子を買いにきた男が舞台上がるように思考回路を研ぎ澄ませた。

30代くらいの男がフラッと店に入ってきた。

髪がボサボサ、無精髭、目はとろんと垂れ下がっている。

お婆さんの新鮮な血を舐めた影響なのかアルコールのニオイが客席にいる瑠諏の鼻までもくすぐった。

男は相当酔っているらしく、売り物の金属バッドを握ってニヤリと笑い、飾っていたジャージに向かってボクシングするみたいに「シュツ！シュツ！」と言いながらパンチを繰り返す。

腰が据わっていて意外と様になっている。

店番のお婆さんはそんな迷惑な客に冷たい視線を送る。

男は適当に掴んだ帽子を頭にのけると「これいくらだ？」とお婆さんに尋ねてお金を払い、すぐに手を伸ばしてお釣りをせがむ。

お婆さんからお釣りをむしり取って店を出ると、カゴ付きの茶色

い自転車に乗って去っていった。

「どうだった？なにか掴んだか？」

サトウは運転席から溜諏の顔を覗き込む。

「ええ、いろいろわかりました。まずは過去の新聞記事を調べましょう。この町でPCを使ってインターネットができる店がありますか？」

「図書館にPCがあるはずだ」

あまり表情を変えない溜諏がサトウのひと言でニコツと笑った。

警察、消防署、役所や病院などの主な公共機関が建ち並ぶ一画に多目的なホールを備えた建物があった。

町民の交流の場として会議室、展示ギャラリー、そしてホール手前のサロンにはゆったりとしたクッションが心地いいのか長椅子でくつろぐ年配の人たちの姿が目立つ。

2階の4分の1を優先している図書スペースはどちらかといえば学校の図書室に雰囲気近く、こぢんまりとしている。

受付カウンターでは閉館間際だというのに若い娘がにこやかに挨拶をしてきた。

「こんにちは」

「パソコン借りるよ」

サトウは地元の郷土資料が並ぶ書架の隣に設置されているPCへ向かう。

「男の風貌からして過去に傷害事件を起こしている可能性があります。ボクシングをかじっていたかもしれません」

瑠諏が後ろから検索キーワードとなる言葉を告げ、サトウが過去の傷害事件、ボクサー、四那土町などを入力してエンター・キーを押す。

引っ掛かったのは7件。

それぞれチェックしていくと匿名の個人が作ったホームページに『我が町の犯罪者』というブログのタイトルで、元ボクサーが近所で迷惑行為を繰り返している様子が書き綴られ、暴露されていた。

しかもご丁寧顔写真まで載せている。

「この人です」

瑠諏が静かに画面を指した。

村尾邦一、44歳、無職。

ブログには2枚の画像が貼られていた。

1枚目は鳶^{つた}が絡まり年季が入ったアパートの前で上半身裸の男が水平にした鉄パイプを腰に回して背筋を伸ばす柔軟体操をしている姿。

顔は無造作に伸びた髪の毛や顎鬚が清潔感を失わせているが、体は顔と不釣り合いなくらいつやつやした筋肉がついて腹筋が割れている。

2枚目は隠し撮りに気づいたのか、鉄パイプを高々と振り上げ、鬼の形相で向かってくる姿が写っていた。

画像がぶれていることから、撮影した人は恐怖に怯えながらシャッターを押したに違いない。

その腹癒せとして名前や住所の個人情報やネットに流したのだ。

ある意味勇気がある投稿者だ。

「プリントアウトするか？」

「いいえ……大丈夫です」

2人が図書館を出たとき、ちょうど閉館時間になった。

サトウは車に戻ると45口径のコルトガバメントのマガジンを抜いて弾の数を確認した。

「ちゃんと7発入ってますか？」

瑠諏が笑顔をまじえて訊いてくる。

「心配いらない」

サトウは瑠諏のおかげで張り詰めつつあった緊張感から開放された気がした。

第二章 過去の事件 5・解決

ネットに流出していた住所を頼りに向かうと、画像の背景に写りこんでいたボロアパートが佇んでいた。

周りは真新しく質の高い一戸建てが密集して新婚カップルの発想力が招いたと思われる赤い屋根に黄色い壁など原色を使った奇抜な色彩の家が目立つ。

その中で村尾邦一が住むアパートの前には冷蔵庫など家電類を中心にガラクタが放置され、近隣の環境に悪影響を及ぼしている。

「厄介な相手かもしれない。ここで待ってるか？」

サトウからすれば捜査協力はお願いしたが、犯人を捕まえるところまで手を貸してもらうのは厚かましい気がした。

「いいえ、1人では危険すぎますよ」

「すまない」

ありがたい返事をもらいサトウは礼を言った。

「ネットに書き込まれていた住所が正しいなら1階右端の部屋だ」

2人は慎重な足取りでアパートに近づくと、サトウが静かにノックした。

軽く叩いただけでドア上部にはめ込まれている磨りガラスが割れそうなくらい揺れた。

なにも反応がなく、今度はドンドンと強めにノックすると、部屋から不機嫌そうに「なんだコノヤロー」という声が聞こえてきた。

開いたドアを盾にしてサトウは顔半分だけを相手に見せる。

「すみません、警察の者ですが……」

サトウは警察手帳を出した。

【POLICE】と刻まれたバッジの重みで自動的に縦型の手帳が開いた途端、拳くらいの直径の鉄パイプがドアの板を突き破ってきた。

「うっ」

先端の円形部分が鳩尾に直撃したサトウはうずくまる。

瑠諏はすかさず鉄パイプの先端を掴み、あっさりと引っこ抜いた。連動した動きでドアを蹴り、相手もろとも吹き飛ばす。

「なにしゃがる！」

男はすぐに起き上がったが、衝撃で割れた磨りガラスに手をついて切ってしまい、瑠諏を睨んだ。

顔は村尾邦一に間違いなかった。

「7年前に原恵美子という若い女の人を殺しましたね」

瑠諏が壁に当たって跳ね返ってきたドアを手のひらでもう一度壁に叩きつけるとドアが真っ二つに折れた。

「お、おまえ……」

尋常じゃない力を見せ付けられた村尾は途中で言葉を失った。

「こんな小さな町だと吸血鬼を見るのは初めてですか？」

村尾の血がついたガラス片を瑠諏は拾い上げ、まじまじと見てから乱杭歯を唇からはみ出し、部屋へと入っていく。

僅かに寢床が確保されているだけで周りはゴミが詰まったビニール袋が散乱し、換気する窓もひとつしかなくて生ゴミの腐った臭いがこもっていた。

「ば、馬鹿にすんな。吸血鬼に会ったことくらいあるぜ。凶暴だったが、昔とったきねづかで叩きのめしてやったさ」

村尾はファイティングポーズをとり、虚勢を張る。

「吸血鬼に恐怖心を持たないのなら植え付けてあげますよ」

「いいのか、一般人を傷つけて？問題になるぞ」

「卑劣な犯罪者が相手ならみんなは私に同情してくれると思いますけどね」

「吸血鬼のくせに調子に乗りやがって！」

村尾は台所に駆け寄り、包丁を握った。

「あなたは本当に醜い」

瑠諏が哀れむような顔をした。

「コノヤロー！」

包丁の柄を両手で握って村尾が突進する。

ズブツ……と包丁が突き刺さる音がしてサトウは顔を上げた。

「くっ」

顔を歪ませて瑠諏が左腕に突き刺さった包丁を受け止めている。

心が折れないように必死に耐えている。

「る、瑠諏……」

腹を手で押さえながら発した声なんの援護にもならないことはわかっていたが、サトウは声をかけずにはいられなかった。

瑠諏は細い腕から無縁と思われる力を発揮して包丁を握っている村尾の両手を右手一本で捻っていく。

「くそっ」

痛みに耐えかねた村尾は包丁を手放した。

「凶器は渡してもらいました。人間は諦めが肝心ですよ」

瑠諏は包丁の刃から滴り落ちる血を気にも留めず、一気に抜いた。

「まだ諦めちゃいけないぜ」

村尾は気障キザつたらしい台詞を吐き、床面まで開口部がある掃き出し窓に頭から突っ込んだ。

バリンと窓ガラスを砕き、体を地面に叩きつけた村尾は起き上がると、アパートから逃走していく。

「路地裏に逃げていきました。できたら先回りしてください」

瑠諏は振り向かずサトウへ手早く伝言を残すと後を追った。

サトウは腹の痛みをこらえ、前屈みになりながら走った。

村尾がブロック塀に挟まれたアパートの裏を横向きでスピードを落とさず器用に進むと、瑠諏も肩をすぼめて窮屈な軒下を苦もなく通過していく。

アパート敷地内の金網を飛び越えるとレンガが敷き詰められた路地裏というよりむしろれた小道へ出た。

両脇には赤土色のプランターが並び、白や紫色の花がまとめて植えられている。

キーンというブレーキ音。

道をふさいだ車からさっそうとサトウが出てきて銃を構えた。

「奥さん、窓から離れて！」

ブレーキ音を不審に思ったらしく裏庭を見渡せるリビングの窓からひとりの若い主婦が窓を開けて様子を窺おうとしていたのをサトウが大声で制した。

「おいおい容疑はなんだ？」

村尾はふてふてしく両手を上げた。

「殺人罪だ」

サトウが完結に容疑を伝えた。

「悪かったな刑事さん。鉄パイプでドアを開けようとしたら突き破って刑事さんに当たってしまったんだ。ボロアパートでドアも薄いから不可抗力さ。文句は管理人に言ってくれ。あっ、それから吸血鬼を刺したら傷害罪になるんだっただかな？なあ刑事さん、教えてくれよ」

自分に非がないことや吸血鬼に対する差別をこめて村尾が饒舌に語った。

「そんな細かいことはどうでもいい。おまえが逃げたのは殺人を認めたと解釈せざるをえない」

サトウはかなり抑え気味に発言したつもりだが、出てきた言葉は警察官としての理性を失いつつあった。

「おいおい、おれがいつ人殺しを認めただよ。誤認逮捕もはなはだしいぜ。このまま警察に行ってあんたらに自白を強要されたとき叫んだっていいんだ」

村尾の開き直りともいえる態度に、サトウは言い返す言葉が見つからなかった。

「私は警察官じゃありません。だからあなたを咬み殺すことだってできるんです」

瑠諏の静かな闘志を村尾は背中に感じて振り向く。

「やるならやってみろよ、吸血鬼野郎！なあ刑事さん、もしおれがコイツに襲われそうになったら助けてくれるんだらうな？」

村尾の挑発を溜蹙は無表情で乗る素振りを見せなかったが、感情が表に出てしまったのはサトウのほうだった。

村尾の足に狙いを定めていた目が血走る。

「なんで吸血鬼と刑事が一緒にいるのか知らねえが民間人の命はちやんと守ってくれよな」

見透かされたように念を押され、サトウは苛立ちを制御することを放棄しつつあった。

銃口を上げ、標準を村尾の眉間に定めながら静かに歩み寄る。

後ろから押ししてるのは原恵美子と父親の思い。

「お、おい、無実の人間を撃つ気なのかよ」

村尾が怯え、後ろに下がる。

「サトウさん！」

冷静さを取り戻させようと瑠諏が大声で叫ぶ。

「こいつはまたいつか殺人をする。罪の意識など微塵も感じていない」

トリガーを絞る指に力が入りすぎて銃口が揺れる。

「や、やめる……」

村尾が腰砕けになり、尻餅をついた。

「サトウさん!!」

「覚悟しろ」

トリガーを引こうとしたその瞬間、瑠諏が村尾をかばうように前に立った。

「どけるんだ、瑠諏！」

「だめです」

「頼む！」

「躊躇してたんですが……証拠があれば逮捕できますよね」

瑠諏がさっきまで腕に刺さっていた包丁の柄を指で摘んでぶら下げようにしてサトウに見せた。

刃渡り35センチほどの刃先から血が滴り落ちている。

「その包丁がどうかしたのか？ああ、きさまを刺した証拠品ということか」

村尾はひとりで納得して答えを導いた。

瑠諏はそんな村尾を無視して包丁を舐める真似をした。

「この包丁、料理にはあまり使っていないと思います」

瑠諏が怪しげに微笑む。

「その包丁で原さんを殺したんだな？」

サトウが喜びに満ちた顔をさせてせっつく。

「ええ、間違いありません」

瑠諏が断言したことを受け、サトウは銀色輝く手錠をポケットから取り出す。

「おれが殺したなんて証拠はどこにもないぜ？」

2人の会話の意図がわからず、村尾は目玉を右往左往させる。

「一度血のついたものを私が舐めると過去の出来事を見ることができんです。だからあなたがこの包丁を使ってどんなことをしたのか、すべてお見通しですよ」

瑠諏が涼しげな視線で村尾を見下ろす。

「そんな吸血鬼の戯言が裁判で通用するわけないだろ」

村尾は黄ばんだ不衛生な歯を出して笑った。

「過去の資料から被害者の刺し傷とこの包丁を調べればどの角度でどのように凶器として使われたのかわかるはずですよ」

「そうだな。今回の別件の犯罪で引っ張ることができる。取調べに

はたっぷり時間をかけられる」

村尾を排除した2人の会話が済むとパトカーがサイレンを鳴らしてやって来た。

サトウが車で先回りしているとき、逃走した村尾の凶暴性を考慮して地元警察に応援を頼んでいた。

資料を送ってくれたサトウの元同僚以外はなんでAK地区の刑事がこんなところに来て捜査に首を突っ込むんだという不信感を臭わせながら村尾を引き取った。

「おい！その包丁は返してくれるんだろっな！」

手錠をかけられるときは意外とおとなしかった村尾が、地元警察の巡査に溜湊が包丁を渡そうとすると激昂した。

サトウが連行される村尾の背中を見て言った。

「凶器を7年も残しておくなんて馬鹿な男だ」

「村尾は人を殺した凶器を愛撫してエクスタシーを感じていました」

「興味があつたのは殺人じゃなく、殺した道具なのか？」

「ええ」

「どうしてわかった？包丁は実際に舐めたのか？舐めなかったのか？」

サトウが問いかけると、瑠諏は2、3滴の血が付着したガラス片をポケットから出した。

「これは割れたガラスに村尾が手をつけて血がついたものです。村尾を追いかけている最中でしたが、サトウさんの車が見えたのでその隙に舐めてみました」

瑠諏がなにを見たのか、サトウはあえて聞かなかった。

やりきれない思いだけが残る。

殺人犯を捕まえ、動機がわかってても心は晴れない。

「傷は大丈夫なのか？」

「吸血鬼は治りが早いですよ」

瑠諏は刺された左腕を自慢げに袖を捲って見せた。傷はきれいに

ふさがっていた。

「へえ、噂には聞いていたが、便利な体だな。ところでその刺青はなんだ？」

サトウが左手首に刻まれた黒い英数字の刺青を指さす。

瑠諏がすぐに袖を戻したのでサトウは読み取れなかった。

「あ、これですか。本物じゃなくペイントですよ。迷子にならないために住所を記してるんです。それよりサトウさんは大丈夫なんですか？」

瑠諏は刺青のことについてあまり触れられたくないのか、話をすりかえた。

「ああ、おれはなんともない。すまん、肝心なところで足を引っ張ってしまって」

「お互い様ですよ」

瑠諏が恐縮するような言い方でサトウを励ました。

「それから、すみませんでした」

唐突に瑠諏が頭を下げた。

「なにがだ？」

「早めに包丁を舐めていれば、サトウさんを追い込むことにはならなかったかもしれない」

「気にするな。おまえが自己陶醉していたら村尾になにをされていたかわからない」

「実は包丁に自分の血がついていたのでためらってしまったんです」
サトウが気遣っても瑠諏の謝罪は続いた。

「そつなのか」

汚い場所についた血を平気で舐めていたのに自分の血だけは苦手なんだなとサトウは笑い話の種としか認識できなかった。

「殺人罪で立件できますかね？」

瑠諏が不安な表情で訊く。

「ああ、大丈夫だ。今回押収した包丁は原さんの刺し傷と一致するさ。人類の技術も少しは信頼してもらいたい」

サトウは瑠諏をなだめるように言い切った。

すると、フフツと瑠諏が笑った。

「2人で励ましあっただけですかね」

「そうだな」

瑠諏の笑みを見てサトウは安堵しながらうなづいた。

そのときのサトウは瑠諏の刺青のことなど、すぐに忘れてしまっていた。

第三章 行方不明者捜索 1・コトの始まり

やけに月が輝いて見える夜だった。

宮路晋吾は頭から爪先まで黒で統一した服装の気味の悪い奴に後を付けられていた。

電車でAK地区に降りたときからだ。

午後11時を過ぎているのにマンガ、アニメ、ゲームなど若者特有の文化を開拓する街には熱心に商品を値踏みする客が疎らに存在した。

繁華街を抜けると、さすがに人けがなくなり、そのときからコツコツという足音が耳を離れない。

わざと革靴の踵を鳴らして恐怖心をあおっているようにさえ感じる。

宮路は硬質なシヨルダーバッグを肩からぶら下げていた。

相手との距離を確かめるためにシヨルダー・ベルトの位置をなおす振りをして立ち止まった。

チラツと見ると相手も歩みをやめ、素人のエキストラがするような下手くそな演技で顔を横に向ける。

宮路は急に走り出した。

慌てたように足音のリズムも早くなる。

信号は赤だったが停まっている車も横断歩道を渡ってくる人もいなかった。

日本州の銀行と合併して総資産が世界の金融界で第2位を誇るKLT銀行と、隣のビルとの間に、口を開けて狭い路地が待っていた。

宮路は迷わず、その路地に入っていく。

突き当たりは立体駐車場の高い壁だった。

追ってきた黒ずくめの相手は路地の出口をふさぐように仁王立ちした。

月に照らされ、影が落ちた。

顔がはっきりと現れた。

「おまえ……」

宮路は絶句。

黒ずくめはゆっくりと距離を詰めてきた。

歩き方にはいたぶるような余裕が感じられた。

「近寄るな！」

大声で強烈に拒んで恐怖心を振り払おうとしても、宮路の体の震えはとまらない。

それでもバッグを守るように力強く抱いた。

黒ずくめはそんな宮路の姿を見て惨くて思いやりのない笑い声を歯の隙間からもらした。

第三章 行方不明者捜索 2・赤い水たまり

翌日の朝、サトウと瑠諏はKLT銀行の裏手に呼ばれ、ひび割れたアスファルト面を保護するために敷かれている鉄板を見下ろしていた。

「かなりの量ですね」

「ああ」

鉄板の上には赤い水たまりが浮いていた。

僅かな歪みにたまっているだけでそれほど深さはないが、半径1メートルくらいの水たまりは、トラックなどの大型車が傍の道路を通るたびに波紋を刻む。

鑑識課の安本が赤い液体を綿棒で採取し、ルミノールというラベルが貼った小瓶からスポイトで試薬を吸い取った。

綿棒の先に試薬を垂らしてオレンジ色の保護メガネをかけて発光具合を調べる。

「血液に間違いないです」

「致死量は超えていないが……」

血液だということが判明してサトウの表情が険しくなる。

「午後1時半くらいに近くのコンビニで買い物していた客が争うような声を聞いたそうです。これだけの血を流したのなら大ケガしているでしょうね」

原田が報告と漠然とした感想を述べたあと、緑色のキャッシュカードをサトウに渡した。

「すぐそこに落ちていました。持ち主は宮路晋吾、28歳で会社員。今朝、奥さんから搜索願が出されたばかりです」

「KLT銀行のキャッシュカードか……」

「はい。キャッシュカードを盗らないなんて犯人の目的はお金じゃなかったんですかね？」

原田は小首をかしげる。

「あるいは被害者が事件に巻き込まれたことを知らせるためにわざと落としたのかもしれないな」

サトウは膝を折って赤い水たまりを覗く。

「とりあえず舐めてみますか」

「頼む」

瑠諏が鉄板に両手を付けて頭を下げると舌を赤い液体へ這わせた。

サトウはその異様な光景に慣れたが、経験済みの原田と予測できたはずの鑑識課の安本は顔をしかめた。

瑠諏は前屈みになって舞台を覗き込む。

赤十字のマークがいたるところにプリントされた白くて衛生的なバスの中に小さい目、ぷっくりふくらんだ鼻筋、丸い顎を携たずさえた太った男が乗り込む。

血液カードを受付に提示して針を左腕の静脈に刺され、血液バッグに400mlを採血すると止血バンドを貼ってお礼のオレンジ・ジューズを一気に吸い上げ、紙パックを握り潰すみたい凹ませた。

もの足りなかったのかズズツと残りの一滴まで飲み干してバスから出ていく。

覚醒した瑠諏は独り言をもらした。

「こんなに無意味な舞台を見たのは初めてかな」

「どういうことだ？」

サトウがいままでにない瑠諏の反応を心配した。

「血を流す現場を見ることができませんでした。見たのは赤十字社血液銀行のバスで献血する太った男です」

「おまえの能力も空振りすることがあるんだな」

サトウは驚きを隠せない。

「ここに残された血液は私が見た太った男のモノだということは間違いないと思います」

「宮路晋吾の身長と体重は？」

サトウが尋ねると原田は慌ててメモ帳を捲る。

「身長は174センチで体重は60キロくらいだそうです」

「太った男は？」

今度は瑠諏に同じ質問をした。

「年齢は20代前半。身長は180から170センチで体重はおそらく100キロを超えています。それと血液カードを見ることができました。名前は倉成仁。偽ってなければ突き止められるでしょう」

「献血して保管していた血を誰かがここに捨てたなんてことは考えられませんかね？」

原田の指摘した可能性はあまりにも低いと思われるが、サトウは首を捻りながら応じた。

「血液銀行の警備は厳重だ。まず持ち出すことなんて考えられない

が、盗めたとして血を撒くために、そんな危険を冒すメリットがどこにある？」

「そうですね、これは単純な悪戯ではないですね」

「まずおれたちがやることは行方不明者の宮路晋吾さんを探すことが先決だ。いまのところ手掛かりは倉成仁だけだ。原田、血液銀行に倉成仁の身分照合を要求してくれ」

「はい」

原田はすぐに携帯を使って刑事課の居残り組に身分照会請求書を作成させ、電子書類を上司に送信し、決裁を求めた。

折り返し連絡があつて倉成仁の住所が伝えられたのが14分後。

「わかりました。ありがとうございます」

原田が居残り組に礼を言ったとき、3人はすでに車の中で待機していた。

「じゃ、行くか」

サトウの掛け声で原田は車をスタートさせた。

第三章 行方不明者捜索 3・宮路由貴

倉成仁の住所はA K地区繁華街の中心部。

K L T銀行から車で10分もかからない距離だった。

1階がゲームセンター、2階がパチンコ店、それより上の階がマシンとして使えるようになっていた。

3階から上の階段は急に幅が狭くなり、5階の最上階に倉成が住んでいる部屋があった。

原田がチャイムを鳴らすとアニメキャラクターのTシャツを着た男が寝たそうな顔をして出てきた。

キャラクターはだらしないお腹のせいで横に伸びきって原型をとどめていない。

倉成仁。職業はバイト先を転々と変えて生活しているらしい。

「なんだよ、こんな朝早く」

迷惑そうに顔の幅だけドアを開けた。

「倉成さん。昨夜はどちらに居ましたか？」

サトウが警察手帳を見せながら穏やかに質問する。

「昨日はずっと家に居たよ」

倉成は表情を変えずに答えた。

「なにしてみました？」

「テレビ見てたよ」

「そうですか。誰かと一緒でしたか？」

「いいや、一人だった。ちょっと待てよ、おれはなにかの事件の容疑者なのか？」

倉成がすねたように訊き返す。

「いいえ。あなたのものと思われる血液が今朝方発見されたので所在を確認にきたのですが、ケガはしてませんね」

サトウは象のような倉成の巨体を舐め回すように見て言った。

「全然、ピンピンしてる。でも、気持ち悪いな。本当におれの血なのか？」

「まだ、はっきりとはわかりません。献血されたことはありますか？」

「半年くらい前にやったよ」

「そうですね」

「献血された血が盗まれたのか？」

「それもまだわかりません」

「せっかく献血してやったのに無駄なことをするもんだ」

「なにかわかったら連絡をさしあげます」

「ああ、頼むよ」

「それから、この写真の人物に見覚えはありませんか？」

サトウは携帯の画面を倉成に向けた。

宮路晋吾の奥さんが搜索願のために提示した写真がっさいさっき警察関係者に送信された写メだ。

やつれた感じの若い男が虚ろな目で正面を見詰めている。

「知らないな。どこにでもいる好青年のサラリーマンって雰囲気だな。どこかの店で会っていたとしても記憶から抹消してるよ」

倉成は写メから最大限のほめ言葉を引き出してから否定した。

「なにか思い出したら連絡をください」

サトウは名刺を渡した。

「わかりました」

倉成とのやり取りで得たものはなく、サトウと原田の表情には落胆の色が出ていた。

捜査が早くも行き詰まり、これから先の捜査方針が限られてしまった。

「行方不明になった宮路晋吾さんの奥さんに話を聞きに行くか」

「はい」

サトウの判断で車はA K地区からD F地区（旧田園調布）へ向かった。

D F地区は街の中心に公園があり、そこから放射状に延びてきっちり整備された同心円の道路が規則的に広がる。

上空から見ると扇形を形成して他の地区との違いを見せつけている。

主に富裕層が暮らしていることで有名な地区だが、車で走っていると迷路のようでナビがないと自分がどこにいるのかわからなくなる。

「この家です」

原田が車を出て番地と表札を確認してから戻ってきた。

宮路家は最先端の建材を使っているらしく、ガラスのようにピカピカに磨かれた黒い石材で出来ていた。

南側の屋根が傾いて太陽光の入射角を取り入れていることから吹き抜けの広いリビングがあることを窺わせた。

玄関までのアプローチはレンガが敷き詰められ、左側はカーポート、右側に庭があり、監視カメラも設置されている。

インターホンの音色も品良く聞こえた。

「はい、なんでしょう?」

不安そうな声で女性が尋ねてくる。

「警察の者です。ご主人のことでお伺いにまいりました」

サトウがインターホン越しに答える。

「何かわかったんですか?」

「いいえ、まだなんの情報もありませんが、いろいろと聞きたいことがありまして……」

サトウは言葉を濁した。

宮路家に来るまでの車中で瑠諏が“血の付着したものを舐めることが可能なら手掛かりを掴めるかもしれない”と言った。

宮路晋吾が自宅で襲われて血痕が残っていれば事件の解明は早くなる。

しかし、争う声が聞こえ、キャッシュカードが落ちていたことを考えると、KLT銀行の裏手がすべての発端となる現場だった可能性が高い。

宮路家から収集できるものは皆無だなとサトウは思っていた。

千鳥柄でモスグリーンのワンピースを着た細身の若い女性が俯きながらドアを開けた。

目、肩、鼻、口の各パーツがどれも小さくて細く、無駄に主張していない。

前髪をきれいに切り揃えたおかつぱ頭の黒髪が光沢を放ち、和人形のような清楚な雰囲気漂わせる。

名前は宮路由貴、24歳。

彼女は大学生時代に宮路晋吾と知り合い、そのまま結婚したので職歴はなく、子供は授かっておらず、両親も住んでいない。

その割に無駄なくらい家は大きい。

「マイケル・サトウです」

警察手帳を見せて身分を証明すると由貴は家の中へ入れてくれた。

外観とは違い内装はログハウスかと思ふほど壁と天井が木目調で床もフローリング。

粘着シートで補っているのかなと思つたら、木の香りがして本物の木材を使っているようだ。

リビングに通され、3人は長椅子を勧められた。

外観から想像したとおり斜め上から射し込む陽射しが、部屋に明るさをもたらしている。

コーヒーをお盆にのせて由貴がやってくると、さすがに空気は沈む。

膝丈くらいの高さのテーブルに3人分のコーヒーを置いて向かい側に座っても、彼女は下を向いたまま。

喪中しているのかと思うほど黒でまとめた服装の瑠諏に、不快感どころか興味も示さない。

「今朝になって旦那さんが居ないことに気づいたんですね」

「ええ、酔って朝帰りをするタイプじゃないんです。真面目な人なんです」

「わかりました」

由貴の沈痛な表情を見てサトウは現場に残されていた血痕のことは伏せて、キャッシュカードの確認だけを取ることにした。

「キャッシュカードを見せてあげてくれ」

サトウに指示され、原田が透明なビニール袋に入ったキャッシュカードを由貴に差し出した。

「夫はKLT銀行に口座を持ってましたから間違いないと思います。どこに落ちていたんですか？」

カード表面の凸凹した夫の名前をなぞりながら由貴が訊く。

「KLT銀行のAK地区支店です」

いろいろなことを聞かれると思ったが、キャッシュカードを愛しそつに見詰めている由貴を見てサトウはしばらく静観することにした。

「旦那さんは料理などをしますか？」

瑠諏が沈黙を破る。

「いいえ」

由貴は首を振った。

「自分で果物を切ることもないんですか？」

瑠諏が再確認する。

「しません」

「日曜大工は？」

「まったく……」

「最近旦那さんは家の中でケガをしませんでしたか？」

「いいえ」

「ちょっとした切り傷もしてないんですか？」

瑠諏が矢継ぎ早に質問する。

珍しく焦っているようにサトウには見えた。

「そこまでは……一体なにを知りたいんですか？」

「す、すいません。DNAを採取するのに血液が付着したものがな
いかと思ひまして」

サトウが割って入り、瑠諏が質問した意図を説明した。

「DNA？洗面所にいけば晋吾さんのブラシに髪の毛がついてると
思いますけど、血がついてないと駄目なんですか？」

由貴は腑に落ちない様子で眉を八の字にさせた。

「警察の手続きの関係で血液がついていたものがあれば迅速に事を進めることができます」

サトウが押し切る感じで納得させ、晋吾が大半の時間を過ごしているという2階の書斎へ案内してもらったことにした。

2階の廊下から1階のリビングが見下ろせた。

階段を上っているとき、サトウは原田に耳打ちして由貴を書斎から遠ざけることを命じた。

原田は一瞬困った顔をしたが、なにか名案でも浮かんだのか書斎に入る間に大きくうなずいた。

「奥さん、念のためにブラシから髪の毛も採取しておきたいので案内してくださいませんか？」

「……はい」

原田のひと言で書斎から離すことに成功したが、警察の曖昧な対応に由貴は冷めた態度で原田を連れていった。

書斎は6帖の広さがあって、床から天井すれすれまで高さのある

書棚が両サイドから挟み込み、豊富な量の本を詰めていた。

中には漫画本もあったが『数式による株式相場の連動性』など硬い題名のHOW TO本から、歴史や文学などの蔵書まで揃っていた。

入口から突き当たりの窓に一人分の机と椅子が置いてあり、所在が掴めない主を待っている。

瑠諏は本棚に寄り添い、本の背表紙を指でなぞると適当に3冊抜き取ってペラペラと捲った。

「どれも新品同様に熟読している形跡はありませんね」

「大切に読んでいるんじゃないのか？」

「そうかもしれませんが」

瑠諏が感情のこもっていない答え方をした。

「普通に戻ったな」

「普通？」

「由貴さんに質問しているとき、なにか焦っているような気がしたぞ」

「今回の事件はあまりお役に立てそうもないのでそんな風に見えたらんじゃないですかね」

瑠諏が冗談っぽく言い返す。

「それは情緒不安定だったことを認めたと解釈していいんだな？」

「どござ」

2人はそんな会話をしながらも目を皿のようにして手掛かりになるものを探した。

ゴゾゴゾ……と瑠諏がパンダンというヤシに似た葉を編みこんだゴミ箱をあさりはじめ、しばらくすると手の動きが止まった。

瑠諏は幅19ミリ、長さ72ミリの絆創膏をゴミ箱から取り出した。

傷口を当てる白いパットの部分が茶褐色に染まっていた。

「やったな」

サトウは静かに歓喜した。

「意外と新鮮ですよ」

瑠諏はクンクンと鼻を動かす。

「奥さんに見られないうちに早く」

「では、行ってきます」

瑠諏はペロリと絆創膏を舐めた。

舞台は狭いワンルームマンション。

卑猥な写真が堂々と表紙を飾る雑誌を散らばせ、ゴミなのか生活に必要なものなのか区別できないものが入り乱れて部屋には足の踏み場がない。

ただし、デスクトップのパソコンが置いてある机だけはきれいに片付けられていた。

太った男が窮屈そうに体を揺すりながらトイレから出てきた。

倉成仁……。

瑠諏は顎に手をあてがって舞台の続きを見詰める。

倉成はパソコンのキーボードをカタカタ叩きながらネットにアクセスして無修正のHな画像を見ている。

しばらくするとチャイムが鳴り、倉成はドアスコップを覗いて確認すると相手を部屋に入れた。

「遅いぞ」

倉成が顔を見るなり不満をもらした相手は宮路晋吾。彼は暗い表情で中へ入る。

「お金は用意できたか？」

倉成がピアノ線くらいに目を細めて訊く。

「もう少し待ってくれ」

宮路は頭を下げて懇願した。

「またかよ！」

罵った倉成は転がっていたゴミを蹴飛ばす。

「すまない」

宮路の謝り方からすると、よほどの弱みを握られているらしい。

「あんたが職場から血液バッグを盗んでいることをバラしてもいいんだぜ」

「100万ドルなんて大金がすぐに集められるわけがない」

宮路は控えめに拒否をする。

「20代であれだけの家をDF地区に建てられるんだから100万ドルなんてはした金だろ」

「親から援助してもらったんだ」

「だったらまた親に援助してもらいな」

「頼む！あと1週間待ってくれ！」

「無理だな。血液銀行の監視カメラの映像やデータベースに侵入するとき、手助けしてくれた仲間にお金のことを約束してあるんだよ」

「そんな……」

「ところで盗んだ血液はどうしてるんだ？お金に変えてるのか？」

「いや、それは……」

宮路は答えづらそうに言葉を詰まらせる。

「定期的に1ヶ月に4バッグずつデータを改ざんしながら拝借して

るだろ。監視カメラの映像と照合したからなにもかもお見通しだぞ」

「い、言えない」

「教えてくれたら50万ドルにまけてやってもいいけどな」

倉成の脅迫に近い誘惑の言葉で宮路は悩むような表情をしたあと、重々しく口を開いた。

「吸血鬼に渡してる」

宮路が少女のような細かい声で答えた。

「吸血鬼に？人類に対してとんでもない裏切り行為だぜ、ハハハ。これでまたひとつ強請る材料が増えた」

倉成は愉快そうに高笑いをした。

「約束が違う」

「心配するな、簡単な約束さ。おれの血液を回収してくれ。登録番号を追跡したらまだ使われている形跡がない。そうしてくれたら50万でいいぜ。おれは吸血鬼に飲まれるために献血したんじゃないからな」

「わかった」

宮路は渋々OKした。

取り引きが成立して帰ろうとする時、宮路が転がっていたビール瓶で足を滑らせ、運悪く缶詰のギザギザの蓋で足の裏を切った。

「あんだ、お祝いしてもらったほうがいいぞ」

倉成はポイツと絆創膏を投げ、宮路はヒラヒラと舞い落ちる寸前で掴んだ。

幕が下りるとともに瑠諏も瞼を閉じた。

瑠諏は真っ赤な目の輝きがおさまってからもしばらく考えふけていた。

サトウはなかなか声をかけられる雰囲気じゃないのを察して黙っ

て口を開くのを待つ。

「今回私が見た舞台を忠実にお話ししますので感想はのちほど。まず、宮路晋吾は倉成仁に強請られていました」

瑠諏は懇切丁寧にサトウに説明をはじめた。

そして、宮路が足の裏を切った場面ところで舞台が幕を閉じたことを苦々しい表情で話す。

「まさか、血液銀行の職員だったとは……」

「職員の名簿は警察にも開示されないんですか？」

「なにかと狙われる存在だからな」

まさか吸血鬼に狙われるのを防ぐためだとは言えず、サトウは曖昧な答え方をしたが、意を決した。

「宮路晋吾はお金の工面がつかなくなって自ら行方をくらました可能性も出てきたな。そしておまえにはつらいことかもしれないが、州政府が配っている血液ではものたりない欲張りな吸血鬼が宮路を脅していたとなれば大問題だ」

結局は思ったことを素直に口にした。

次に瑠諏がどんな反応をするのか試したかった。

「例え追っている犯人が吸血鬼だとしても私のやるべき仕事に変わりはありません。法を守れない吸血鬼は警察へ突き出してやります」

「その言葉を聞いて安心した」

瑠諏の揺るぎない決意を聞いてサトウの顔は自然と笑顔になった。

「もう一度倉成に話しを聞きにいきますか？」

「そうだな。拉致してるかもしれないしな」

サトウは宮路晋吾がすでに殺されているという負の考えを排除した。

「彼も宮路を必死に探しているかもしれませんが、少なくとも探さなくていい場所は訊き出せるでしょう」

「脅されている吸血鬼に拉致されている可能性もあるな……瑠諏、おまえは人間と吸血鬼の区別はつかないのか？」

「私にはそちらの嗅覚は全然ありません。私たちが習性で好む黒い服でも着ていれば話は別ですけど」

瑠諏が申し訳なさそうに答える。

「気がかりなことがあるんだ」

サトウが考え深げな表情に変わる。

「なんです?」

「奥さんはおまえを見ても怖がりもしなければ興味も示さなかった。ということは身近に吸血鬼の存在を常に感じてるのではないかと思ってるんだが……」

「吸血鬼を見慣れているってことですか?」

「そうだ」

「その可能性はないとはいえませんね」

「吸血鬼と関わりがあるのか訊かないといけないな」

サトウは腕組みして嫌な役を引き受ける覚悟をした。

「旦那さんを心配している姿は嘘とは思いたくないですね。そもそも彼女は旦那さんが血液銀行に勤めていることを知っているんですかね？」

「いや、いまも知らないと思う。血液銀行に勤めていることは秘密厳守なはずだから平凡なサラリーマンとしか認識していないだろ」

「もし彼女がそのことを知っていたら？」

「怪しいよな。でも、まさかな……」

サトウが両手を広げて肩をすくめると、由貴と原田が書斎にやってきた。

「ブラシから毛は採取できたか？」

「はい」

サトウの取り繕った質問に原田は最小限の返事で無難に答えた。

「奥さんに訊きたいことがあります」

「なんでしょう?」

「吸血鬼にお知り合いはいますか?」

「えっ?なんでですか?私があんな化け物たちと知り合いだなんて誰かが言い触らしているんですか?不愉快だわ」

由貴が不快感を露わにした。

さつきまでのおしとやかさが影を潜める。

「化け物?彼らたちも人間と同じで、悩み、苦しみ、そして笑う生き物なんですよ」

瑠諏との付き合いがなければ、一生出ることがなかった台詞がサトウの口から放たれた。

「でも、血を吸いますよ」

由貴は苦笑いをして食い下がる。

「すみません。話しがずれてしまいました」

被害者の妻を責めてもしょうがなく、サトウは大人の対応に切り

替える。

「夫が行方不明になったことと吸血鬼がなにか関係があるんですか？」

「いえ、まだわかりません」

「ひょっとしてそちらの方は吸血鬼？」

由貴が微笑んで尋ねる。

「はい、そうです」

瑠諏が正直に答えた。

「ごめんなさい。まさか警察に協力する吸血鬼がいるなんて知らなかったもので」

由貴は謝ったが顔は笑っていた。

「瑠諏ビンといいます。自己紹介が遅れて申し訳ありません」

瑠諏が頭を下げる。

「とてもわかりやすい格好をなさっているのね」

「ええ、私が吸血鬼だということを間接的に教えてあげないと心臓麻痺を起こしてしまう人がいますから」

「面白い冗談。よくお喋りになるのね」

「吸血鬼が無口だというのは迷信です」

2人は波長を合わせるように笑った。

その後、倉成が宮路家に押し掛けてお金をせびり、危害を加える可能性もあるので原田に外で見張りをさせることにした。

「いつまでですか？」

原田は不満そうに尋ねた。

「おれが連絡するまで宮路家から離れるな」

「は、はい」

不服そうな返事をする原田から瑠諏はブラシについていた毛を受け取った。

サトウは芝居で受け取ったと思っていたが倉成のマンションに向かう途中の車内で瑠諏は髪の毛の先から毛根部分まで丁寧に舐めた。

「どうだ？」と、サトウが尋ねると瑠諏は渋い顔をして言った。

「無精な舞台しか見れませんでした。頼りはやはり倉成仁だけです」

第三章 行方不明者捜索 4・急転

倉成の部屋の前に立ったとき、瑠諏が言った。

「家宅捜索の許可は？」

「こっちは行方不明者を捜してるんだ。問答無用で強行突破する」
威勢がいい言葉とは裏腹にサトウはやさしくチャイムに触れた。

「なんだよ、またさっきの刑事さんか」

倉成がドアの隙間からうんざりした顔を出す。

「すまんな」

「なんの用です？」

「聞きたいことがある」

「だからなんです？」

「これは君の家にあった絆創膏だな」

サトウは瑠諏が宮路家の書斎で見つけて舐めた絆創膏を見せた。

「そんなどこの薬局でも売ってるだろ」

「この絆創膏は宮路晋吾の家にあった」

「誰だ？宮路晋吾って？」

倉成は首をかしげたが、口元からわずかに白い歯がこぼれていた。

「さっき来たとき写真を見せた男の名前だよ。もう一度見せようか？」

「別にもう見たくない。ところでその絆創膏がおれのものじゃなかったらどうやって詫びるつもりだ？」

「その心配には及ばない。開ける！」

サトウが低い声で高圧的に出ると倉成はすんなりドアを開放した。

倉成は潔白だと証明したいらしく、家宅捜査の令状を見せるとも言わない。

「失礼する」

「勝手にどうぞ」

倉成の自信ありそうな表情は瑠諏が横をすり抜けようとするときに急に消えた。

「どうやら一瞬でただならぬ気配を察知したらしい。」

「なにか顔についてますか？」

じっと見られていることに気づいた瑠諏が楽しそうに倉成に尋ねる。

「あんた警察の人？」

「いいえ、アドバイザーです」

「なんにも正直に答えることはないのにとはいつつサトウは部屋の中を物色する。」

「夏なのにどうして黒一色なんだ？」

あらかじめ答えを知っているかのような訊き方をして倉成は構える。

「吸血鬼だからです」と言ったあと、瑠諏はフフと鼻で笑った。

「本物の吸血鬼……」

倉成は体を壁に擦り付けて瑠諏を通そうとしたとが、ロングコートの裾が触れると顔を引きつらせた。

「逃げたら咬みますよ」

瑠諏のひと言で倉成は動けなくなった。

サトウがトイレ、バス、押入れの中を見て宮路晋吾がいないか調べたが、人間を隠すだけのスペースはなくガラクタだらけ。

「宮路晋吾さんをどこかへ拉致してるんじゃないのか？」

「だから知らないと……」

「諏諏、頼む」

サトウの指示で口の端からグググッと乱杭歯を伸ばして瑠諏が倉成へ歩み寄る。

「ちょ、ちょっと待て、警察がそんなことしていいのかよ……うう、訴えてやる!」

「訴えてもいいが、その前に吸血鬼にされるぞ」

「なんて奴らだ」

「宮路さんが勤めている血液銀行から血液バッグを盗んでいることを知ったおまえが、お金を要求して強請っていたことはわかっていゝる。宮路さんはどこだ？居場所くらい知ってるんじゃないのか？」

「金額は100万ドル。いや、血液を取り戻すという条件つきで半額にしたんでしたね」

瑠諏がサトウの質問に具体的な内容を付け加えた。

「どうして金額ごときまで知ってるんだ？そうか、盗聴器だな！」

倉成は押入れをゴソゴソ漁るとハンディレシーバーを手に取り操

作をはじめが、ピーというインバーター音のノイズが無機質に繰り返されるだけだった。

「そんなことしても無駄だ」

サトウのひと言が拍車をかけたのか、倉成はハンディレシーバーを両手で握り締め、緑色の液晶パネルを見詰める目に熱が入る。

警察による違法捜査の証拠を掴むため、周波数を合わせようと必死だ。

「くそぉ〜」

「そんなデジタル的なことをしても我々の捜査手法は理解できません」

瑠諏の言葉を聞いて倉成は困惑の表情を浮かべる。

「宮路さんはどこだ？」

サトウが睨んで訊く。

「だから知らないって!」

倉成は力強く否定する。

「お金を渡す意志を示すまで、どこかで拷問してるんじゃないのか？」

「そんなことはしない」

「信用できないな」

サトウの容赦のない追求は倉成の抵抗力を失わせ、黙らせる効果があった。

「どつする血を吸うか？」

「そうですね。献血後の舞台が見れるかもしれない」

「例えば宮路さんが登場する場面に絞って見ることはできないのか？」

「まだ自分の能力を100パーセント把握してませんが、やってみます。スポーツ用品店のおばあちゃんときは成功しましたけど」

瑠諏がいくらか自信なそうに話す。

「なに言ってるんだ？」

不安そうな倉成をよそに瑠諏はピンク色のペンケースから針を出した。

「人間が吸血鬼になる瞬間に立ち会えると思ったのに残念だ」

サトウの意味深な言葉に気を取られていた倉成は手の甲に針を刺された瞬間を目で見ることができなかった。

「いま、なにをした？」

「別に」

瑠諏はそう言いながら針の先端に付いた血を舌の真ん中に密着させ、指先針をクルリと回転してすべての血を舌で舐めきった。

赤を基調とした劇場に例のごとく座らされている瑠諏は視線を舞台に集中させた。

登場人物が少なく動きが少ない舞台だった。

事件に繋がるヒントが必ず隠されていると信じて見ていないと、わずかな変化に気づかず見過ごしてしまいそうだった。

倉成が軽自動車に乗り込み、ある一軒家を見詰めているだけの風景。

宮路家だ。

砂糖がたっぷりかかった菓子パンを食べ、コーラを飲み、大きな欠伸をしながら宮路家を見張っている。

延々と倉成の車上生活の一人芝居を見せられた。

宮路晋吾が出勤するために家を出るとき、帰宅するとき、大きな体を隠しながら様子を見ている。

新たな登場人物が出てくる兆しもなく舞台は静かに幕を閉じた。

瑠諏は舞台を見終わったあと、眉間に深い皺を刻んだまま倉成に尋ねた。

「軽自動車を所有してますね？」

「わ、悪いのかよ」

倉成が怯えながら答える。

目を赤くしてなにかにとり憑かれたような表情で突っ立っていた瑠諏の姿が、不気味だったようだ。

「ナンバーはNのKJ・502に間違いないですか？」

「免許を持っているおれが、車を運転したら駄目だっていう法律でもあるのか？」

「その車が宮路家付近で目撃されている情報があるんです。そうですよね、サトウさん？」

「ああ、おまえの車の目撃情報は立証済みだ」

サトウは急に尋ねられたが、瑠諏が血を舐めて見た舞台に関連づけて芝居を打ってきたことを把握してなんとか調子を合わせた。

「ずっと宮路家を見張ってたのは認めますね？」

瑠諏は強い口調で尋ねる。

「せ、先週までな……それが犯罪になるのかよ」

倉成はうつろたえながらも自分が潔白であることを主張した。

「宮路晋吾さんは朝会社へ出かけてから真っ直ぐ家に帰る生活を続けていましたか？」

瑠諏はさつき見た舞台を思い出して訊いた。

宮路晋吾は決まった時間に家を出て決まった時間に帰るという面白味のない生活を本当に繰り返していたのか再確認する必要性があった。

「生真面目な男さ。休みの日も一步も外へ出ない」

「他の人との接触はなしか……」

瑠諏の目に光が宿った瞬間をサトウは見逃さなかった。

「なにかわかったか？」

「だいたい絞れてきましたよ」

「本当か？」

サトウの声の上擦る。

「彼は宮路晋吾さんを拉致していません。居場所を知らないのは本当だと思います。宮路晋吾さんの犯罪をPC一台で知り、脅すことによって屈服する人物なのか張り込みして見極めていた……そうでしょう?」

倉成はなにも言い返せない。

「恐喝の容疑で逮捕する」

サトウがポケットから手錠を出した。

「恐喝なんかしていない」

自信がなくなっただのか語尾が尻すばみ。

「事情はゆっくり署で聞かせてもらおう」

観念した倉成を車に乗り込ませたとき、サトウの携帯が鳴った。

原田からだった。

『由貴さんが家を出ました。後をつけます』

「買い物か？」

『それが……』

「どうした？」

『黒いワンピースを着て家を出たので買い物に行く格好には見えませんね』

「葬式か？」

サトウは瑠諏を盗み見た。

由貴が吸血鬼を毛嫌いするような言い方をしてからそんなに間がない。

すぐに瑠諏と同じ黒い服を着て外を出るなんてちょっと理解しがたい行動だ。

『いま手を上げてタクシーを拾いました』

原田が早口で報告してくる。

「すぐに後を追えるか？」

『はい、こっちにタクシーが向かってくるので捕まえませす』

「由貴さんに乗せたタクシーはどっちの方角へ向かった？」

『F1街道側のロータリーに入りました』

「随時連絡をよこせ」

『はい』

携帯を切ってから数分後に再び原田から慌しい声で連絡がきた。

『タクシーはK 7通りを東に走っています』

「どこに向かっているんだ……」

サトウは携帯を切ると苦虫を噛むような表情をしてハンドルから手を放した。

倉成の住む商業ビル兼マンションから車は安易に動けず、後部座席で瑠諏と倉成が行き先の定まらない車内の空気感を共有していた。

瑠諏は窓の外に視線を泳がせ、倉成はドアの取っ手に繋がれた手錠を煩わしそうにカチャカチャ動かしている。

「動くな！」

サトウが叱責すると倉成が顎を引いて息を止め、体を硬直させた。

海の底のような静かな車内で携帯が鳴るとサトウは焦るようについ問いかけた。

「いまどこだ？」

前回の電話から30分以上経過していた。

『SG地区の住宅街です。住所はSG区6-8-72、木造の古い一軒家に入っていました』

「わかった。すぐに向かう」

電話を切ると同時にサトウはアクセルを踏んだ。

すぐにまたサトウの携帯が鳴った。

『警部補、家の方から男の声が聞こえてきました。様子を見てきます』

原田は緊急事態を報告すると一方的に電話を切った。

「おい、ちょっと待て！」

サトウはプープーという虚しい音に呼びかけた。

「無茶しなきやいいが……」

サトウからは苛立ちがかき消され、部下を心配する上司の表情へと変わっていた。

第三章 行方不明者捜索 5・発見

そのとき原田は確かに男の声を聞いた。

「ち、近寄るなあ〜」

強烈になにかを拒絶する声。

サトウに様子を見てくると携帯で伝えたが、足の動きは鈍く気持ちに体がついてこない。

宮路由貴の入って行った家には門などはなく、半径30メートルをロックガーデンが囲み、近隣との接触を拒んでいる。

岩石を土手のように敷き詰め、階段状に積み上げられた岩の間からは雑草が日光を浴びようと背伸びしている。

意図的に生えさせたものなのか所々に苔がこびりついていて原田は足を滑らせ躓きそうになりながらも段上の家に辿り着いた。

木造の平屋で表札がなく、誰の家なのかわからない。

窓のひび割れた部分にはガムテープが不器用に貼り付けられ、壁を補修している板も釘が浮いて頼りない。

住居としての役割の限界を超えつつある。

原田は銃をホルスターから抜いて聞き耳を立てた。

建物の右側のほうからガチャンと何かが割れる音がした。

引き戸のドアがある正面玄関右手に切り取られた小窓は磨りガラスだったが、右下隅の角のガラスが欠けていて片目で覗けた。

視線の先には和式便器が鎮座していた。

玄関脇にトイレが設置されているのは昔ながらの家の建築構造。

トイレのドアが開きっぱなしというより金具の部分が錆びて痛み、隙間風に揺らされてブラブラ動いている。

原田は中で起こっていることを想像した。

悲鳴は男の声。

倉成に仲間がいて宮路由貴は呼び出されたのではないだろうか？

2人は無事なのだろうか？

「待て、待ってくれ……落ち着くんだ」

男の引きつらせた声と廊下の床を擦ってくる音が聞こえてきた。

その音は確実にトイレ奥の白い漆喰の壁を横切ろうとしている。

原田は固唾をのんだ。

まるで漆喰の壁が映画のスクリーンのように見えてきた。

「いままで待ってくれてたのに、どうしてなんだ？」

男の声は遠慮がちな苛立ちと疑問が混在して緊迫感が伝わってくる。

原田は銃口を覗き穴に通した。

男が尻餅をつきながら廊下を右から左へ後ずさりしていく。

横顔から宮路晋吾と判断できた。

なにに怯えているんだ？

銃を構える手に力が入る。

「最近すぐ喉が渴いちゃうのよ」

あっけらかんとした口調で現れたのは由貴だった。

目が吊り上がり、冷淡な笑みを浮かべている。

宮路家の玄関のドアが開いた瞬間の清らかなイメージとはガラリと印象が違う。

宮路晋吾を追い詰めるように歩を進める女性は性格のまったく違う双子の片割れなのではと思うほど。

「また盗んでくるから、だからもう少し我慢してくれ」

「その言葉信用できないわ。勘弁してくれって断ったのはそっちよ」

「だ、だからおれが姿を消して身代金の代わりに血液銀行から大量に血液を要求して手に入れるまで待つてくれないか」

「なかなか実行しないわね」

「由貴が協力的じゃないからさ」

「なに言ってるの？あなたをわざわざAK駅から追いかけて襲ったように見せかけてあげたじゃない」

「あれは演技じゃなく、本気で血液を奪いにきたじゃないか」

「演技よ。誰に見られてるかわからないもの、本気で襲うようにしないと意味ないでしょう」

「そんな風には見えなかったぞ」

「バレた？」

由貴はペロツと舌を出した。

「鉄板の上に撒いた血を飲んでおけば我慢できたんじゃないのか？」

「潔癖症なの。あっ、それからあなたの搜索願を出しておいたわ」

「血液銀行が独自に動き出すまで待つてくれよ。どうして余計なことをするんだ？」

「ちょっと会ってみたかった吸血鬼キトがいるのよ。それに私は悲劇のヒロインになりたかったの」

「おまえは異常だよ」

「人間じゃないもの」

2人の会話は真実を語っているようで、夫婦でありながら本心でなにも語っていない。

そのうちの片方が人間でないのなら当たり前なのかもしれない。

人間と吸血鬼が結婚……身分を偽り、AK地区以外で隠れて暮らしている吸血鬼が結構いるという未確認情報はあった。

原田は目の前に広がる光景が現実じゃないことを祈った。

吸血鬼に銃で立ち向かえるものなのか？

夫婦喧嘩で納まる状況とは思えない。

瑠諏から吸血鬼について詳しく聞いておけばよかったと原田は後悔していた。

「ああ、あ、人間と結婚して損した。用済みね。」

由貴は素行が悪くだらしない若者口調で冷酷に愛想が尽きたことを打ち明けた。

「おまえ……本気なのか？」

宮路晋吾は怯えているが、言葉には少し未練が残っているように思える。

「吸血鬼は決断が早いだよ」

由貴の眼が赤く光り、整った顔立ちから不釣り合いな乱杭歯が口の両端から伸びた。

「や、やめろ！」

「あなたの血は一滴残らずきれいに飲んであげるわ」

由貴の言葉はなんの慰めにもならず、宮路晋吾の顔を余計に強張らせた。

「お……おれたちの……け……結婚生活はなんだったんだ？」

宮路晋吾は人生最期の質問を愛の確認のために使った。

「私にとってあなたは喉が渴いてどうしようもなくなったときの保険にすぎないの」

顔の筋肉を隆起させ、人間を丸飲みさせるくらい口角をこめかみまで裂き、恐怖を増幅させる変貌ぶりを見せつけた。

由貴は妻としての責任を完全に放棄して吸血鬼に完全に成り下がる。

「う、うわぁ」

宮路晋吾の絶叫を聞いた由貴はニヤツと笑い、細い指を肩に食い込ませ、乱杭歯を首筋へもっていく。

原田は両目を閉じてトリガーを引いた。

白い漆喰の壁に飛沫血痕が張り付く。

由貴の体が揺れた。

左肩を一瞥してから原田のほうを見た。

「あら、さっきの刑事さんじゃない。後をつけてきたの？」

痛みを感じてないのか撃たれた箇所を手で押さえることもせず、
由貴はケロツとした顔で尋ねる。

「や、やめるんだ！」

「吸血鬼を見るのは初めてじゃないのに動揺してるのね」

由貴は狡猾なキツネのように目を細くして舌なめずりをする。

「無駄な抵抗はするな」

「それはごっちの台詞」

「いままで人間に成りすまして築いてきた生活を捨てるのか？」

身がすくんでいる原田は由貴の犯罪を容認しかねない質問をした。

「ええ、喉の渴きに比べたらそんなもの惜しくないわ。吸血鬼の本
能よ」

原田の説得はあっさり片付けられた。

「どうしよう？どっちの血がおいしいのかしら？」

由貴の眼球は2人の男を品定めするために忙しなく動いた。

「夫には一緒に暮らしていた恩があるからやっぱり刑事さんの血か
ら頂こうかしら」

由貴は床を足で蹴ると飛ぶようにして距離を縮め、トイレの窓ガ
ラスを腕で突いて割った。

ガラスの破片が飛び散るより早く、由貴は片手で原田の喉元を掴
んで体を持ち上げる。

「隙だらけね。それとも油断してた？」

原田が呻き声しか出せないのを知りながら由貴は質問を投げかけ
た。

「もう少し窓から首を出してちょうだい。そうすれば血が吸えるか」

由貴は原田を引き寄せた。

原田は苦しみながらも握っていた銃を由貴の顔面に向けようとす
る。

「銃弾を受けて自然治癒するまでの間、醜い顔を見せたくないわ」

由貴は銃口に指を突っ込んだ。

そのとき、車が急停止する音が聞こえ、すかさずサトウが飛び出
してくる。

「もう少しだったのに……もったいない」

由貴は原田の喉元から手を離れた。

「サ……トウ……さ……ん」

原田は地面に崩れ落ち、声を振り絞って助けを呼んだ。

「あなたはこっちよ」

由貴が手荷物を運ぶように宮路晋吾を引きずっていく。

壁と壁の角にある柱の出っ張りを指で引っかけて踏ん張ってもどつにもならず晋吾はもがくことしかできない。

由貴はし字型の廊下を進み、ささくれた畳が敷かれている和室の部屋に連れ込んだ。

「これまで尽くしてきたご褒美だと思って覚悟してね」

迫ってくる乱杭菌を見て宮路晋吾は顔を背けた。

「地に落ちた吸血鬼は惨めですね」

静かな声に反応して由貴はため息をつきながら振り向いた。

「人間と組んで仕事している方がよっぽど惨めよ」

由貴も負けじと瑠諏に言い返す。

「ここは誰の家かな？裏の勝手口から土足でお邪魔させてもらいました」

「晋吾さんの実家よ。」
「両親が亡くなって空き家同然なのよ」

「血液銀行に勤めている宮路さんと結婚したのは血を盗んできてもらうためなんですね。しかも仕事から帰ってくると書斎に閉じ込めて束縛していた。気の毒に本を読むゆとりなんかなかった。君のよくな吸血鬼がいると善良な吸血鬼たちが迷惑するんですよ」

「あなたに迷惑をかけてるなんて知らなかったわ」

由貴は悪びれる様子もなくおどけた言い方で切り替えた。

「そんなに血がほしい？」

「悪い？吸血鬼の性分よ」

瑠諏の問いを由貴はバツサリ切り捨てた。

「我慢すればいいのに」

「夫からも同じことを言われたばかりでうんざりだわ」

「君が言うことを聞かないからでしょうね」

瑠諏と由貴が宮路晋吾のほうを見ると、彼は部屋の隅で両膝を両腕で組んで抱え、顔を伏せている。

「あなたの血を吸わせてくれるなら我慢できるけど」

かわいく見せるためなのか由貴は吊り上がった目をクリッと丸くして瑠諏にお強請りを迫った。

「私の血だけじゃそのうち足りなくなるのは目に見えているし、それに君に血を吸われるのを想像するだけで虫唾が走ります」

「すごい失礼な言い方するのね」

由貴は口を尖らせて軽く憤慨する。

「自首を勧めたいのですが、そんなタイプには見えませんね」

「だったらどうする？」

由貴が妖しく眼を剥いた。

それが合図となって2人の吸血鬼の距離はなくなる。

瑠諏の右腕を由貴が左手で掴み、由貴の右腕を瑠諏の左手が掴むという力比べと、お互いの乱杭歯で首筋を狙う獣同士の闘いが始まった。

「あなた血を舐めるとその人の過去が見れるんでしょう？州政府から支給される血液バッグを飲んでいて頭の中がパニックになるんじゃないの？」

余裕なのか由貴が質問をしてくる。

「400mlの血液バッグは一人分で間隔をあけて飲んでいきますから混乱しません。あなたのように欲張って何個も飲めば別ですけどね」

「じゃあ、吸血鬼の血を吸むとパニックになるんだ」

由貴はほんのり笑った。

「私の能力のことを知ってるんですね」

「すでにあなたの噂は広まってるわ」

「私は有名人か」

「調子に乗らないで」

由貴が一步踏み込んだ。

生死をかけた闘いの最中に話しかけられ、集中力が欠如した瑠諏の背中が反る。

「くっ……」

手首がグキッと悲鳴を上げ、苦悶する。

「女だと思って甘く見てた？」

「そうかもしれない」

瑠諏は正直な気持ちを吐露した。

「どうして人間の肩を持つの？」

「質問が多いです……ね！」

瑠諏は弧を描いて蹴りを繰り出した。

由貴は力比べしていた手を解き、瑠諏の蹴りを後方へ飛んでかわす。

「優しいのね。わざわざ声を出してキックをしてくるなんて」

由貴が怪しく微笑む。

「無益な争いはできるだけ避けたいんです」

「その考え甘いわよ」

由貴は喋っている最中に再び牙を剥いて襲い掛かろうとした。

瑠諏は畳を思い切り踏んづけて数十年分の埃を舞い上げ、由貴の視覚と呼吸器官を一時的に奪う。

「ゴホッ……」

由貴が目を閉じて咳き込んだ瞬間、瑠諏は首筋へ乱杭歯を突きつけた。

「埃くらいで隙をつくるなんてやっぱり女性ですね」

「なに言ってるの？私は女じゃなくメスよ」

由貴は天井に向かって獣のような咆哮ほっしょうを上げると瑠諏の顎に肘うちを喰らわした。

一瞬、気を失った瑠諏の首筋に熱い液体がかかる。

由貴が興奮して垂らした涎だった。

「いただきます」

由貴が口を大きく開けた途端にパンという乾いた音が部屋に轟いた。

サトウが握る銃から放たれた弾丸は由貴の肩口を貫通させた。

「みんな私の邪魔ばかりするのね」

そう言いながら由貴はサトウに向かっていく。

2発目、3発目と銃弾を浴びるたびに体を逸らせて動きが鈍くなっても歩みをとめない。

「銃なんか針が刺さる程度の痛みなんだけど」

強がっているが悲壮感はなく、サトウを震えあがらせるには十分な台詞だった。

4発目は由貴の頭を狙ったのに後ろの漆喰の壁を砕いただけだった。

簡単に避けられてしまった。

「あら吸血鬼を撃つたことがないのかしら？日本州の刑事さんは初^ぶ心なのね」

由貴が上品に振る舞ったのも束の間、すぐに「えっ?!」という驚きの表情へと移り変わった。

瑠諏が後ろから由貴の首に咬み付き、ジュースをストローで吸うような音をさせて自らの体内へ血を注入させていく。

ズズズツ……。

由貴は片手で軽く押し出して払いのけただけなのに瑠諏はよろけながら壁にもたれた。

「3分の2くらい吸わせてもらった」

瑠諏の顔には憔悴した陰が滲んでいるが、それを隠すように言葉を滑らかに出した。

「あ、あなたが命を……か、かけるくらい……私ってそんなに悪いこと……した？」

由貴がなんとか言葉を繋ぎながら訊く。

「人殺しは癖になるだろ」

瑠諏は由貴の質問には答えなかった。

「そ、そう……ね」

由貴は少女のような笑顔を残して倒れた。

第四章 吸血鬼はつるつる年に生まれる 1・誕生

20XX年、地中深いコンクリートで固められたトンネルに一種異様な生き物が存在した。

半円状に積み上げられたレンガ造りのトンネルは透明度が欠落して異臭を放つオレンジ色の雫を隙間という隙間から雨のようにポタポタ降らし、不快な湿気を充満させていた。

衛生さの欠片もない水滴で背中が濡れても、その生き物は気にする素振りを見せない。

暗闇での生活が長いのか眼がなく、視覚の存在を否定していた。

背中には2枚の羽が付いているが、体の大きさからすると頼りない。

突き出た乱杭歯の先から粘性の透明な液体を垂らすと闇よりも黒い体とは対照的な真っ白い卵を口からガムでも吐き出すかのように「ペッ」と生み落とした。

涎の膜に包まれた卵はほどなくすると内側の力でヒビが入り、殻が割れてオギヤーとは泣かずにすすり泣く人間そっくりの赤ちゃん

が姿を現した。

泣き声に合わせて眼の色が黒から赤へ点滅している。

その傍で懐中電灯を照らして見ていた女は卵の殻を丁寧に剥がすと赤ちゃんを抱きしめた。

「人間の赤ちゃんよりかわいい」

女の声は喜びに浸った。

体と不釣り合いな羽を持つ生き物は、さらにもうひとつ卵を産み落とした。

そのトンネルは何のために使われ、現在誰が管理していなければいけないのか知る者がおらず、そこで起きた出来事はトンネルの暗さと同じくしばらく闇に葬られた。

第四章 吸血鬼はつるつる年に生まれる 2・瑠諏の憂うつ

瑠諏は目まぐるしく変わる舞台についていくのがやっとだった。

男子高校生が主役の舞台かと思ったら、酔っ払っているサラリーマンが街を徘徊しながら反対方向からやってくる若いカップルに絡んでいく。

回り舞台によって転換する速さはチカチカ光る渦巻きの映像を見せる特殊なメガネを掛けさせられている感覚と変わらず、拷問に近い。

これだけ激しいセットチェンジは瑠諏にとって初めての経験だった。

いったいどれだけの人間の血を吸ったんだ？

宮路由貴は男ばかりを言葉巧みに誘い込むと血を吸う。

血を吸われた男たちは白目を剥いてバタツと倒れ、それきり動かない。

さらに早変わりするスピードが上がる。

スライドショー並みに人間が襲われるシーンが立て続けに流れる。

遠心力がかかったように赤いビロードの椅子の背凭れに背中を押し付けられ、気持ち悪くなっているのを瑠諏は自覚した。

瑠諏がベッドから上半身を重そうに起した。

「清潔そうな白い天井と床、消毒液のニオイと整然と並べられたベッド。どう見てもここは病院ですね」

「気分はどうだ？」

サトウは壁に寄りかかって組んでいた腕を解いて訊いた。

「まるでジェットコースターに乗っている気分です」

「頭がフラフラするの？」

「まあ」

瑠諏は疲れ気味に微笑をこぼした。

「宮路由貴の血を吸ってから40分経ったんだが、ずっと舞台を見ていたのか？」

「ええ、とても楽しい舞台を見せられました」瑠諏は自分の特殊能力に嫌気が差すような言い方をした。

「病院に運びはしたが、医師は二の足を踏んで処置はしなかった」

「なにもしてくれないほうが助かります」

「吸血鬼の血を吸うと長時間舞台を見ないといけないのか？」

サトウは素朴な疑問をぶつける。

「宮路由貴の場合は特別かもしれませんが」

「血を吸うためにかなりの人数を殺していたということか？」

「舞台を見た限り14人くらいですかね」

「そんなに……」サトウは言葉を失う。

「男ばかり狙ってます。人間を吸血鬼化する量を飲むだけでは飽き足らず、残りの一滴まで吸ってます。AK地区の殺人事件の数は年間でどのくらいですか？」

「200は超えている」

「多いですね」

「銃規制が緩和されたからな」

「銃を使わず、首筋などに針の穴のような傷を残した殺人事件は？」

「AK地区では過去に1件もない」

サトウが断言した。

「おかしいですね」

「吸血鬼の犯罪を誰かがもみ消しているのかもな」

「ここで話すには危険な案件ですね。やめましょう」

瑠諏がAK地区の深い闇の部分に触れようとするのを避けた。

「今回の事件はとりあえず宮路晋吾を見つけることができたし、おまえが得意の速攻で片付いたな」

サトウが冗談めかして言った。

「原田さんは大丈夫なんですか？」

瑠諏はサトウの目を見ないで尋ねる。

「元気だ。なんともない」

明るく振舞って話しの内容を軽くしたのに瑠諏は初対面のときのような素っ気なさに戻った気がした。

「宮路由貴は？」と訊いたときは視線を合わせてくれてサトウは内心ほっとする。

「それが……わざわざ連邦捜査官がやって来て連れていったよ」

サトウはお手上げとばかりに両手を広げて大袈裟なポーズを取った。

「連邦捜査官？」

「FBIのほうがりやすかったかな。すでに日本州の警察組織はアメリカに呑み込まれているんだよ。日本州の警察が真っ先に民営化されるのは実験的要素が大きい」

サトウが警察組織の現実を嘆く。

「言いなりなんですな」

瑠諏は白い歯を見せた。

「宮路由貴を横取りする説明もなしに身分証を突き出すと無言で連れ去った」

「どこに行ったのか見当が付きませんか？」

サトウは再び腕組みをしてから口を開いた。

「噂なんだが第2種人間招待施設という処刑場所があるらしい」

「第2種人間って……」

「吸血鬼のことさ」

「どこにあるんです？」

「おれが知りたい」

サトウは苦笑いをして逃げた。

「お気遣いはいりませんよ。過ちを犯した吸血鬼がどんな卑劣な扱いを受けていても驚きませんし、第2種人間と分別されているのも想像の範囲を超えてませんから」

瑠諏は口元を緩めて穏やかな表情で受け入れる姿勢を見せた。

「本当に知らないんだ。うちの署で噂程度に流れただけで笑い話にもならなかった」

サトウは笑みを返して否定した。

「そうですか」

瑠諏は残念そうに視線を下ろす。

「調べてみる」

サトウが前向きに応えた。

「ところでサトウさんは仕事に生きがいを感じてますか？」

瑠諏が事件とは無関係な質問を唐突にしてきた。

「仕事で生きがいを見つけるのは大変だな」

単純なようで奥が深い質問をされたサトウは戸惑い、答えを横道に逸らした。

「そうですね」

瑠諏の相づちには元気がなかった。

第四章 吸血鬼はつるつるに生まれる 3 失われる記憶

瑠諏はタクシーを呼んで病院から離れた。

サトウは送ってくれると言ってくれたがお断りした。

「私の棲家に来てどうする気なんです？」

悪戯っぽい目付きで尋ねるとサトウは苦笑いをして病院の出入口で瑠諏を見送り「自宅でしばらく安静にしているよ」と気遣いの言葉をかけた。

自分の棲家に帰るとき、瑠諏は左腕の袖を捲る。

腕時計を見るためではなく、左の手首には刺青のように住所がペイントしてある。

特殊能力の影響なのか自分の住んでいる住所を忘れてしまつときがあるからだ。

タクシーの運転手にペイントどおりに住所を告げた。

瑠諏がタクシーを降りたのはすでに店を畳んで4年が経ち、AK

地区ではすっかり忘れ去られた存在の地下にあるカフェの前。

上部が8階建てで建築会社などの事務所が入っているが、ほとんどのフロアは空きになっている。

コスプレしたメイドが接客するなどあらゆる趣向で持て成すAK地区の店に対抗して隠れ家的な癒しを目指し、夜はお酒も出して本物の大人を呼び込むつもりがあまり繁盛しなかったらしい。

大人ひとりがやっと通れるコンクリート打ちっ放しの地下へ伸びる階段を見て、瑠諏は脳の片隅に残っている記憶と照合して下りていく。

突き当たりに褐色の木製のドアがあり、瑠諏は凹凸の少ない古風なナギを差し込んでドアを開け、パチツと照明のスイッチを入れた。

元カフェは焼き物をする窯のように奥行きのあるレンガ造り。

楕円形で光沢を放つ無垢材のカウンターが店内の真ん中に設置され、内側に流し台や冷蔵庫があつて調理場になっている。

間接照明や使っていた食器類、調理器具などはそのまま残されていて明日にでも新装開店できそうな雰囲気漂う。

瑠諏が買ったものといえば入口のドアの横にある飾り枠がない質

素な鏡だけで身だしなみ用として壁にかけた。

瑠諏はカウンターに沿って並ぶ座面が赤い合成皮革のスツールに腰を下ろした。

スツールの数は楕円形をグルッと一周して全部で31個。

入口手前から6個目のスツールだけがなぜか裏返しにされ、アルミ製の脚の部分を上に出している。

カウンターのの上には店内のデザインとは不釣合いな古い黒電話がひとつ。

すべての疲れを一気に出してしまおう勢いで瑠諏は天井に向かって顎を突き上げた。

「フウ〜」

余力も吐き出してしまったのか瑠諏はカウンターに頭を擦り付け、目を閉じて真っ暗な世界で安眠した。

瑠諏は夢を見た。

幼い頃の苦くてつらい思い出。

いつも見る夢はなぜか一緒だ。

西洋風の広い部屋。

髪の毛が落ちただけで音がしそうな静かな環境で赤い液体……たぶん血液だと思うが、並々と注がれたワイングラスがテーブルに隙間なく置かれていた。

目で追って数えても飽きてしまっくらの膨大の数。

突然、横からニヨキと腕が伸びてきてワイングラスを強引に口元へ運んでくる。

顔を背けてもぴったりくっついて追ってくる。

唇を噛む勢いで口を閉じたが鼻を摘まれ、呼吸が苦しくなり口を開放させると次から次へと血を飲まされる。

お腹が妊婦のように膨らむ。

「やめろあ〜」

絶叫し、不快な疲労感だけを残して夢から覚めた。

ビクツと体を震わせ、背筋を伸ばし、痙攣して上半身をバネ仕掛

けの人形のように跳ね上げる。

激しいときはスツールから落ちたこともあった。

本来吸血鬼は夢を見るのか？

本当に夢なのか？

寝ているときに唇を噛んでしまい、無意識のうちに血を舐めて自分の過去の舞台を見せられているのではと思ったこともある。

でも、劇場の座席に座っている感覚がないことから夢に間違いないだろう。

夢が過去を見せているという答えのほうが妥当だ。

瑠諏は自分の過去に自信がなかった。

どこでどうやって生まれたのかもわからない。

人間は2、3歳くらいの出来事を覚えているらしい。

瑠諏は自分の成長過程の記憶が曖昧だ。

記憶は断片でしか存在しない。

繋ぎ合わせてもチンプンジューが描いたような不恰好な絵程度の画

像度でしかない。

一番古い思い出といえば親代わりの篠田レミという女性のことだ。

彼女はいつも傍にいてくれた。

生きる術を覚えてくれたが肝心かんしんなことは擲揄やゆされてかわされた。

「どうやって生まれたか知りたいの？自分で考えるか、調べるのね」

言い方は冷たいが、篠田レミはうんざりした顔をしなかった。

彼女はいまどうしているのか？

ふとそんなことを考えるとともに彼女は本当に存在したのかと自分の記憶に疑いをかけることもある。

試してみたい妙案が浮かんだ。

前々から自分の血を吸ってみたいという葛藤はあったものの、踏み切れずにいたのは吸血鬼の血を吸ったことがなかったからだ。

体がどうなるかわからないし、自分本来の血がどれほどの割合で残っているのか不明で輸血してくれた人間の舞台しか見れないのではという諦めもあった。

この程度なら大丈夫だ。

宮路由貴の血を吸ったことにより免疫ができたはず。

これ以上体調を崩すことはないだろうと瑠諏は踏み切ることにした。

コートの袖を捲くり、露出した白い肌に乱杭歯の先を突き立て皮ふを破き、雫のような血を出すと舌で転がしてきれいに舐めた。

瑠諏は例によって例の劇場の席へ。

舞台に目を向けると瑠諏役を演じている偽者が血の痕がおびただしい殺人現場に立っていた。

傍らにはサトウと原田が厳しい視線で瑠諏を見詰めている。

最初に捜査協力したときの場面。

メントールという天然のハッカを息子が吸っていたとき、父親が麻薬を吸引していたと勘違いして撃ってしまった悲惨な事件。

もっと過去が見たい！

瑠諏が念じても願いは届かず、最初の事件を振り返えさせられた。

結末を知っている舞台を見せられるほど退屈なものはない。

第一幕が終了するとサトウから頼まれた過去の未解決事件の第二幕へと舞台が変わった。

このままにも見出せないのか……。

気落ちした瑠諏は視線を落とす。

ゴゴゴ……と舞台が回転した。

また舞台転換がはじまつたらしい。

瑠諏はさほど期待もせずにおもむろに顔を上げた。

見覚えのないセットが組まれていた。

辛抱強く座っていた甲斐があったと瑠諏の顔に光が差す。

舞台は洋風の館をイメージさせる重厚で気品に満ち溢れた部屋。

髭の両端がぴよんと跳ね上がった男の肖像画、向き合って30人は座れそうな長いテーブル、ピカピカの大理石の柱。

夢で延々と血を飲まされた部屋だ。

ペツタリ油をつけて七三分けにした髪型の幼い子供が一人だけ席に着いている。

目をキョロキョロさせて不安そうだ。

私だ！

瑠諏は目の前に座る5歳くらいの少年を直感で自分と判断した。

ガチャリとドアノブが回る音がして背後のドアが開いた。

入ってきたのは篠田レミ。

膝丈のスカートをはいている。

若いな。

瑠諏は若い頃の篠田レミを見てフツツと笑った。

彼女に最後に会ったときは紺色で地味なスラックス姿だった。

「この生活には慣れた？」

篠田レミは幼い頃の瑠諏の傍で立ち止まると子供扱いしない低い声で尋ねる。

瑠諏は黙って首を横に振った。

「あなた自分がどうしてここにいるのかも覚えてないの？」

篠田レミがやや不満そうに訊くと瑠諏はつなずいた。

「困ったわねえ」

テーブルに手のひらをつけて指でトントンと叩き、考え込む。

「血を舐めると変な映像を見るといっは本当みたいね。現実とその映像の区別がつかなくなっって記憶が混乱してるのよ」

篠田レミの説明を瑠諏は口を半開きにして聞いている。

「成長していけばそのうち記憶の混乱も減ってくると思うけど……私は医者じゃないからいまの言葉をあまり信用しないでね」

微笑んだ篠田レミに気を遣うように瑠諏は作り笑いを返す。

「あなたは貴重な存在なのよ。そのことを自覚しなさい」

篠田レミが屈んで椅子に座っている瑠諏に視線を合わせた。

「吸血鬼の数が増えると人間の血液の量が圧倒的に不足することになるわ。だからあなたは自分の能力をうまく活用して血液を手に入れないさい」

諭された瑠諏はコクリと首を縦に振る。

「それから今日はあなたにプレゼントがあるの」

「なにをくれるの?」

はじめて幼い瑠諏が口を開いた。

「あなたは自分がどうやって生まれたのか知りたいって私に言ったこと覚えてないかしら？」

瑠諏は一瞬うなずこうとするのをやめて篠田レミから視線を逸らした。

「まあ、いいわ、能力のせいで覚えてないのね」

そう言うと篠田レミは赤い液体の入った細長い試験管を差し出した。

「お食事？」

瑠諏は小首をかしげる。

「食事にしては量が少ないでしょ」

篠田レミは口元を手で隠しておしとやかに笑った。

「この血はあなたが生まれた瞬間に抜き取った血よ。本来は吸血鬼だと証明する際に登録用として保管すべきものなんだけど、特別にあなたにあげるわ。この血を舐めればあなたがどうやって生まれたのかわかるかもしれない。でも、いま舐めることはやめといたほう

がいいわよ。もっと物心ついてそれなりの覚悟が出来たときに飲みたければ飲みなさい。私はあまりお勧めできないけどね」

瑠諏は反射的にうなずく。

「大事に冷凍保存しとくのよ」

篠田レミは瑠諏のおでこにキスをした。

我に返った瑠諏は疲れなど一気に吹き飛んだ。

カウンターを飛び越え、業務用で観音開きの冷蔵庫を開けた。

中はびっしりと四角いビニールの血液バッグが何層にも積み重ねられている。

こんなにたくさん？

政府から支給される量をはるかに超えた血液が冷蔵庫の中を埋め尽くしていた。

宮路由貴とやってることは同じじゃないか……。

自分に潜んでいた欲と吸血鬼の性を知った瑠諏は凍った血液バッグを冷蔵庫から次々と乱暴に放り投げた。

冷蔵庫の中がほぼ空っぽになると奥にお目当てのモノが残されていた。

それは安定して支えるために底面側に弁がついた瓶立に固定されていた。

霜がついてイチゴ味のアイスクャンディーのように突っ立っている。

篠田レミの言いつけを無意識のうちに守っていたらしい。

試験管の中の血を舐めた場合、どんな舞台を見ることになるのか瑠諏には想像がつかない。

自分の記憶が体にどんな影響を及ぼすのかも見当がつかない。

宮路由貴の血を吸ったときとは質の違う苦しみを伴うかもしれない。

それだけの代償を払う価値があるのか……。

弱い心が心臓を支配しよとしているのは人間に近い心情だ。

瑠諏は自分が吸血鬼だと自覚しているかといえばそうでもない。

事件を解決するために血を舐めるとき、そしてたっただいま冷蔵庫に並べられていた血液バッグを見て改めて人間とは違う生き物だと認識させられたくらいだ。

記憶が混濁しているから余りある血を飲んで贅沢三昧に暮らす自分の姿が思い浮かばない。

どうやって血液を？

考えれば考えるほど記憶がねじれ、頭痛を引き起こす。

過去を振り返ると体が過剰反応してしまう。

薬で抑えたくても人間が使う薬は効かいらろう。

吸血鬼専用の医療機関など無論あるわけがない。

“吸血鬼は病気になる”が定説となっている。

記憶が飛んでしまうから仲間をつくれぬ。

昨日の友人は今日には赤の他人となるわけだ。

特に名前を思い出すのが難しい。

瑠諏はサトウの名前をカウンターテーブルにカッターの刃で刻んで忘れないようにしていた。

だからできるかぎり事件は一日で解決しないとイケない。

日をまたげば事件のことを詳細にメモした紙を目立つところに貼っておかないと次の日に記憶を引き継ぐことができない。

しかし、記憶を紙に記すと失敗することが多々ある。

目覚めたとき紙は細かく破かれているか、燃やされて灰になり形を変えて現れる。

たぶん犯人は夢遊病の自分自身。

寝ている間に自分がなにをしているのか考えたくもない。

メモを書き、その端にでも血をたらして次の日に舐めれば記憶を舞台で見ることも可能かもしれないが、自分の血を舐めて危険を冒すほどこれまで重要な日々を過ごしてこなかった。

だが、これから先、一日で解決できる事件が続くとは思えない。

瑠諏はいまどき珍しいダイヤル回線の黒電話に目をやる。

仕事専用の丸いフォルムの黒電話。

黒電話付近のカウンターを手でなぞり、誰からかかってきたかを示す名前や番号が彫ってないか確かめる。

サトウの名前とAK地区署の電話番号しか刻まれていない。

瑠諏は自虐的に白い歯をこぼした。

冷蔵庫のほうへ目を向ける。

他の吸血鬼より余計に血液をもらうために警察に捜査協力してるのか……。

床に散乱する血液バッグが融けかかっただけでビニールの表面が汗をかき、ほどよい冷たさをアピールして瑠諏を誘惑する。

きっと喉の渇きを想像以上に癒してくれることだろう。

いまは我慢できるが、明日になれば平気な顔をして血液バッグを飲んでしまつかもしれない。

これだけの量があるということは事件解決の報酬として受け取っている公算が高い。

誰から？

取引相手の名前、声、顔などまったく記憶がない。

重要な記憶ほど自分は忘れてしまっらしい。

いや、新しい記憶ほど消えてしまっている気がする。

まるで風に流されたシャボン玉のようにすぐにパチンと割れて薄い膜に保護されていた記憶は飛んでいく。

誰から依頼されて警察に協力するようになったのか思い出せない。

腕にある刺青のペイントで自分の居場所はあるが、記憶の居場所は脳にはない。

サトウに吸血鬼と捜査協力するように押し付けてきたのは誰か聞けば、取引相手への糸口になるかもしれない。

しかし、いますぐ電話して聞くには相手にとってそれほど緊急性のある事案じゃない。

サトウ警部補は宮路由貴の事件で報告書の提出に追われている頃で迷惑をかけてしまう。

会ったときにさりげなく聞けば済む話だが、それまで覚えているかも正直不安。

瑠諏は自分の欲求を心の中におさめた。

虚無感に支配されそうな瑠諏の心を叩き起こすように黒電話がジリリイン、ジリリインと懐かしい音を響かせる。

どうせ忘れてしまう電話に出る必要があるのか迷ったが、サトウからだった場合を考えて受話器を持ち上げた。

「もしもし？」と応じてから少し高めの男の声で馴れ馴れしく呼びかけてきた。

「よお、瑠諏。事件解決おめでとう！ほうびに血を渡してやるからKZ工場へすぐに来い」

「事件解決？KZ工場？」

事件解決とは宮路由貴が起した事件のことだろうか？

KZ工場は初めて聞く場所だ。

「ああ、そうか。ごめん、ごめん。重度の記憶障害だったな。これからKZ工場の住所を言うからメモするか頭に叩き込んでおけよ」

電話の相手は瑠諏のことを瑠諏以上に知っている。

「あなたは誰ですか？」

失礼を承知で相手に尋ねる。

「会えばわかる……かもな」

相手は軽く笑いながらKZ工場の住所と西側の一番高い煙突付近で待っていると、漠然とした待合せ場所を伝えて電話を切った。

とりあえず行ってみるか……タクシーの運転手に行き先を告げるまで工場の住所を忘れてなければいいが……。

瑠諏は誰に見せるわけでもないはにかむような笑みを浮かべて棲家を出た。

第四章 吸血鬼はつるつるに生まれる 4・支配者ジョン・ドウ

公にできない取り引きをするには最適な場所かもしれない。

市街地に近いフェリーターミナルから2キロ離れたところに鉄の塊の墓場と化した広々とした工場跡地が存在した。

行き先を伝えるとタクシーの運転手は首を傾げ「旧KZ工場の跡地ですよね？」と改めて聞き返してきた。

深夜1時を過ぎてから月明かりに照らされる廃墟の工場へ行く奴はまずいない。

瑠諏は運転手に運命を預けた。

降ろされた旧KZ工場は3年前まで石油プラントだった。

油を精製するステンレスの素肌をむき出したタワーが乱立しているほか、白い煙を空に刻んでいたはずの煙突は茫然と月を眺め、外付けの階段は来ることのない従業員を待っている。

錆びた引込み線は最盛期のときには忙しなく貨物列車が行き来していたことだろう。

タクシーが去ると寒々とした潮風が瑠諏の頬を撫でた。

西側の一番高い煙突を目指したが、どれも同じような高さ。

とりあえず西に向かって進んでみる。

30メートルは有にありそうな赤と白のストライプの煙突が3本並んでいた。

真ん中の煙突の根元にグレーのワゴン車が一台停まっている。

瑠諏は自分がとても危険な状況に立たされているのではと訝った。

電話の相手が騙して殺そうとしていたら？

記憶を辿って自分に恨みを抱いている奴がいなか確認を得ることなんて瑠諏には無理。

体を180度回転させて注意深く周りを見たが、スナイパーらしき人影はない。

プロの殺し屋がちょっと見ただけで見つかるへマはしないか……。

警戒感を排除せず、車に近づいた。

バン！とワゴン車の後部座席のドアを蹴飛ばして一人の男が出てきた。

黒いサングラスを外し、夜空に浮かぶ月を一瞥してから大声で叫ぶ。

「元氣そうだな！」

気安く声をかけてきた男の第一印象はあまり良くない。

下腹が突き出てメタボリックを象徴するずん胴型。

スーツの裾をコートのようにヒラヒラと長めにして体系を隠そうとしている。

枯れた芝生を思わせる薄い髪を整髪料でツンツンに立たせて地肌を見えなくしている。

見れば見るほど他人をごまかそうとする工夫がいたるところで見受けられる。

年齢は40代くらいだろうか。

丸型の顔から発せられた声は電話と一致。

歳のわりに甲高い。

「はじめまして……じゃ、ないようですね。名前を教えてくださいませんか？」

諏諏は頭を下げてから尋ねた。

男の身分など訊きたいことを頭の中で整理していた。

「まるでVTRのように毎回同じことを聞くんだな」

男は下っ腹を揺すって笑った。

「すみません、三歩あるくとニワトリのように忘れてしまつみたいですよ」

瑠諏は鼻先を手でかきながら冗談まじりに応えた。

「ハッハハハ……そんなに悲観することないだろ」

男は体を仰け反らせて豪快に笑い、落ち着きを取り戻してから「

どうせ忘れるならジョン・ドウでいいぞ」と名乗った。

バタ臭い濃い顔なのに品が感じられないためか西洋人とはかけ離れた自分の顔を卑下して笑いを誘う。

ジョン・ドウという名前はアメリカ本土の警察が凶悪な殺人犯を特定できない場合や死体などにも使う呼称だ。女性の場合はジェーン・ドウとつけられる。

瑠諏はあまり笑えなかった。

「大活躍じゃないか。警察からは賞賛の言葉しか聞かないぞ」

ジョン・ドウはテストで満点をとった息子をほめるように微笑ましく瑠諏を見詰めた。

「……………ありがとうございます」

捜査状況を知らせているのは警察組織のどのくらいの地位の幹部なのか考えると返事をかえすのに間があいた。

「次にくる質問はわかってる。誰に指示されて自分が警察と一緒に捜査させられているのか知りたいんだろ？」

瑠諏は深く頷いた。

「教えてやってもいいが、忘れるなら無駄じゃないか？」

ジョン・ドウは尋ねたあと、ククツと短く笑った。

「メモします」

瑠諏はボールペンをポケットからサツと出して袖を捲った。

「なるほど、腕に書いておけば見たときに思い出すというわけか。でも、その知恵も無駄だな」

瑠諏は「えっ？」と出しそつになる声を喉元で押し戻した。

「住所を記したメモ以外はおれが消してしまうからな」

「なぜ？」

瑠諏の眉間に皺が寄る。

「捜査が円滑に行われるには知る必要のない情報もあるってことさ」

ジョン・ドウはまわりくどい答え方をするとクルツと後ろを振り向いて叫んだ。

「おい！持ってきてくれ」

運転席から黒いスーツ姿でガッチリした体格の男が出てきてワゴン車から青くて底が白い一般家庭でもよく目にするクーラーボックスを運んでくる。

軽そうに抱えているが、クーラーボックスのベルトのスーツ肩口への食い込み具合からすると重量はかなりありそうだ。

中身は聞かなくてもわかる。

「受け取るわけにはいきません」

瑠諏はボールペンをポケットに仕舞いながら断固拒否をした。

「どんな心境の変化があったのか知らんが、その言葉は初めて聞く」

「それを受け取ってしまうと宮路由貴と同類ということになってしまいますから」

「宮路由貴？ああ、今回おまえが捕まえた殺人鬼のことか」

ジョン・ドウは視線を斜め上に逸らし、芝居がかった台詞口調で言った。

「そうです」

「おまえが望んでやっている取り引きなんだけどな」

黒いスーツ姿の男がジョン・ドウの前にクーラーボックスを置いた。

「わかりました。でも、いりません」

「決意は固いか？」

「ええ」

「無理だな。おまえは必ず受け取る」

「見くびらないください」

瑠諏は軽やかに地面を蹴り、風がビュンと鳴る俊敏さでジョン・ドウの首に腕を巻きつけた。

黒いスーツ姿の男が殺気立ち、銃を構える。

「やめろ！人間のおまえが敵う相手じゃない！」

ジョン・ドウは一喝して黒いスーツ姿の男の行動を制した。

「ありがとうございます」

瑠諏は静かに礼を言った。

「おれの血を吸ってなにもかも知ろって魂胆だな」

「魂胆じゃありません。私には知る権利があります」

「そうかもしれないが、やめたほうが身のためだ」

ジョン・ドウは抵抗する気がないのか両腕をだらりと下げた。

「なぜです？」

「2つばかり理由がある」

「教えてくれるとありがたいです」

瑠諏は首に巻きつけている腕にやや力を入れて絞めた。

黒いスーツ姿の男が再び銃を構えた。

「心配するな。おまえは車に戻れ」

言われた直後は葛藤するように奥歯を噛み締めたボディガード兼運転手は後ろ髪を引かれる思いで離れていく。

「いいだろう。まず、おれも吸血鬼であること、それとおまえはおれに絶対に敵わないということだ」

こいつが吸血鬼？

ジョン・ドウの自信満々な態度は吸血鬼だと証明する以外にもあるのか、はったりなのか判断できず、瑠諏は頭の中で警鐘を鳴らした。

「しょうがないですね、血は受け取りましょう。でも、あとから捨てます。ですからこの取り引きを誰が後ろで糸を引いているのか教

えてください」

瑠諏は自分なりの妥協案を提示した。

事件を解決する報酬とはいえ人間の貴重な血液を裏でコソコソ取り引きする根性が許せないし、自分自身にも腹が立っていた。

こんなことをしていたらそのうち誰かにバレる。

そうなると吸血鬼は人間社会から迫害を受けることになりかねない。

「おまえだけが特をする無茶苦茶な取り引きが成立するわけないだろ」

ジョン・ドウは呆れたように妥協案を蹴った。

「そうかもしれませんが。でも従ってもらわないと困ります」

「困らねえよ。どうせおまえの“オツム”（頭）だと忘れるんだから」

ジョン・ドウのひと言は瑠諏のこめかみの静脈を沸騰させた。

記憶を失ってしまう自分は人間からも吸血鬼からも都合の良い道具として扱われ、存在を否定されている。

脳細胞はコントロールを失い、心臓へ流れる血液の温度が上がって感情の冷静な部分が崩壊した。

瑠諏は無意識のうちにジョン・ドウの首筋へ飛びついた。

瑠諏は劇場の最前列の真ん中に座らされ、他に客がないお決まりの風景におさまっている。

ただし、天井に描かれているフレスコ画の天使の笑顔がいつもより控えめのような気がした。

瑠諏を待っていたかのようにゆっくりと幕が上がる。

現れた舞台を見て瑠諏は身構えた。

背景は映画のスクリーンのような白いシート、舞台の中央に粗末な作りの木製の椅子が一脚だけ。

そして、その椅子にはジョン・ドウがどっかり腰を下ろしている。

「意外に短気だな」

ジョン・ドウが首を擦りながらだるそうに話しかけてきた。

初めての経験に瑠諏は言葉が出ない。

舞台の出演者にこれまで声をかけられたことなんてなかった。

繰り広げられる舞台は記憶の中のもの。

座席にいる瑠諏はあくまで傍観者に過ぎない。と、思っていた。

覆くつがえされた現実に瑠諏は沈黙する。

「自分だけが特別な存在だと思つなよ。おれはこの舞台の支配者だ」

「この舞台？支配者？」

瑠諏の視線はジョン・ドウをするどく捉える。

「おれは舞台を自由自在に操れる。おまえの思考をブロックすれば舞台から追い出すこともできるし、その逆も可能だ」

「それはすごい」

瑠諏は目を大きく見開いて驚きの表情をわざとつくった。

「見た目で判断するなよ。この醜い体は人間のそれなりの地位に辿り着くための第一段階だったんだ」

「意味がわかりませんね」

瑠諏は腕を組む。

「おれは人間でも吸血鬼でも体中の血を大量に吸うと、その体を手に入れることができる」

「殺したんですか？」

「人間たちと手を結ぶ前のことだ。時効だ」

「時効なんて法律はとっくに破棄されましたよ」

「それは知らなかった」

ジョン・ドウが白々しくとぼける。

「だれから授かった力なんです？」

「おれたちの親だよ」

「親？」

「そつだ」

「会ったことがあるんですか？」

瑠諏が目に力を入れて尋ねる。

「当然だろ」

「会わせてください」

「無理だな。おまえにはまだ早い」

「私が会ったら都合の悪いことでもあるんですか？」

「未熟者を親に会わせたら粗相をする恐れがあるからな」

瑠諏には新聞を読みながらバス停で待っている紳士の足に飼い犬がマーキングしてしまうというような例えに聞こえた。

気に食わない。すべてが気に食わない。

「私になにをさせたいんですか？」

瑠諏の口調は自然ときつくなる。

「いまさらそんな質問をするのかよ」

ジョン・ドウは困ったもんだと言いたげにため息をつく。

「人間様と仲良くするためのひとつの道具さ。わかるか？おまえさ

んは道具なんだよ」

道具……。

「これからは協力しません」

「拒否権の行使など認められないぜ」

そう言ってジョン・ドウは頬を不快に歪める。

「では、交渉は不成立ということ……」

瑠諏は目を閉じ、舞台を見るのをやめようとした。

しかし、瑠諏の意識はまだ劇場の中に存在した。

座席に座っている感覚に変化はない。

目を開けるとジョン・ドウのさらに卑屈な笑みが待ち構えていた。

「考えたことはないか？ずっとこの世界に閉じ込められていたら自分の体はどうなるんだろうってな」

「えっ？」

「この劇場から出られなければ、現実世界のおまえの体は植物状態の吸血鬼として人間社会の貴重な標本となるか、おれが海に沈めて魚のエサになるかのどちらかだ」

「脅すんですか？」

冷静に尋ねた瑠諏だったが、表情は険しい。

「おまえが反抗的な態度をとるからだろ」

「操り人形のようにこき使われるのは願い下げです」

「今日はやけに素直じゃないな」

「ここから出してもらえますか？」

「自由を掴みたかったら自分の力で取るんだな」

ジョン・ドウが人差し指を突き立て、クイツ、クイツと指招きで

挑発する。

瑠諏の脳にはジョン・ドウに対する怒りだけが充満した。

フワ〜と浮くようにジャンプして舞台へ上がる。

「おあなたの言いなりにはならない」

瑠諏はジワリジワリと距離を詰める。

「気合いだけはほめてやる」

闘う前からのジョン・ドウの勝ち誇った顔は瑠諏の頭の中をさら
に加熱させた。

ずば抜けた瞬発力で水平に飛び、椅子に座ったままのジョン・ド
ウに襲い掛かる。

「ぐわっ！」

声帯を押し潰されたように呻いたのは瑠諏。

恐ろしく伸びてきた片腕が瑠諏の喉を鷲掴みした。

ジョン・ドウの指には鉤状の爪が明瞭な武器として備えてあった。

爪が皮ふにめり込み、血が滲む。

鉄製の鋏が付いた首輪で固定された気分だった。

瑠諏は身動きできず、宙に浮いた足をバタバタさせる。

「ここはおれが支配している世界だと言ったろ。変幻自在になんでもできる。おまえの首をへし折ることなんか朝飯前だ」

ポキポキッと嫌な音がした。

首筋の関節をスムーズに動かす潤滑油の気泡が破裂した。

「あがつ……」

瑠諏は呼吸を整えることも難しくなった。

ジョン・ドウが椅子から立ち上がり、腕を上へ上へとあげていく。

「天国に近づいたか？」

せせら笑うジョン・ドウの声を微かに耳にとらえた瑠諏は思い知った。

客観的な意識に芽生える映像の中で自ら舞台上上がり、闘った経験がないのに挑発にのってしまったことを。

しかも今回はジョン・ドウに支配されている世界で立場は圧倒的に不利だったことを。

「おまえと闘う必要性はないと思ったが……争うのは必ずしも善と悪とは限らないというわけか」

ジョン・ドウが同情するような顔をした。

仲間意識からくる心情なのかは知る由もないが、瑠諏はいましかないとすべての力を下半身へ集中させた。

瑠諏は浮いていた両足でジョン・ドウの脇腹を挟み、体をねじりながら倒した。

「おっと」

ジョーン・ドウは体を床で回転させ、距離を取り、すぐに立ち上がった。

「若気の至りでは許されんぞ」

重量感のある声でジョーン・ドウが凄む。

「手加減するからさ」

瑠諏は口の端から流れる血を手で拭ってから微笑んだ。

「ガキが！」

ジョーン・ドウが敵意むき出して感情を吐き出す。

すると、天井に描かれている天使たちがフレスコ画からスッと立体化して飛んでくる。

まっしぐらに瑠諏の背後に回って小さくてぶっくりとした白い手と足で掴む。

羽をパタパタと動かす貧弱な力なものにもかかわらず苦もなく溜諏を羽交い絞めにした。

「おれの想像力に不可能はない」

ジョン・ドゥは陰険な目つきをして溜諏に近づいた。

第四章 吸血鬼はつるつるに生まれる 5・篠田レミ

車へと帰ってきたジョン・ドウは不機嫌そのものだった。

「あら、今日は時間がかかったわね」

ジョン・ドウの心境などおかまいなしに声をかけたのは後部座席に身を沈めるように座っていた女。

歳は40くらいでゆっくりと瞼を開けた。

「寝てたのか？」

隣に座ってきたジョン・ドウが正面を向いたまま尋ねる。

「悪い？」

女は眠たげな視線を向ける。

ドン、と車が揺れた。

ボディーガード兼運転手の男が後ろの荷台へ瑠諏を放り投げたため揺れだった。

「大事に扱ってよ。私のカワイイ坊やなんだから」

女は口を尖らせるが顔は笑っていた。

「奴に毎回同じことを説明するのは面倒だ。なんとかならないか？」

ジョン・ドウがチラリと女のほうを見て訊く。

「我慢してよ、適任は坊やしかないんだから」

甘えるような声で女が言つと、ジョン・ドウは腕組みして口を閉じた。

「そつだ！あなたが代わりにやればいいじゃない」

女がパチンと手を叩き、自らの閃きに酔って提案してもジョン・ドウは顔色ひとつ変えなかった。

瑠諏の棲家に着くまで車内には女の独り言しか流れない。

「待っててね」

女はウインクして車のドアを開けた。

「おれは二度と会いたくない」

ジョン・ドウが徐々に口を開く。

「あら、そんな言葉を男から言うもんじゃないわ」

女は車を降りてドアを閉めた。

「チツ……自分だけ楽しみやがって!」

ジョン・ドウは忌々しく舌打ちをした。

黒いスーツ姿の男が溜蹠を担ぎ、地下へ運ぶ。

その前を女が歩き、鍵を出して中へと招く。

「散らかってるわね」

血液バッグが散乱しているのを目の当たりにして女は眉毛を八の字にさせた。

「私があとで片付けるから、坊やを寝かせて」

女が指示すると男は瑠諏をカウンターの上に置き、服を脱がせ、ポケットの中や体をくまなく調べはじめた。

「なにか残ってる？」

女の問いかけに男は黙って首を横に振った。

「今日はメモや体になにかを書いている余裕がなかったみたいね」

男は軽く頭を下げ、瑠諏の棲家を出て行った。

ドアが完全に閉まるのを確認すると女はフッフ……と笑った。

女の目は湾曲し、ある目的を達成しようとする喜びに満ちていた。

音を立てずに瑠諏のズボンのチャックを静かに下ろして愛しそうに見詰めた。

「本当はキスしたいけど、舌が歯に当たって吸血鬼にされたら困るから我慢するわ」

ガラガラ蛇の蠕動を真似た舌使いでじっくりいたぶってから、口の中でピチャピチャといやらしい音を響かせる。

自らの口にくわえ、夢中になって奥へと入れていく。

「うっ…」

瑠諏が目を覚まし、頭を上げて下半身で起っている光景を薄目で見る。

「し、篠田レミ？」と、なんとか名を呼ぶと女は顔面に向かって肘打ちをくらわした。

後頭部を強かにカウンターにぶつけた瑠諏は再び気を失う。

「もうちょっと楽しませてよ。どうせ明日になれば嫌なことも忘れてしまっただから」

女は性欲を満足させるための行為に没頭した。

そして、その淫らな行為が終わったあと散らかっていた血液バッグを冷蔵庫に片付けた。

「あら、大事に持ってたのね」

カウンターの隅に転がっていた試験管を見つけて女は微笑んだ。

「これは楽しませてくれたごほうびよ」

女は瑠諏の左手裏側の前腕に“シケンカン”と爪の先で引っ掻いた。

第四章 吸血鬼はつるつるに生まれる 6・新しい朝

瑠諏は新しい朝を迎えた。

頭をもたげると頭痛がして思わず顔をしかめる。

カウンターに伏せていた頬やこめかみではなく、後頭部に熱を感じる。

なにがあったのか思い出せない。

新しい記憶からどんどん失われていく恐怖を瑠諏は感じていた。

立ち上がると視界が揺れた。

頭痛からくるものではなく動かすたびに首、肘、膝、背中など体中の関節と筋肉が“助けてくれ！”と叫んでいる。

喉が渴いているのかな？

まだ1個残っていたはず。

瑠諏は裏返しにしていたスツールを通常の向きに直し、ひとつ手前のスツールを新たに裏返した。

入口手前のスツールまで5つ。

次回、州政府から支給されるまで5日間か……飲んでも大丈夫だな。

カレンダー替わりのスツールから離れ、瑠諏は冷蔵庫に近づいた。

取っ手に指を絡ませ血液バッグを取り出そうとすると、カウンターの上で黒電話がけたたましく鳴った。

諏瑠は冷蔵庫を開けるのをやめた。

大量の血液バッグを見ることもなく、受話器を手に持った。

「もしもし」

『朝早くすまん。サトウだ』

瑠諏は「ああ」と生返事する間に思考回路をフル回転させ、サトウの顔と名前、一緒に仕事をしたことを思い出して安堵した。

『実はいま男の焼死体を発見したという通報があつて現場にやつて来たんだが、おれの記憶だと宮路由貴を連れ去った連邦捜査官のよくな気がするんだ』

「宮路由貴？ええ」と……」

『おい、大丈夫か?』

「確か昨日の……」

そこまで話すと記憶がぼやけた。

『まだ気分が悪いのか?』

「大丈夫です。現場はどこですか?」

「AK地区LJ通り53番地にある村田自動車修理工場だ」

「すぐ向かいます」

「待ってるぞ」

瑠諏が受話器をフックに落とすとチンと軽やかな音が鳴った。

宮路由貴……典型的な和風美人といった感じの顔がぼんやり浮かんで来たが、事件の概要まで記憶が届かない。

吸血鬼が記憶障害になるなんて……。

瑠諏は苦笑いを引きずりながら棲家を出た。

新しい記憶に汚染されたためか、血液バッグを飲むことを忘れていた。

第四章 吸血鬼はつるつる年に生まれる 7・第2種人間招待施設

瑠諏が棲家を出る5時間41分前…さらに瑠諏がジョン・ドウと闘う2時間13分前…宮路由貴は嫌悪している顔を相手に見せることができなかった。

エンジン音と揺れ具合からすると車の中。

「なにを顔にはめたの？」

真つ暗な視界の理由を訊く。

「アイスホッケーのマスクだ」

右側から男の声が答えた。

「無駄口を叩くな！」

怒鳴り声は助手席の方から聞こえた。

隣の男に注意したのか由貴に言ったものなのかはわからない。

マスクの目の部分は粘土かガムらしきものでふさがれている。

顔の筋肉を使ってマスクを外そうとしても食い込むようにベルト

でガツチリ固定されていた。

両脇を押さえつけられ、身動きがとれない。

左側からは香水のきついニオイがした。

女かもしれない。

宮路家の元実家で瑠諏という吸血鬼に血を吸われたところまでは覚えている。

罪を犯したがこんな扱いを受けるのは我慢ならない。

「あんたたち、警察なの？」

乱暴な口調で尋ねてもなにも響いてこなかった。

咳払いひとつしない。

さっきの叱責は由貴だけに向けられたものではないらしい。

沈黙の中、車は徐行するとさらにスピードを落とし、車庫にでも

入れるのか、ソロソロと慎重に進むとやがて停まった。

ドアが開いて左側から香水の匂いが消えると、力強い腕力で由貴は軽々と車から引きずり出された。

「放してよ!」

由貴の声が反響した。

それなりの広さがあって硬い素材で囲まれた建物の中にいるようだ。

椅子のようなものに座らされるとジャラと音がして手首と足首に冷たくて重みのあるものが巻かれた。

たぶん鎖。

「そんなに私が怖いのか?」

由貴が挑発すると、クワクワとニワトリが小刻みに首を動かしながらする鳴き声がもれてきた。

その声を聞いた途端、由貴は寒気がした。

「マスクを外せ」

低い声の指示は絶大で視界はすぐに開放された。

すべての窓は割られ、錆だらけの機械、いたるところにクモの巣がかかっている薄汚い建物の中に由貴はいた。

「どなたかしら？」

暗闇に慣れていた目を凝らしながら正面を見詰める。

真ん中で背の低い中年男がニヤつき、向かって右側は屈強な男、左側にはお揃いの黒いスーツの細身の男。

そしてやや後ろに地味な服を着た40代くらいの女が、車に寄りかかりながらつまらなそうにハイヒールを爪先でプランプランと揺らしている。

「連邦捜査官だ」

背の低い男が写真付きの証明証をチラッと見せた。

名前は剣未克彦。

「ちょっと待ってよ。連邦捜査官がこんなことしていいと思っ
てんの？」

「ようこそ第2種人間招待施設へ。ここは罪を犯した吸血鬼を処刑
する非公式な施設だ」

「処刑？私ってそんなに悪いことをした？」

「宮路由貴、おまえはれっきとした犯罪者だ」

剣未という男が冷たい視線を投げつける。

「私が殺したのは高校生、サラリーマン、警察官もいたかな？血を
吸った男たちの職業はまちまちだけど彼らに共通しているのは生き
ていく価値がないってこと」

「何様のつもりだ！」

剣未は癩癩を起して怒鳴る。

「高校生の男の子はかわいい顔をしていたけれど年上の既婚者ばか
りを狙って関係を築き、飽きてくると旦那に浮気をバラすと私にも
脅しをかけてお金を巻き上げようとした悪魔のような子よ。サラリ
ーマンは会社内でセクハラを繰り返して不倫相手の数も半端じゃな

いろくでなしで、警察官は……」

「もういい」

「せっかくこの世にどれだけ薄汚い人間がいるか教えてあげようと思っただのに」

由貴は媚びるように目尻をたれ下げて不満を口にした。

「だからって肉体が干からびるまで血を吸うことはないだろ？」

「深い関係になっちゃうと吸わずにはいらなくなるのよ」

「どんな言い分けなんだ」

剣未はポカンと口を開けたまま呆れた。

「私は中途半端が嫌いな。それに喉が渴いてたの」

「おれも中途半端は嫌いだ。おい」

剣未が顎を振ると屈強な男が由貴のもとへ歩み寄る。

背後にまわってズボンのベルトを外し、由貴の顎の下に通して顔を持ち上げた。

「ぐっ……なにす……のよ！」

「咬まれるのはいやなんでね」

剣未は腰を折って由貴と視線を合わせた。

「冷酷な殺人、イコール犯人は吸血鬼というレッテルを張られると人間から血をもらえなくなる。おかげでいままで君が起した事件の尻拭いをしないといけなくなった。そこで君には姿を消してもらおう。んっ、反応がないな」

尋ねたあと剣未が目で合図すると屈強な男がベルトを若干緩めて喋れるようにした。

「姿を消してってどういう意味なの？」

由貴がわずかな希望を託して訊く。

「そのままの意味さ」

剣未は冷淡な笑みをまじえて答えた。

「私が死んだり、姿を消せば給料泥棒の日本州の警察だって黙ってないわよ」

「心配には及ばんよ。チヨロチヨロするネズミが現れたら始末するだけだ」

「瑠諏と言ったかしら？警察に協力している吸血鬼さんがいるんだけど、きつと私のことを捜し出してくれるわ」

「奴には無理だ」

剣未は半笑いで断言した。

「知ってるの？」

「クッ、クッ、クッ……」

由貴が尋ねても答える気がないのか、剣未は思い出し笑いをしばらく続けた。

「なにがそんなにおかしいの？」

「これから死ぬ奴に教える必要はない」

「だったらさっさと私を殺ろせば！」

由貴は声を張り上げた。

「そうしたいんだが、吸血鬼を殺すには体を焼くかバラバラにしないといけないからな。それは部下に任せるとして……」

剣未は由貴の黒いワンピースの裾を掴むと徐々に上げていく。

「や、やめて！」

汗ばんでいる濡れた手のひらがふくらはぎから上の方へ移動してくる。

手摺に手首、椅子の脚に足首を鎖で固定されているものの由貴が頭を逸らせて体重を背凭れにかけると椅子が傾いた。

「ちゃんと押えてろ！」

「は、はい」

細身の男が慌てて椅子を押さえた。

声からすると“アイスホッケーのマスクだ”と教えてくれたのはたぶん細身の男。

「人間だけに楽しませるにはもったいない体だ」

「やっぱり吸血鬼なのね」

由貴がキツと睨む。

「やっぱり？鼻が利くんだな」

そう言ったときにはワンピースは捲られ、由貴の真っ白い太腿がつけ根まであらわにされた。

「きれいだ……」

剣未はしばらく見惚れたあと、両手で由貴の脚を広げ、太腿と太腿の間に顔を強引に埋め込んでいく。

「んっ?!…や、やめ……て……」

「本性を見せてもらおう」

いったん上目使いで由貴が嫌々する顔を確認すると、剣未はさら

に顔を左右に揺さぶりながら奥へと沈めていく。

「あっ……いやっ……」

由貴の悶える声と剣末の荒い息遣いが建物内に木霊した。

「もうそのくらいでいいでしょ」

車に寄りかかっていた女が嫌気をさして剣末の行為に歯止めをかけた。

「うるさい！吸血鬼と人間の仲介役のおまえにとめる権限はない」

中年女の忠告に不快感をむき出したのは一瞬で剣末はすぐさま由貴の股へ顔をねじ込み、さらに両手で胸も揉みはじめた。

「んっ……くっ……はぁ〜」

由貴は歯を食いしばって我慢していたが、あっけなく喘ぎ声をもらしてしまっ。

剣末の動きが熱を帯びてくると由貴は体をくねらせて嫌がり、木製の椅子がギシギシと鳴る音が大きくなる。

「いいかげんにしなさい！」

後頭部を小突かれ、剣未はゆっくりと顔を上げた。

口の回りには涎がついている。

「この女吸血鬼を助けるのか？」

「男にされるがままの女の姿を見たくないだけよ。逆なら全然かまわないんだけど」

「そんなものでおれは殺せないぜ」

剣未は黒光りする銃を見詰めた。

「どうかしらね。撃てばしばらく時間を稼げるし、その間にガソリンを頭からかけてあげるわ」

「おれの部下がだまってないぞ」

「だったら部下の忠誠心を試してみる？お金で買収してみせるから」

女の真剣な顔つきを見て剣未はニヤリと笑うと大袈裟に両手を上

げた。

「わかったよ。こんなひと時のお遊びで命を落としたくないからな」

剣未は立ち上がって口についている涎を袖で拭い取った。

睨みながら見ていた由貴に剣未は言った。

「せつかく寿命を延ばしてやったのに残念だ。おい、用意しろ」

屈強な男が建物の奥からポリタンクを運んできた。

「きれいな女性には火あぶりがよく似合う」

「昔、魔女狩りって火あぶりだったみたいね」

険悪ムードだった剣未と女が愉快に処刑方法を話し合う。

2人の豹変ぶりを目にして、由貴は背中に冷たいものを感じた。

「あつ、そうだ。そろそろ坊やに血液を渡しに行く時間じゃない？」

女がパン！と両手を叩く。

「そうだな」

剣未が腕時計を見ながら答えた。

「私も連れてって！久し振りに会いたいだよ」

「駄目だ」

「そんなこと言っているの？この吸血鬼にしたこと言い触らしてやるから」

「わかった」

「やった！」

少女のように高い声を張り上げて喜ぶ女とは対照的に剣未は苦々しい顔をした。

「そろそろ電話しないと寝ちゃうわよ。ねえ早く電話してよぉ」

色っぽい声に誘惑されたと思われたくないのか剣未は無表情で携帯電話を取り出した。

「口をふさいでおけ」

剣末の指示で再び登場したベルトがグイグイと口の中へ押し込まれ、由貴は不味いワニ皮のベルトをくわえさせられた。

助けや叫び声なんか上げないわよ。

由貴はおとなしくベルトを噛んでいることで意地を張る。

「よお、瑠諏。事件解決おめでとう！褒美に血を渡してやるからKZ工場へすぐに来い」

剣末は人格が変わったようにテンション高めに会話をしている。

事件解決とはたぶん私が犯した事件のこと。その報酬に血をもらってるなんて……私のやってることとそんなに変わらないじゃない！

由貴は心の中で罵った。

「ああ、そうか。ごめん、ごめん。重度の記憶障害だったな。これからKZ工場の住所を言うからメモするか頭に叩き込んでおけよ」

彼が、記憶障害……。

軽蔑したばかりなのに瑠諏の顔を思い出すと、由貴の感情はなぜか静まった。

剣未が携帯を閉じて「面倒くさい奴」と不満をもらした。

「しょうがないでしょ。すぐに記憶が消えちゃうんだから。それに吸血鬼なのに自分の親を知らないなんて切ないじゃない」

女が瑠諏を擁護した。

彼のことならなんでも知っているという口振りにも聞こえた。

モテるのね。

由貴は少し腹が立っている自分に気づき、知らず知らずのうちに女を睨んでいた。

その奇異な視線を察知したのか女がこちらを見た。

嫉妬に近いものが自分の感情に芽生えたことを否定しようと、由貴は白い歯をこぼして密かに笑った。

由貴が瑠諏のことを知ったのは場末のバー。

一人寂しく酒を飲む芝居をしながら、生きていく価値のない男が

来るのを待っていた。

細長いスペースにバー・カウンターと店の奥に一台だけビリヤード台があるごんまりとした昔懐かしいプール・バー。

その店のマスターは顎に白髭をたくわえ、真っ白いナプキンでキユキュツと音を立ててグラスを磨いていた。

由貴はそのマスターと体の関係を保って生きていく価値のない男の情報と、バーを待合せ場所として使わせてもらっていた。

「今日の男は丸2だよ」

丸2とは二枚目のことで無理やり若者言葉を使って会話を弾ませようとしている。

そんなマスターを横目で見て“あなたの血もいつか吸ってア・ゲル”と、由貴は心の中で誓っていた。

その日、いつもは埃をかぶっているビリヤード台で玉を突いている男たちがいた。

「血を舐めるとその人の過去を見ることが出来る吸血鬼がいるんだ

よ。この前、おれの腕をビール瓶の破片で切って血を舐められて危うく吸血鬼にされるところだったんだぜ」

そのうちの一人は酔いが回り、仕事の愚痴をビリヤードの対戦相手にこぼしながら、キューを突くことによってストレスを発散させていた。

最初はなんのことを言っているのかわからなかったが、AK地区で刑事をしていることなどペラペラ喋りはじめたので察しがついた。

吸血鬼が警察とタッグを？

滑稽で笑いそうになったと同時に興味もわいた。

その吸血鬼に血を吸われたのなら私のことを理解してもらえない唯一の存在になるかもしれない。

AK地区限定で事件を起せば会える確率は高いかも。

結局は理解してもらえなかったけど……。

彼は私の罪を憎んだ。

当然よね。

人をたくさん殺しちゃってるもの。

でも、わからない。

人間に手を貸すなんてあの瑠諏という吸血鬼はまだまだ青いわ。

吸血鬼には自殺という概念がまったくない。

なのに日本州に住む人間の自殺者数は急増している。

自分の命を自らの手で絶つなんてありえない。

地球に生息する生き物で自殺という愚かな選択をするのは人間だけ。

人間のような貧弱な生き物に支配されている地球がかわいそう。

あっ、そういえばプール・バーのお喋りな刑事さんは私を尾行してもう少して血を吸うことができたはずの刑事さんと同一人物？

いまさら関係ないか……。

「ずいぶん余裕があるのね？」

女が訝しんで訊いてくる。

余裕なんてあるわけがないのに……思い出にふけってつい笑いたくなっただけ。

由貴は心で思っていることを表情に出せない自分を悔やんだ。

悔やむ？

人間のようなネガティブな感情を抱えたことがおかしくて、由貴の笑いはとまらない。

「おかしくなつたんじゃないのか？」

剣未が首をかしげる。

「そうね」

女も相づちを打つ。

「あとは頼んだぞ」

剣未が細身の男を睨んで指示を出す。

「は、はい……」

細身の男が自信なさそうに返事した。

「いいの、あんなのに任せて？」

「女の吸血鬼を一人で始末できないのならいつまでたっても一人前にはなれない。それに早めに行かないとお気に入りの瑠諏君が待合せ場所に誰もいないと帰ってしまうぞ」

中年女が気を利かせて小声で尋ねる配慮をみせたのに剣未は大声で答えた。

「早く、早くう」

女は年甲斐もなく目を輝かせて急かせる。

「おい」

剣未が顎をしゃくると屈強な男が小走りで運転席に向かった。

「今日は坊やになんて名乗るの？」

「ジョン・ドウ」

「それは傑作ね。私はジェーン・ドウにしようかしら」

「帰ってくるまで始末しておけよ」

女がおどけても剣未は無視をして細身の男に声をかけた。

車が出て行って建物内には由貴と細身の男だけが取り残された。

細身の男がさっそくポリタンクのキャップを外した。

ガソリンの臭いが由貴の鼻をかすめる。

もう一度彼に会いたい。

彼の記憶から私が消えてしまう前に……。

ガソリンの臭いから刺激されたのは恐怖や絶望ではなく、最期に
ひと目会いたいという純粹で単純な切ない想いだった。

「うぐっ……あがっ」

由貴はもがいて口をふさがれているベルトが邪魔だということを
アピールする。

「なんだ？なにか言いたいのか？」

細身の男は作業を中断して後ろに回り、ベルトを口から放した。

「ひとつ言いたいことがあるの」

「なんだ？」

細身の男が迷惑そうに眉を寄せる。

「あんな男の言いなりになって悔しくないの？」

「それがおれの仕事だ」

生真面目な答え方からするとこの男に色仕掛けなど通じない。

細身の男はポリタンクを持ち上げ、由貴の頭にかけてよつとする。

完全に手がふさがっている。

「ねえ、知ってる？ガソリンをポリタンクに入れて買い置きしておくのは消防法で禁じられているのよ」

細身の男が「えっ?!」と声をもらしたとき、由貴は爪先立ちで

クルツと回転すると、鎖で括られた椅子を体ごとぶつけた。

バーンという椅子の破壊音のあと、バラバラになった木片が散らばり、鎖から開放された。

「ぐっ……」

細身の男は頭から血を流して倒れた。

「ガソリンは消防法で認められた金属製の容器に入れてね」

由貴は細身の男のポケットからライターを探り当てた。

シルバーメッキの表面にダイヤモンドカット模様が施してある高級品。

そして、ポリタンクが空になるまでガソリンをかけた。

由貴はライターのローラーを親指で回して青い炎を出すと問いかけた。

「聞きたいことがあるの」

「な、な……んだ……」

細身の男が痛々しく口を開く。

「瑠諏という吸血鬼の住所を教えてください？」

由貴が命令口調で訊く。

「そ、それだけ、で……た、助けてくれる……のか？」

声と体を震わせながら尋ねてくる。

「ええ」

「本当……か？」

「ええ」

細身の男は安堵の表情を浮かべると瑠諏の住所をあっさり吐いた。

「ありがとう。ライターはここに置いとくわ」

由貴は火がついたままのライターを慎重に立てた。

抵抗するとは思ってなかったが、逃げる時間を少しでも稼ぐためにガソリンが浮いている床の上にあえて立てた。

目の前にあるライターを掴もうと細身の男は手を伸ばす。

「あっ?!」

ガソリンで手が濡れていて滑らせたのか、スローモーションのようにライターが落ちていく。

「ぐわっ」

細身の男はあっという間に炎に包まれた。

第四章 吸血鬼はつるつ年に生まれる 8・卵が先？

タクシーから降りた瑠諏は自分の左腕の裏側をもう一度確認した。

わずかに見える“シケンカン”という文字。

気づいたのはタクシーの運転手に棲家の住所を告げたとき。

左手首のペイントの上からカタカナの文字が前腕に刻まれてミミズ腫れになっていた。

自分でやったのだろうか？

試験管の記憶を失うことの重要性は薄れてきたと思っていた。

だとすると誰がなんのために……試験管のことを知っているのは……。

瑠諏の悩みは違う悩みが発生したことによりいったん消えた。

薄暗い階段が地下へと伸びる自分の棲家の前で見慣れぬ影を見た
瑠諏は立ち尽くすしかなかった。

入口のドア付近まで光が届いておらず、黒い影の正体がわからない。

瑠諏は事件現場から帰ってきたばかり。

AK地区LJ通り53番地。

村田自動車修理工場には男らしき焼死体があった。

らしきというのは焼け縮んだFBIの写真付き証明証が見つかったからだ。

サトウは半分が茶褐色になった写真、焼け残りの黒いスーツの生地に見覚えがあり、由貴を連れ去った連中の一人に違いないと言っていた。

炭化して真っ黒コゲの死体からDNAを採取することは不可能。

サトウから許可をもらい瑠諏はふ菓子のようにカスカスになった骨を舐めてみたが舞台を見ることはできなかった。

「すみません」

「いいんだ。だいぶ疲れているようだ。家で休んだほうがいい」

瑠諏が意気消沈する姿を見てサトウは優しく諭して帰してくれた。

現場には時間にして10分もいなかったかもしれない。

タクシーの中でミミズ腫れの文字に悩まされ、家の前ではドアをふさぐように誰かが立っている。

今日は悩みの種が増える一方だ。

瑠諏は見詰め合っている時間が長く感じはじめ、相手は声をかけられるのを待っている。

「誰ですか？」

瑠諏が警戒しながら尋ねる。

「もう忘れたの？」

聞き返してきた声は女性のもの。

頭に浮かぶのは篠田レミの姿。

しかし、彼女が生きていれば40代。

声はかなり若い。

となると……。

意識的なのか声の主は階段を二段上って影を払い、姿を現した。

真っ白い肌と黒髪が印象的な若い女。

「宮路由貴?!」

瑠諏の口からその名前が出てきたのは、ぼんやりとした宮路由貴の記憶が事件現場でサトウと会話してある程度回復することができたからだ。

かみ合わないながらも昨日の宮路由貴との出来事を話しているうちに思い出した。

「覚えていてくれたんだ」

宮路由貴の顔がパツと明るくなる。

「仕返しにでもきたのかな?」

瑠諏は見てきたばかりの事件現場のことを頭に浮かべて訊いた。

サトウは個人的見解と言いながら連邦捜査官が宮路由貴を連行中になんらかのトラブルに巻き込まれたことから、残りの捜査官の安否も気にかけていた。

「違うわよ！ねえ、しばらく匿ってくれない？」

由貴は憤慨したあと、急速に表情を変えて悲壮感を滲ませる。

「無理な相談です」

「ねえ、お願い。私、ひどい目に遭わされたんだから」

「自業自得ですね」

瑠諏は冷ややかな視線を送る。

「警察に突き出すつもり？」

「そのとおり」

「警察は無力よ。どうせまた連邦捜査官に連れていかれるわ」

由貴は眉毛を下げ、いまにも泣きそうな顔になる。

「警察を呼びますからそれまで待っていてください」

「嫌よ」

「それなら警察署まで付き添ってあげますよ」

「それも嫌」

由貴が子供のように駄々をこねるので瑠諏はお手上げとばかりにため息をもらす。

実力行使という言葉が脳裏をかすめると、由貴が思わぬことを言い出した。

「ねえ、あなた親を知らないんでしょ？」

「どうして、そのことを……」

瑠諏は途中で言葉がうまく出てこなくなった。

親を知らない……そんな個人的なことを知っているのは篠田レミくらいだ。

「家に入れてくれたら親が誰か教えてあげる」

由貴が取引を持ちかけてきた。

瑠諏はしばらく顎に手を当てて考え込む。

「吸血鬼なら誰もが知っていることなのよ」

由貴が棲家を訪れたタイミングとミミズ腫れの文字とは関連性があるような気がする。

「わかりました」

瑠諏はとりあえず由貴を棲家へ入れることにした。

「商売してるの？まさかね」

由貴が元カフェの店内を見回して自問自答する。

「私のことより、親について話してもらいましょうか」

「せつかちね」

由貴は唇を尖らせてスツールに腰を下ろし、瑠諏は腕組みをして聞く体勢をとった。

「30年くらい前に小さな隕石が落ちてきたの。それを偶然拾った女の子が隕石を触っていると岩盤が剥がれて中から茶色い卵が姿を現したのよ。こっそり家に持ち帰ると卵からちっちゃい恐竜のような生き物が生まれて、女の子は秘密の地下トンネルでそれを育てたの」

「まさかその恐竜のような生き物が吸血鬼の親だって言いたいんですか？」

「そつよ」

瑠諏は“馬鹿馬鹿しい”と思ったが、口に出すのは思いとどまった。

「本当の話よ。その生き物はつるつるの4年ごとに2個ずつ卵を産み落としたらしいわ」

由貴は瑠諏の目に浮かぶ不信の色を振り払うべく、説明を加える。

「具体的な数字を持ち出されても信憑性は感じません」

「信じるか信じないかはあなたの勝手よ。わたしたちが吸血鬼と呼ばれるのは血を吸うというだけで古典的な怪物の名前をつけられただけなんだから。それにちゃんと鏡に映るでしょ」

由貴の話はB級映画のシナリオ程度にしか聞こえず、瑠諏は首を小刻みに振って跳ね返した。

「こっちは真剣に話してあげてるのに、その態度はないんじゃない」

由貴は言葉をつつかえ、またしても泣きそうに目を潤ませる。

会ったたびに表情をコロコロ変える由貴に同情するわけにはいかない。

瑠諏には聞かなければいけないことがある。

「連邦捜査官を殺したんですか？」

唐突な質問が気に障ったらしく由貴は目力を入れて瞼を全開にする。

「殺してないわ！」

「信用に欠けますね」

「血を吸って映像を確かめないと信用できないんだ」

由貴が馬鹿にするように挑発する。

「そんなことはありませんよ」

「過去の犯罪歴なんてなんの役にも立たないんだから」

由貴はそっぽを向き、完全に不貞腐れてしまった。

第四章 吸血鬼はつるつるに生まれる 9 車中にて

「なにやってんだ」

剣未はイラつきながら携帯の電源を切った。

「どっしたの？」

それまで車窓からぼんやり景色を眺めていた篠田レミが横目で見
る。

「繋がらない。しくじった……」

「だから言っただじゃない」

篠田レミが言葉をかぶせて非難する。

「第2へ戻るぞ」

運転席にいる体の大きな男はおもちゃに見えてしまうハンドルを
器用にさばいて車をリターンさせる。

「ちょっとこれからランチをごちそうしてくれる約束でしょ」

「おまえにも責任はあるんだからな。立会人のくせに処刑を見るのをやめて吸血鬼の坊やなんぞに走るからだ」

「だって吸血鬼が焼ける臭いって最悪なんだもの。薄汚い心を持つたいろんな人間の血を吸っているからかしら」

篠田レミは責任を回避するような言い訳をして再び視線を外に向けた。

車が第2種人間招待施設に近づいたとき、時間は正午を回っていた。

「ああ、あ、やっぱり警察が来てるわよ」

狭い間口で仕切られ、トタン屋根をかぶせた個人経営の町工場が軒を連ねる場所に、パトカーと消防車の赤色灯が忙しなく回転して周囲を不安にさせていた。

村田自動車修理工場の看板が掲げてある建物の前には野次馬が数人いた。

入口は青いビニールシートでふさがれて奥が見えない。

剣末は携帯電話のボタンを押した。

「おれだ。第2で……………そうか、わかった」

手短に会話を終え、深いため息をつく。

「ビニールシートで見えないようにしているということは誰か死んだのね」

篠田レミは素っ気ない態度で電話の内容を聞きだそうとする。

「男性らしき焼死体がひとつ」

「あの女の吸血鬼、逃げたんだ。すごい」

篠田レミは感嘆の声を上げる。

「余計な仕事を増やしやがって！」

剣末の悪態は逃げた由貴と失態を演じた部下のどちらに向けられたものなのかわからない。

「これからどうするの?」

「女を捜す」

「あてはあるの?」

問われた剣未は口を真一文字に結んだ。

「私はあるんだけどな」

篠田レミはニコツとして剣未の顔を見る。

「まさかDF地区の自宅に帰ったとでも言っんじゃないだろうな?」

「違うわよ。きっと坊やのところだわ」

「あの女が誹謗のところへ?根拠はあるのか?」

剣未は意外な答えを聞かされて顔をしかめる。

「私が坊やの話しをしているとき、一瞬だけすごい目で睨まれたか
ら」

「女の勘ってやつか」

「ええ」

「行ってみるか」

剣未の表情は心なしが緩んでいた。

冷蔵庫を開けた途端、愕然した。

どうしてこんなに血液が……。

冷蔵庫のライトに照らされた赤い光が顔一面を染めるくらい大量の血液バッグが冷凍されている。

そして“さあ、飲んでくれ！”と言わんばかりに目線の先に試験管が横たわっていた。

瑠諏のイメージでは冷蔵庫には試験管と血液バッグがひとつだけ残っているはずだった。

奇妙な感覚が脳を刺激する。

警察に捜査協力した報酬として受け取り、毎回冷蔵庫の扉を開けるたびにシヨックを浴びる……というデジャブのような感覚。

どうして今日にかぎって？

傍に宮路由貴がいるからだろうか？

彼女を非難しておきながら自分も同じことをしていた負い目が記憶を取り戻すきっかけとなったのかもしれない。

「どうしたの？」

それまで拗ねていた由貴が瑠諏の不審な行動を目にして近づいてくる。

冷蔵庫の扉を閉めるのは気が引けた。

厳しくとがめられることを瑠諏は覚悟した。

「わあ、すごい！」

由貴は整然と並ぶ血液バッグを見てテンションを上げ、瑠諏の予想とは違う反応をみせた。

瑠諏は赤く染まった試験管を取ると、冷蔵庫の前から離れた。

「ねえ、ひとつもらっていい？」

由貴が猫なで声でおねだりしてくる。

彼女の頭の中は血を飲みたいという欲求だけで、どうやって集めたのかは問題視していない様子。

瑠諏が試験管を見詰めながら言う。

「この血は私が生まれた当時に採取したもので、舐めれば生みの親
がわかるかもしれないんです」

「そうなの」

由貴が生返事でかえす。

「あなたの言ったことが正しければ、連邦捜査官を殺してないとい
うことを信じましょう」

「やっぱり私の血を吸うと頭がパニックになるの？」

由貴の質問に瑠諏は鼻で笑って答えると、試験管を強く握って温
めた。

「吸血鬼の低い体温だと時間がかかるわよ」

「そうですね」

瑠諏は試験管をバー・カウンターの角で叩き、ガラス片を払って
からアイス状に固まった赤い棒の一部を口に運ぼうとしたところで
動きをとめた。

「意識が飛んでいる間、襲わないでくださいね」

瑠諏がわざと睨むような芝居をして注意を促した。

「自信ないわ」

由貴は悪戯っぽく微笑む。

「飲みたければいくつでもどうぞ」

やっとおねだりの要求に答えてくれたことに感謝して由貴は瑠諏の腕にしがみついた。

赤いアイスは瑠諏の舌の上でゆっくり融けていった。

瑠諏の顔はすぐに歪んだ。

薄気味悪い下水道のセットはリアリティーを追及して着色した水が流れ、舞台の床を水浸しにしていた。

そして、舞台には得体の知れない怪物が一匹と女がひとり。

女は瑠諏が面倒を見てもらっていた頃より若い篠田レミに間違いないなかつた。

怪物は透明な粘性の液体で保護された卵を口から吐き出した。

卵の殻が隆起して凸凹を作り、まるで自ら呼吸しているかのような動き繰り返す。

殻が割れ、中から「ひっく、ひっく」と息を細かく吸い込む泣き声が聞こえる。

篠田レミは殻を剥がし、赤ん坊を愛しそうに抱き上げてあやす。

由貴の言ったことは本当だった。

舞台に見切りをつけた瑠諏は目を閉じることにした。

瑠諏が覚醒すると見知らぬ2人組の男たちが、由貴を抱えて棲家から出ていこうとするところだった。

「とまれ！」

瑠諏が張りつめた声で呼び止める。

背の低い男が「チツ」と舌打ちして、ガツチリとした体格の男は由貴を肩に担いでいた。

血液バッグからもれた血が床一面に広がり、由貴が抵抗した形跡が見られる。

「不法侵入は許してあげますから、その人は置いていってくださ
い」

「この女をかばう理由がおまえにあるのか？」

背の低い男が振り向く。丸顔の中年オヤジだ。

「一応お客さんなので勝手に連れ出されるのは困ります」

「おれには関係ないね」

「連邦捜査官ですか？」

由貴が執拗に追う相手は彼等しかいない。

「ああ、そうだ。バッジを見せようか？」

背の低い男だけが積極的に絡んでくる。

「結構です」

「おれを覚えているのかな？」

男が試すように訊く。

「なんとなく」

溜諏は嘘をついた。

顔に見覚えはないし、連邦捜査官に知り合いもない。

ただ“おまえを知ってる”というニュアンスをおわせて少しでも有利な状況をつくりたかった。

「賢いね」

「ニワトリほどじゃないですよ」

「クツクツクツ……」

瑠諏の自虐的なジョークは男の卑猥な笑いを引き起こす。

「なにがそんなにおかしいんですか？」

「そのジョークを聞くのは2回目だ」

相手の男は瑠諏が記憶障害だということを知っている。

しかも最近会った相手らしい。

「宮路由貴を返すつもりはないんですか？」

「おいおい、警察に捜査協力している奴の台詞とは思えんな」

「警察には必ず引き渡しますよ。彼女を納得させて自首させるつもりです」

「そんなことできるわけないだろ」と言っただけで男は後ろを向いてしまった。

「待て！話はまだ終わってない」

瑠諏は目を赤く染め、乱杭歯をむき出して戦闘態勢に入る。

「おれに2度も歯向かうのか？それなりの覚悟はできてるんだろうな？」

クルリと振り向いた男は片方の眉毛をピクピクツツと不快げに動かない。

「もちろん」

瑠諏は即座に返事して余裕をみせた。

しかし、心の中はまったく違った。

瑠諏が舞台を見ていた時間はほんの僅かのみ。

その間に吸血鬼の宮路由貴を簡単に打ちのめしてしまうなんて…。

ガツチリとした体格の男が一人でやったのだろうか？

それとも二人で？

瑠瑠が警戒心を張ると、小さいほうの男がささやき、頭ひとつ大きい男が膝を折って耳の位置を下げる。

これで力関係がはっきりした。

「いいことを教えてやろう。おれとおまえは親から生まれた純粹な吸血鬼だ。よって血を舐めると舞台を見る特殊能力を持っている。その女は吸血鬼に血を吸われた準吸血鬼ということになる」

背の低い男が得意気に話す。

「なんでも区別したがるのは嫌いです。あつ、それから吸血鬼の親が宇宙から来た化け物だということはさっきわかりました」

瑠瑠は目の前にいる男が吸血鬼だという驚きを表情に出さなかった。

「それはよかった」

「私たちを生んだその化け物は卵から生まれたんですか、それとも……」

「卵が先かどうかの答えを知りたけりゃ宇宙進化学の勉強でもするんだな。おれの怖さを忘れてるな。前はジョン・ドウという名前で会ったぞ」

「ジョン・ドウ？そうでしたか？」

瑠諏は首をひねるがなにも思い出せなかった。

「おれに咬むことができたなら特別にそのときの様子を舞台で見せてやるぞ」

「便利な能力をお持ちでうらやましいです」

「馬鹿にしてんのか」

2人が会話している間、部下と思しき屈強な男は由貴を肩から下ろして床に寝せると、懐からオフホワイトの固形チーズのようなモノが数個取り付けられたベルトを取り出した。

「かかってこいよ」

ジョーン・ドウと自ら称す男が挑発的な態度で瑠諏の視線を逸らせる。

屈強な男はチーズのようなモノを由貴の体に腰痛ベルトみたいに巻いた。

まさか、プラスチック爆弾？！

「集中しろ！」

ジョーン・ドウの声が耳に入ったとき、蹴りが瑠諏の腹に深くめり込んだ。

「ぐふっ……」

瑠諏の口から血が飛び散る。

内臓のどこかがイカれた。

「血を飲み込むなよ。仮死状態で舞台を見ているおまえをいたぶるほどおれはサディストじゃないぜ」

床に倒れそうになる瑠諏へ容赦なく膝頭を突き上げて顎に命中させる。

宙に浮いた瑠諏の体は床に不自然にバウンドした。

「おれに傷ひとつつけることもできんのか」

ジョン・ドウは憮然として見下ろす。

床に寝そべる瑠諏の視界に入ったのは由貴に巻かれているプラスチック爆弾に釘のようなものが挿されていくところ。

雷管……。

「おまえはいままでどおり失っていく記憶のことなんか気にせず、おれたちの道具として働け」

ジョン・ドウの辛辣な言葉を無視して瑠諏は由貴のところまで這ってプラスチック爆弾が仕込まれたベルトに手を伸ばす。

屈強な男が瑠諏と由貴の間に入った。

「準備ができたらあとはおれに任せろ」

ジョン・ドウの指示が飛ぶと屈強な男が一礼して棲家から出ていった。

「その女は死ぬ運命だ」

プラスチック爆弾に触れた途端、瑠諏の指がジョン・ドウの足に踏まれた。

ゴキユと指の骨が折れる音がしたが、せめてものプライドとして悲鳴を上げるのを我慢した。

「新しい第2種招待施設を見つけたと思ったが、すぐに爆破しないといけないとはもったいな……?!」

瑠諏がガブツと足首に咬みつき、ジョン・ドウの勝ち誇った台詞は途中で遮られた。

「まだ体力は有り余ってるみたいだな」

「知らないと思いますが、私は味覚がすぐれているのか血の味であなたのことを思い出すことができました」

ジョン・ドウの歪む顔を見上げて瑠諏は満足気に頬の筋肉を緩めた。

「それはよかった。しかし、君は無駄に不利な状況を作っただけだ。舞台上のおれは無敵だ」

「それは知らなかった」

「ご希望どおり舞台へ連れて行ってやる」

瑠諏はジョン・ドウのいざなう舞台へ招待された。

前回ジョン・ドウと闘ってさんざんやられた場面をVTRの早送りのように嫌味なほど繰り返し観せられた。

「目が回りそうです」

客席から瑠諏が訴える。

「これで力の差は確認できたかな」

舞台の上の椅子に座っているジョン・ドウはふんぞり返って余裕しゃくしゃく。

後方では偽者の瑠諏と偽者のジョン・ドウが飽きもせず演技を

続けている。

きびきびとした動きでキュルキュルとテープが空回りする音が人の口から発せられている。

「いまからそつちにいきます」

瑠諏が座席から立ち上がった。

「そんなに焦らなくてもいいだろ」

「いつ起爆スイッチを押されるかわかりませんからね」

瑠諏は舞台の縁に手をついてジャンプする。

「身軽だな」

「体力がリセットされました」

「それが舞台へ誘った狙いか」

ジョン・ドウも椅子から腰を浮かせる。

「見破られたみたいですね」

「馬鹿な奴だ」

そして、偽者の瑠諏と偽者のジョン・ドウがニタツと歯を見せて怪しげな視線を本物の瑠諏に投げかけた。

テレビ放送終了後の砂嵐を思わせる灰色と虫のように蠢く白黒の点が描かれた大きな生地が落ちてきて偽者2人組を隠した。

2人にかぶさった砂嵐模様の生地は抵抗なく舞台の上に舞い下りた。

消えたと思われた偽者の2人組は瞬間移動して、本物の瑠諏を後ろから羽交い絞めにした。

「天使のときと同じ手ですね」

瑠諏は天使たちによって身動きできずにやられた場面を引き合いに出して、攻撃がワンパターンだと皮肉った。

「引っ掛かったほうがもつと頭が悪い」

ジョン・ドウは自尊心を傷つけられたのか表情を失った笑いを見せながら瑠諏に近づいた。

「頭が悪い？……たしかにそうかもしれないね。私も単純な方法しか思いつかなかった」

「なんのことだ？」

片目だけを虫メガネで覗くみたいに広げてジョン・ドウが睨む。

と、その刹那。

「うっ……ぐわわわわわ」

ジョン・ドウが胸のあたりをかきむしって苦しみはじめた。

「な、なにを……した？」

「別に。ただ、あなたの血を吸い続けているだけですけど」

瑠諏は冷め切った声で答える。

ジョン・ドウは思考回路を現実世界へと切り替えた。

「き、きさま！」

足首にかぶりつく瑠諏の頭をジョン・ドウは何度も何度も蹴った。

瑠諏の唇の端から、乱杭菌の先から、ジョン・ドウの下肢静脈からとめどなく何本もの筋となった血の川が流れる。

瑠諏はゴク、ゴクツと喉を鳴らしてジョン・ドウの血を飲んでいく。

頭を蹴っていた力が次第に衰えると、ジョン・ドウは崩れ落ちた。

顔が真っ青に変色し、皮ふがカサカサになって皺だらけになる。

首筋には極細の血管が浮き上がり、体が一回りも二回りも小さくなって顔は干し柿のようにやつれた。

「ほとんどの血を吸うことができませんでした。残るは情性の生命力だけです。あなたはまだ終わりです」

瑠諏は立ち上がってジョン・ドウを見下ろす。

「お、おまはあ、ば、馬鹿があ」

ジョン・ドウが掠れ声で言う。

「もしかしたら一生舞台を見続けるかもしれませんが、あなたに殺されるよりマシですし、なんとか劇場から抜け出す方法を探しますよ」

瑠諏は微笑んだが、“楽観”などという言葉は表情のどこにも見当たらなかった。

「おれの……おれの血でもう二度と舞台は見せない。思考回路を完全にブロックしたぞ。現実を受け入れるがいい」

ジョン・ドウが最後の力を振り絞るように声を出す。

舞台を見せない？

なぜ、そんな真似をするのかわからない。

再び舞台へ引き返せば体力が戻り、瑠諏を叩きのめして現実世界の瑠諏にダメージを与え、血を吸うのをやめさせることだって可能だったはず。

それをあえてしないというのは理解不能だ。

瑠諏はふに落ちないまま由貴を抱きかかえた。

すると、由貴が眠そうな顔でおぼろげに目を開ける。

「やあ」

瑠諏はなぜかこぼれそうになる笑顔を隠すために声をかけた。

「きゃー」

由貴は絶叫して瑠諏の顔を両手で突く。

離してくれという拒否行動を解除するには由貴を手放すしかなかった。

「自分の顔をよく見る」

変わり果てたジョン・ドウが笑いながら言った。

栄養を失った茶色い歯がポトリと一本落ちた。

「まさか?!」

瑠諏は入口の横にかけてある鏡で自分の顔を見た。

映ったのは脂ぎった中年男。

ジョン・ドウ……だ。

過去のジョン・ドウの台詞が脳を叩く。

“おれは人間でも吸血鬼でも大量の血を吸うと、その体を手に入れることができる”

瑠諏は理解した。

自分も親から生まれた純粋な吸血鬼ならば相手の血を余分に吸うと体が乗り移る能力があることを……。

鏡越しに本物のジョン・ドウを見ると手に赤いランプが光るマツチ箱程度のリモコンを握っていた。

起爆装置?!

「吸血鬼は自殺できないぞ！」

ジョン・ドウ顔の瑠諏は大声を張り上げて骨と皮だけになってすでにジョン・ドウの顔を失ったジョン・ドウに吸血鬼としての本能を喚起した。

すると、本物のジョン・ドウが由貴に向かってとんでもない言葉を口走った。

「ア、アイ……シ……テル」

しかも、瑠諏の声色を使って。

由貴は以前の原型をとどめていない本物のジョン・ドウと鏡の前に立つ偽者のジョン・ドウを見比べ、そして、本物のジョン・ドウの手を握った。

“愛してる”の言葉の魔力は由貴の心を完全に奪った。

「魂は、お、おまえに……あ、あずけた……自殺、じ、じゃない……ぞ」

本物のジョン・ドウは偽者のジョン・ドウへ死の伝言を残した。

その台詞を聞いたとき、由貴は手を握っているのは瑠諏じゃないと悟った。

カチツというスイッチを押す音がかすかに聞こえた。

強烈な爆発音と爆風が周囲を包んだ。

第四章 吸血鬼はつるつるに生まれる 11・爆発直後

「ねえ、あの女の吸血鬼が坊やのところに行ったのかくらい教えてよ」
手っ取り早く片付けてくると剣未に言われ、我慢して待っていた
篠田レミが運転席にいる屈強な男に不平をもらす。

直後にドーンという重い爆音。

爆風で飛んできた建物のコンクリート片が当たり、車のフロント
ガラスがヒビ割れて蜘蛛の巣状に広がった。

篠田レミは慌てて車から飛び出す。

それより先に出ていたのは屈強な男。

視界ゼロの白い煙の中、突進していく。

根こそぎもぎ取られた街路樹が路上駐車していた車のドアを破壊
して防犯対策用のけたたましい警告音を鳴らしていた。

地下にある瑠諏の棲家は土台を失い、8階建てのビルに押し潰されていった。

絶望的な状況の中、屈強な男が瑠諏の棲家の入口付近で瓦礫に埋もれていた剣末を早々と見つけた。

着ている服に違和感があった。

サイズが合っていない。

黒一色。

瑠諏が着ていたものだった。

訝る屈強な男。

「う、うう〜」

剣末が苦しそうに呻く姿を見て屈強な男の行動から淀みが消えた。

「ボス！」

篠田レミは屈強な男の声をはじめて聞いた気がした。

骨が折れていないところを慎重に選びながら抱えると小走りで車に向かう。

「ちょっと、坊やも探してよー!」

篠田レミの叫びは隣接するビルのプロパンガスの誘爆によってかき消された。

ボロボロの剣未を後部座席に寝かせ、肘でフロントガラスを払い除けて車を走らせる。

追いかけてくる篠田レミの姿など目に入らなかった。

病院に連れていくと、医者には数時間安静にしていれば自然治癒で治りますと言われた。

屈強な男は少しでも早く回復してもらおうと、瑠諏に渡すはずだった血液バッグを取りに車に戻った。

病室に帰ってくると、ベッドに剣未はいなかった。

風が吹き、真っ白いカーテンが寂しげに揺れていた。

第四章 吸血鬼はつるつるに生まれる 12・残された男たち

パソコンの画面と睨めっこしてきたばかりのサトウは自販機から出てきた糖分ゼロの缶コーヒーで喉を潤してひと息いれた。

目を通していたのは現場から採取した科学サンプルの調査報告書で、瑠諏の棲家で起きた爆発事件のことが文書化されたもの。

残留物によりC - 4というプラスチック爆弾が使用されたことは間違いなく、爆風約8 km / sで隣のビルも半壊状態にしてしまった。

窓ガラスが割れるなど広範囲に及んだ被害だが奇跡的に人間の死者は出なかった。

ただ、地下にあつた瑠諏の棲家に2人分の吸血鬼と思われるバラバラの遺体が発見された。

損傷がひどかったが落ちていた乱杭歯によって男女ペアだということがわかった。

女のほうは宮路由貴と判明、男はDNA鑑定のア斐なく身元不明

という扱いで片がついた。

上司の三宅は新しいアドバイザーを雇うことを決めた。

瑠諏が死んだと決め付けている。

三宅の言い方や態度で瑠諏との関係が希薄だったことが裏付ける。

いや、会話をしたことがあるのかさえ疑問だ。

サトウは男のほうの遺体が瑠諏ではないと確信している。

バラバラになった男の遺体は80パーセントの回収率で身長が155cm前後ではないかと推測された。

かなりの小柄だ。

瑠諏は180以上ある。

それに男の左腕の一部が発見されたが、刺青のようなペイントはなかった。

そのことを検死官に伝えたが、さっき見た調査報告書にサトウの意見は反映されていなかった。

あれから1週間。

瑠諏から連絡はない。

どうしたんだ、瑠諏……。

宮路由貴、そしてもうひとつの遺体となった吸血鬼となにがあったんだ？

考えれば考えるほど脳ミソが複雑に捻じ曲がる。

頭をさっぱりさせるためにサトウは缶コーヒーをあおった。

ガコン……。

「元気がいっすね」

自販機の取出口に手を伸ばしながら原田が声をかけてきた。

イチゴの上にミルクがたっぷりかかっている絵がプリントされ、見た目にも甘そうな乳飲料を手に取る。

「瑠諏は心中したんですかね？」

原田が無神経で無知な質問をしてきた。

調査報告書をちゃんと読んでいないのだろう。

「どうして、そう思う？」

原田の考えを正す意味をこめてサトウがやや語気強めに訊き返す。

「宮路由貴が瑠諏の家にいたってことはそれなりの関係だったということじゃないですかね」

原田の発想は短絡的だった。

「吸血鬼は自らの命を絶たない！」

サトウは苛立ちを抑えることができず、声を荒げた。

「す、すいません」

「いいかよく聞け。利己的で繊細な神経を持ち、複雑な悩みを抱える生き物だから自殺を正当化しようとする人間がおれからすればどうかしている」

「そ、そ、そうですね」

「人間以外の動物は本能的に自殺ということは考えもしないんだよ。人間が地球上で一番の下等動物さ」

「は、はい」

「調査報告書をさらっと流す程度に読むのではなく、その裏に潜むものをつかまないと真実に辿り着けないぞ」

サトウは人差し指で原田の心臓の辺りをトントンと突いてから缶コーヒーをゴミ箱に入れた。

「どこへ?」

刑事課とは逆方向に歩いていくサトウの背中へ原田が声をかける。

「決まってるじゃないか。瑠諏を捜しに行くんだよ」

サトウの言葉には凜とした決意が感じられた。

警察署から表に出たサトウは夜空に向かって思いをはせた。

瑠諏も同じ夜空を見ているのだろうか？

それとも血を舐めて淫らな人間の世界を観客席から見ているのだろうか？

ひよつとすると吸血鬼のアイデンティティーを探しに夜の街を彷徨っているのかもしれない。

“絶対に見つけてやる！”

サトウは独特な秩序が飛び交うAK地区へ足を踏み出す。

「警部補、待ってください！」

振り向くと原田が駆け寄ってくる。

「なんだ？」

サトウは不機嫌そうになる声を押し殺した。

「ぼくも溜諏を捜します」

「仕事は残ってないのか？」

「事務の仕事はいつでも速攻で解決できますから」と原田が微笑む。

「そうか」

サトウは穏やかな笑みをこぼした。

2人がA K地区の繁華街へ向かう足は自然と軽くなった。

エピソード

緑色の防塵塗装の床に落とした吸殻を踏みながら老人は小言を吐いた。

「いつまで待たせる気だ」

老人は倉庫の表で待機しているSPからの無線連絡を待ち侘びていた。

「剣未なら来ないかも」

後ろから女の声がして老人は視線を向ける。

倉庫の裏口から勝手に出入りできるのは限られた者だけ。

「どうしてじゃ？」

老人は顔を斜めに歪めて尋ねた。

「爆発事件のあと、すぐに姿をくらしちゃったわ」

「なぜ早く知らせない？」

「別に隠していたわけじゃないわよ。当然仕事に復帰すると思っ
ていたから」

「ワシとの付き合いが怖くなったのかのう」

「そうかもね」

2人は小声で笑った。

「そういえばまた血液による感染者が増えたわね。いいかげんにウ
イルスを特定できないのかしら」

女は月ごとに州政府の疾病対策課から死者数が発表される原因不
明の感染症のニュースを話題として持ち出した。

「あんなものまやかしじゃよ」

「どついでいってっ」

女は眉間に皺をひそめた。

「LIVE中継で顔面蒼白の患者が運ばれていくニュース映像は作りモノじゃ。人間には映画という古くから大衆を支えてきた文化があるからな」

「嘘のニュースをずっと流し続けているの？どうして？」

「経済苦などで自殺者が増え続けているのを隠すためじゃよ。その昔、武士に科した死罪に切腹という自決法があったらしいが、自殺者が年間に5万人を超えるなんてことはアメリカの威厳を損ねることになる」

「本当にそれだけ？」

女が疑いの眼差しで老人を見詰める。

「まあ、いまの説明はもしバレた場合のための表向きのごじつけで、本当は吸血鬼たちを騙すための作戦じゃ」

「吸血鬼に人間を襲わせないためにやってるのね」

「デマやプロパガンダを巧みに活用するのも我々の仕事だ。実に効果的じゃろ」

老人は気持ち悪いぐらいの満面の笑みで自画自賛する。

女はその顔を直視できず、今回会いに来た目的を告げることにした。

「ところで……」

「わかっておる。報酬はそこじゃ」

老人が指をさした先には赤い色の箱がひっそりと置かれていた。

「わあ、重い。金かしら？」

女は喜びを抑えながら箱の上蓋を持ち上げた。

「特殊能力を持った吸血鬼の情報を仕入れてくれたお礼に今回はたくさん色をつけておいた」

箱の中身はビン型で黄色い果皮に赤褐色の斑点がついた果物。

「なに、これ?!」

「知らんのか。洋ナシじゃよ」

「えっ」

「篠田レミ、君のように人間と吸血鬼の間をウロウロする者は“用なし”ということじゃ」

老人はすでに銃口を向けていた。

途端に乾いた銃声が倉庫内に響く。

「この世で最期に聞いたのがジイさんのつまらないダジャレで悪かったのお〜」

頭から血を流して倒れている篠田レミを哀れむことなく、老人は視線を降り見下ろす。

「知事、おケガは？」

表を見張っていたSPが銃声を聞きつけて飛んできた。

「大丈夫だ。それより掃除を頼む」

「はい」

「これからもっと忙しくなるぞ。なにせ吸血鬼どもの一斉浄化がはじまるんじゃないかな」

日本州知事が享樂する笑いは延々と続いた。

【終幕】

解説

最初から最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございました。

そして、お疲れ様です。

まず主人公の瑠諏^{ルス}ビンというヘンテコな名前ですが、最初の吸血鬼小説といわれる作品（1819年「vampire」ジョンポリドリ作）に登場する吸血鬼がルスビン卿という名前らしいのです。

吸血鬼の話を書こうと思ったとき、この世で初めて吸血鬼が登場した原型となる作品を自分なりに探してみました。

ただし、あくまで赤いからすが調べた範囲なので当てにしないでください。

ちょっと読んでみたい気がしますけど、とても古い作品なので本は現存してないでしょうね。

漢字は適当に選んでつけました。

そして「吸血鬼は淫らな舞台を見る」という小説を書いた経緯ですが、ぼくの中には吸血鬼が出てくる映画や小説は不滅というひねくれた概念があります。

これからも吸血鬼が出てくる物語は尽きることなく生み出される
と思いますから。

本当は人間と吸血鬼が戦争をするなんて構想もあつたのですが、
描写が残酷すぎてしまう恐れがあつたので却下。

近未来の物語で第三次世界大戦などが勃発して市民の貧相な暮ら
しが描かれるというパターンはどうも好きになれなくて、それほど
吸血鬼に怖さを感じさせない時代背景にしました。

人間の刑事と吸血鬼がコンビを組んで難事件を解決していくとい
う発想のほうがオリジナリティもあつていいかなと思つたわけです。

結末は自分なりには決着をつけたつもりですが、不満な方がいた
らごめんなさい。

この世で一番怖いのは人間という根底があつてあのようなラスト
にしました。

地球を支配しているのは人類。でも、その人類がこのまま地球を
好き勝手に使つていいものだろうかという疑問をこの小説にぶつ
けました。

吸血鬼は宇宙人だったという発想もそこから生まれました。

そして、もうひとつの裏テーマとして“自殺”も匂わせましたが、説教っぽくならない程度に盛り込みました。

実はこの作品の続編も頭の中にはちよこつとだけあります。

サトウ警部補が瑠諏ビンの影を追い、とんでもない事件に巻き込まれる……とか、篠田レミと幼い頃の瑠諏ビンとのエピソードなどなど。

では、次回作であえる日を願って、サヨウナラ〜

¥()、()、()、()

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6235f/>

吸血鬼は淫らな舞台を見る

2010年10月28日08時34分発行